秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

第 2 号

1987年 3 月

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県埋蔵文化財センター

研　究　紀　要

第　2　号

1987年３月

秋田県埋蔵文化財センター

序

秋田県埋蔵文化財センターは昭和56年の発足以来、県内各地の埋蔵文化財の発掘調査とその報告書の刊行、研修会、報告会などの活動を実施してまいりました。

さらに、昨年からは研究発表の場として研究紀要を刊行し、職員の研究成果を多くの方々に活用いただくことを目指しております。

本誌第２号に掲載した「鹿角盆地に於ける古代土器群の様相」は、東北縦貫自動車道等の発掘調査の成果をもとに、鹿角地方の古代土器群の編年を目的としたものです。また「男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について」は、発掘資料ではありませんが、弥生時代のまとまりのある資料を紹介し、土器編年の見通しを述べたものです。

今後いっそうの研鑽を積み重ねて参りたい所存でございます。本誌が考古学研究の資料としてのみならず、埋蔵文化財調査のための資料としても広く活用されることを期待してやみません。

昭和62年３月31日

秋田県埋蔵文化財センター

所　長　齋　藤　養治郎

目　　次

鹿角盆地に於ける古代土器群の様相 ……桜　田　　隆（1）

男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について……児　玉　　準（35）

鹿角盆地に於ける古代土器群の様相(I)

桜田　　隆

目　　次

1　はじめに
(1)　鹿角盆地の位置と地形　　(2)　古代史上の鹿角
(3)　鹿角盆地に於ける古代土器研究史抄
2　鹿角盆地内各所出土土器群の様相
(1)　万谷野遺跡　(2)　鳥野遺跡　(3)　高市向館跡
(4)　下乳牛遺跡　(5)　一本杉遺跡　(6)　中の崎遺跡
3　土器群の変遷と編年上の諸問題　〔以下(II)〕
(1)　土器群の変遷
(2)　編年上の諸問題
4　まとめ

1　はじめに

(1)　鹿角盆地の位置と地形　(第1図)

秋田県の北東部に位置する鹿角盆地(註)は,「青垣山を巡らす鹿角の地」といわれたように，東側を大森，五の宮嶽，北の林，皮投岳，中岳などの急峻な奥羽脊梁山地に，西側を高森,水晶山,三ノ岳，大森山，土筆森などのややなだらかな高森山地に囲まれた南北に細長い盆地である。盆地縁辺寄りを南側から流下する米代川は，岩手県四角岳にその源を発し，湯瀬渓谷を曲流したあと，八幡平から流れくる熊沢川・夜明島川と，五の宮嶽から流れくる歌内川・浦志内川を合せながら北流を続け，盆地中央の花輪・柴平地区で福士川・乳牛川・不動川・間瀬川・草木川を，盆地北部の毛馬内地区で十和田湖付近から流れくる大湯川と青森県境の坂梨峠付近から流れくる小坂川を合流させたあと，流れを西方に変え，大館盆地に流れ出る。

この米代川と米代川に流入する水系の両岸と盆地の内縁には数段の段丘が発達しているが，多くは十和田火山起源の火山噴出物の流入堆積と，盆地内の大小河川の浸食・開析・下刻作用を受けたものである。盆地中央部と東南部では段丘の一部を被覆する扇状地堆積も認められる。

周囲を山々に囲まれ孤立しているかのように見える鹿角盆地であるが，交通の要地であり，

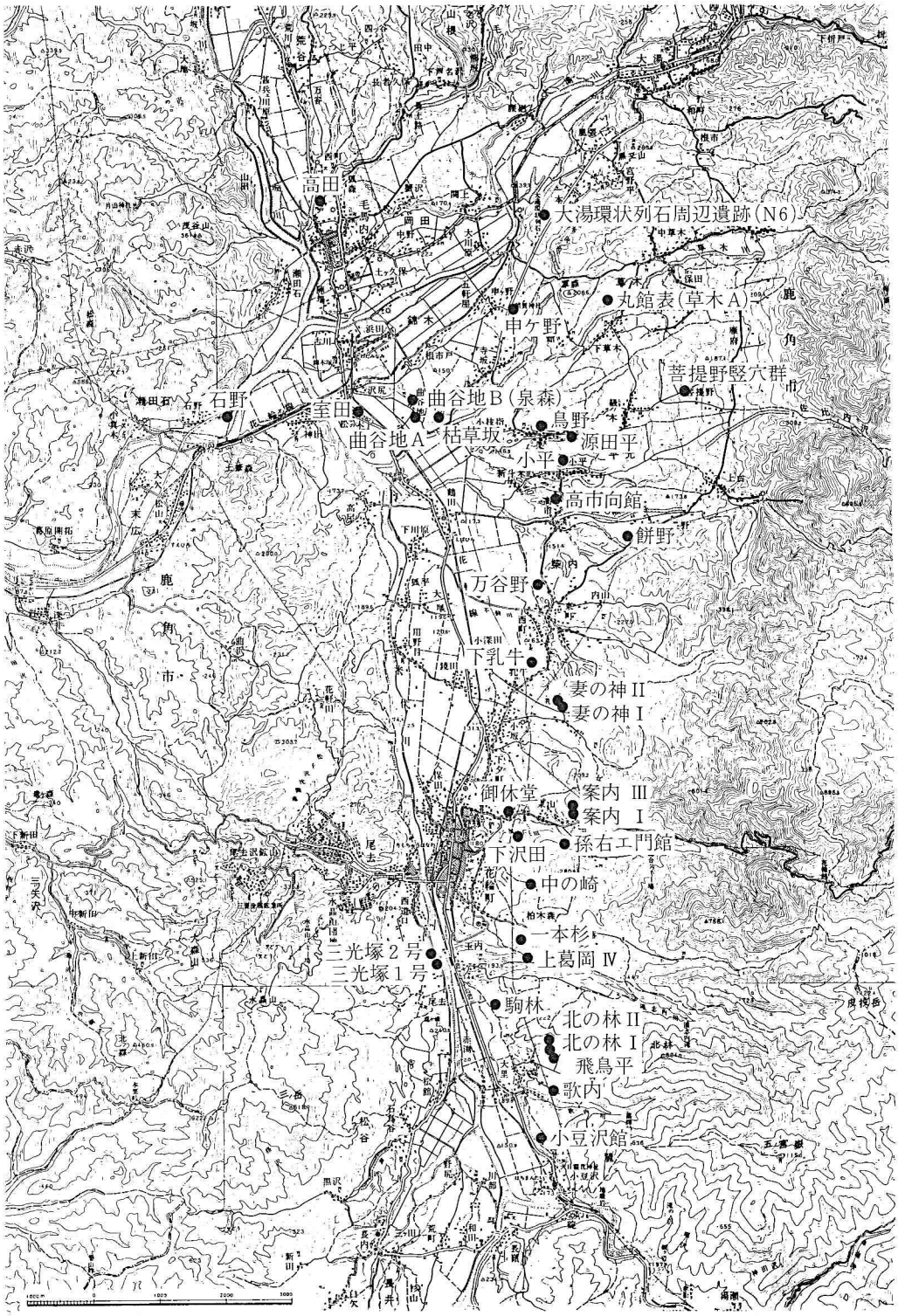
文化的にも閉鎖的な環境ではない。

註　「鹿角盆地」と言う用語については，地理学・地質学等の学術論文に於いても「花輪盆地」と呼称しており，それに従うべきとする意見が多い。「花輪盆地」とは盆地の主邑「花輪」に由来するが，「鹿角」は，古代の「上津野」からの転化であり，その「上津野」とは，「米代川上流の平地」の意であり，地理的位置も表現できる用語であることから，あえて「鹿角盆地」とした。

(2)　古代史上の鹿角

鹿角地方が，古代史上に登場するのは，元慶２(878)年に律令体制に対する現地住民の不満が爆発し，律令体制の出先機関である秋田城・邑を攻め焼いた住民闘争に参戦した12カ村の１つ「上津野」としてである。

参戦した12カ村は『三代実録』に，上津野・火内・楹渕・野代・河北・腋本・方口・大河・提・姉刀・方上・焼岡とあり(註１)，米代川上流から上津野・火内・楹渕・野代の順に並べられているのは，地理的位置を強く意識した記載となっている。この住民闘争を抑圧するために，律令中央政府から派遣された小野朝臣春風・坂上大宿弥好蔭等は，北上川を北上するように陸奥国を通過し，分水嶺から米代川沿いに下り，上津野に入って説得し，その後秋田の営に至っている。このことは，上津野が，陸奥・出羽両国を結ぶ交通路上にあり，古くから認識されていたことを物語っている。これを傍証するものに，地元で「古墳」と呼ばれている奈良・平安時代の墳丘墓があげられる。この「古墳」は，秋田県北部では鹿角盆地に確認されるのみであり，岩手県北西部の「古墳群」の影響を強く受けたものと解釈される。鹿角盆地内には，三光塚１号・２号，高田，石野，曲谷地Ａ･Ｂ，枯草坂，申ケ野の８カ所があげられるが(註３)，三光塚１号・２号と申ケ野を除くと，米代川・大湯川・小坂川の合流する地区の周辺に存在する。米代川・大湯川・小坂川を遡上し，分水嶺を越えると北上川・馬渕川・平川に連なることから，この合流地区は，鹿角盆地の中でも極めて重要な位置を占めている。この地区は，近世の絵図(註４)(第２図)にもみられるように，米代川の氾濫原にあたり，肥沃な土地であったことがうかがわれる。鹿角盆地の中では，この地が早くから拓かれ，それに伴って自然堤防上に「古墳」が築造されたと考えられる。弘仁期に，邑良志閇村の吉弥候部都留岐と貳薩体村の伊加古等が長い間争っていたのは(註５)，この肥沃な上津野をめぐってのことではないかと考えられている程，要衝の地である。古代の土器のうち，奈良時代の所産と考えられる土器は，この地区の近くに見られ，平安時代の土器は，より南側に多く出土していることは，「開拓」の進渉を示すものとも思われる。


高田
大湯環状列石周辺遺跡(N6)
丸館表(草木A)
申ケ野
菩提野竪穴群
石野
室田
曲谷地B(泉森)
曲谷地A
枯草坂
鳥野
源田平
小平
高市向館
餅野
万谷野
下乳牛
妻の神II
妻の神I
御休堂
案内 III
案内 I
孫右エ門館
下沢田
中の崎
一本杉
上葛岡 IV
三光塚2号
三光塚1号
駒林
北の林II
北の林I
飛鳥平
歌内
小豆沢館
鹿
角
市

第1図　遺跡位置図

註

1　『三代実録』元慶２年７月10日条

2　曲谷地Ｂ遺跡は，別名泉森と呼ばれ，８世紀前後の直刀が出土している。泉森は，明治年間に蝦夷森を改称したものである。

3　柳沢清志「古代の鹿角」『鹿角市史』第１巻　1982年（昭和57年）

4　盛岡市中央公民館蔵『花輪通代官所絵図』（元文４年）の部分複写である。

5　『日本後紀』弘仁２年７月29日条

第２図　花輪通代官所御絵図〔元文４(1739)年〕(部分)にみる古地形

(3)　鹿角盆地に於ける古代土器研究史抄

鹿角盆地における古代土器研究の第１歩となったのは，明治34年12月中旬に松の木在住の佐藤定吉氏が発見した枯草坂遺跡の「古墳」から出土した土器である。この土器は，毛馬内に帰省中の内藤湖南（虎次郎）博士が大正元年８月20日付の文に「斎部土器各種」と記されている。(註1) 明治34年から大正元年９月まで７回にわたり調査された枯草坂古墳の出土遺物の一部は，東京帝室博物館に寄贈陳列されていたが，その遺物に対し，高橋健自博士が考察を加えている。(註2) 土器に関しては，「陶器は小残片に過ぎざれども，其形など，知るべからざれども内に例の青海波の如き痕あるものあれば可なり，大いなるものありしなるべく土器も亦小残片なれば詳かならざれども石器時代遺物に類し，内１片は模様さへありて確かに石器時代のものなりとす。然れども是等陶器及土器残片は固より安全なると副葬せしにあらずして最初より封土中に混在せしものなるべし，果たして，然らば，これらは，此のふん(ママ)を築きし以前に破壊して遺棄せられ

しものならん」と記している。そしてこの古墳の築造年代と被葬者について触れ，「鹿角の地は元「上津野」と書し，三代実録元慶２年の条に見えたれば，大和民族の拓殖が彼の地方に及びしは平安朝なるべく，随って単純に考ふれば此の古ふんは将に之を紀念すべき遺跡なるべく想はる。然れども元慶の比内地より彼の地方に入り込みし，純大和民族がなほ，玉の御統を着装しつゝありしとは思はれねば，これらの造物は，夙に大和民族に接触し熟化せるえぞ即ち俘囚の輩が，大和民族より受得たりしものにあらざるかと思はるゝなり。（中略）今回発見の勾玉，大分の類が古く彼等の手に伝はりしは蓋しかゝる関係に基きしものならんか。果して此の如くんば，これらの物を所持せしは，熟之夷中一方の長たりしものなるべく，大和民族の多くが頸玉など用ひざるに至り，しかも元慶より以前に於て彼れが死體を葬るに際し，邦人の風に倣ひふん（ママ）を築きてこれらを副葬せしものならんか。要之，鹿角の地は，大和民族が公然正式に入り込みしは，藤原攝関の初世なれば，単に古ふんは大和民族の遺跡なりとの前提の下に此の地の古ふんを解釈せば，当時或はその以後のものと断ぜざるべからず，然れども勾玉の類が当時尚ほ，邦人の着装せしものとは想はれざるなり。是を以て余が，如上の仮設（ママ）を以て是が解釈を試みたるに過ぎざるなり」と記している。『秋田県史考古編』（註3）により，枯草坂遺跡から出土した土器が，土師器と須恵器の破片であったことがわかる。

昭和４年10月に浅井末吉（小魚）氏が，１人の農夫から俗称菩提野原に竪穴らしいものがあることを聞いたのが発端となり，翌５年４月に浅井氏が５個の竪穴の分布を調べ，５月18日に木村善吉氏と共に，新たに７個の竪穴を発見し，２個の竪穴を発掘調査している。（註4）その結果，竪穴の南方築土の中央部に「竈址」を検出し，第２号竪穴から33点，第３号竪穴から41点の土器片の出土をみた。第３号竪穴出土の底部土器片には「全面に木の葉の壓痕歴然たるものある一事」，「各号竪穴出土の土器片は焼成度概して弱く，色澤は外面赤褐色、内面灰色であって，すべて無文ではあるが縦に全面に刷毛目様の細き擦痕を認めることが出来る。」としている。また，この遺跡について，「私は，竪穴遺跡一少くとも東北地方の一は，その由来するところアイヌ族にありとするものであるが，後代金属文化の流入と相前後して，大和民族が次第にアイヌ民族を駆逐しながら，或は竪穴を占據し，又は新たに土着して固有の生活を営むだ。更に，後世生活様式が一変するに及んで，全くこの竪穴生活を廃したものであらうと考えてゐる。」と記している。なお「竈址」という名称は木村善吉氏が仮命名したものであるが，古代の竪穴の付設物に対する用語として定着していることは，学史的に評価される。この調査において，古代の竪穴住居跡に竈址が付設されることが判明したことと，鹿角地方の土師器が図示されたことの意義は大きい。その後，昭和26年８月２日から３日間後藤守一氏が大湯環状列石調査に関連して，火山灰層の比較検討のため，第９号竪穴を発掘調査した。（註5）「床面からは原形を考定しがたい鉄器残片と土器破片とを発見したし，（中略）土器片の中，これを接合して形をなした

ものもある。椀形のものであり，外形からいえば，関東地方の鬼高式に近似している。底に木葉文があり，その椀の１の内面には黒漆を一面に塗附している。これらの土器が奈良時代又はそれに接する飛鳥時代頃のものであることは問題がないだろう。」と結論している。竪穴と火山灰層の関係については，「(略) 火山灰層の堆積ができたのちに，腐植土層が20㎝位の厚さに堆積した時に，この竪穴の掘鑿が行われたことになる。かくしてこの調査によって，21年の秋の調査の時から抱いてきた疑問，即ち火山灰層の堆積は奈良時代以後のことであるかもしれないということは根も葉もないことだということになった。」と結論づけ，所謂大湯浮石層が，「奈良時代より縄文式文化時代に近い年代の堆積」と考えている。この昭和26年の発掘調査は，鹿角盆地における考古学研究に大きな影響を与えたものであり，重要である。

昭和30年４月20日から２週間にわたって行われた小枝指七館遺跡の調査では，「須恵器片，土師器片が各館址の包含層および耕土層からかなり多量に得られ」ているが，館址と時期を異にするということで記載は省略されている。(註6)

昭和30年代に倍賞三雄氏が，万谷野で土師器を発見している。倍賞氏の談話と考古学研究者からの倍賞三雄氏宛の書簡によれば，弥生式土器あるいは，関東地方の鬼高式の土師器，と土器の認識が変化しており，当時の古代土器研究の現状が推測できる。坏形・甕形・壺形の各器種がまとまって出土したのは，鹿角盆地では初めてのことであり特筆されよう。

昭和44年から昭和52年まで，東北縦貫自動車道建設に伴う遺跡分布調査(註7)，大湯環状列石周辺遺跡の緊急分布調査(註8)，鹿角大規模農道建設に伴う遺跡分布調査(註9)，国営総合農地開発事業に伴う鹿角地区遺跡分布調査(註10)，圃場整備に伴う遺跡分布調査(註11)が実施され，古代の土器も「古墳期」，「平安時代」などと記されるようになった。

昭和47年８月３日から４日間実施された鹿角大規模農道遺跡分布調査では，餅野遺跡が，県立十和田高等学校社会科同好会によって発掘調査された(註12)。竪穴住居跡の埋土上部に大湯浮石層が凹レンズ状に堆積しており，竪穴内部から回転糸切り痕のある坏形土師器（内面黒色処理したものとしないものがある。）篦起こし（あるいは篦削りか）した甕形土師器，木葉痕のある甕形土師器が出土している。この調査報告書で重要なのは，奥山潤氏の教示として竪穴住居跡埋土の上部に堆積する大湯浮石層に大湯浮石層特有の流紋岩の破片がないことから，第１次的降下物ではなく，竪穴の外にめぐらした土堤が廃棄後流れこんだものとの考えを示していることである。

昭和48年に実施された鹿角大規模農道遺跡分布調査では，丸館表遺跡が発掘調査された(註12)。竪穴住居跡１棟が調査され，坏形土師器，甕形土師器，須恵器片が出土している。

昭和52年７月25日から13日間にわたり，大里勝蔵・庄内昭男両氏により発掘調査された鳥野遺跡と源田平遺跡では，計３棟の竪穴住居跡が検出された(註14)。鳥野遺跡の第１号竪穴住居跡には

大湯浮石層が埋土中半に凹レンズ状に堆積し，かまどとその周辺から，甕形土師器・壺形土師器，内面を黒色処理した坏形土師器口縁部破片が出土している。

源田平遺跡では，大湯浮石層が竪穴住居跡の埋土の上方に堆積している。第1号竪穴住居跡からは，坏形土師器・坏形須恵器・甕形土師器が，第2号竪穴住居跡からは，回転糸切り痕のある坏形土師器と，甕形土師器・甕形須恵器が出土している。

調査者は，鳥野遺跡第1号竪穴住居跡の年代を8世紀後半の奈良時代末，源田平遺跡の2棟の竪穴住居跡は，10世紀後半から11世紀初めの平安時代後半と推定した。また，大湯浮石層の年代を10世紀後半以降，平安時代末と推定した。古代の遺物に具体的に年紀を与えたのは，鹿角盆地内では初めてのことであり，広範に分布のみられる大湯浮石層に対し，後藤守一氏が，「根も葉もないこと」と否定した奈良時代以後の年代を与えたことは注目される。

冨樫泰時氏は，鳥野遺跡・源田平遺跡・菩提野竪穴遺跡の調査成果をもとに，各遺跡遺構への大湯浮石層の堆積状況及び出土遺物から，鳥野→源田平→菩提野という編年を組み立てた。(註15) 鹿角盆地では初めての編年であり，土器型式編年と降下火山灰編年の相互協力による考古学編年は大いに注目され，この鳥野・源田平遺跡の調査成果と，冨樫泰時氏の編年は，以後の年代観に大きな影響を与えた。

昭和52年10月3日から2週間実施された小平遺跡の発掘調査では，第4号竪穴住居跡から墨書された坏形土師器や，甕形土師器・坏形須恵器・甕形須恵器が出土した。(註16) 坏形土師器は，底部に回転糸切り痕を残しているが，切り離し後，底辺部に削り調整したもの，内面に篦みがき調整を施し，黒色処理したもの，轆轤調整しただけの赤褐色の土器と3分類し，源田平遺跡の竪穴住居跡の出土土器よりは古く，10世紀に入った年代が考えられるとしている。

東北縦貫自動車道建設に伴う事前調査が，昭和54年から県教育委員会により大規模かつ長期にわたって実施された。古代の遺構・遺物を検出した遺跡は，歌内遺跡(註17)・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡(註18)・北の林Ⅱ遺跡(註19)・上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡(註20)・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡(註21)・中の崎遺跡(註22)・妻の神Ⅰ遺跡(註23)・孫右エ門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡(註24)・はりま館遺跡(註25)・白長根館Ⅰ遺跡・丑森遺跡(註26)の16遺跡である。鹿角市教育委員会も学校建設等の事前調査として，御休堂遺跡(註27)・新斗米館跡(註28)・高市向館遺跡(註29)・天戸森遺跡(註30)・下沢田遺跡(註31)の調査を実施した。

また，県道建設に伴う案内Ⅳ遺跡・案内Ⅴ遺跡(註32)の発掘調査が昭和57年・58年に実施された。

昭和54年から昭和58年までの5年間に古代の遺跡が23か所発掘調査されたことになり，調査に追われているためか，これらの報告書からは詳細な分析・考察は出現しなかった。

わずかに桜田が，大館・北秋田地方，青森県津軽地方の発掘調査成果と東北縦貫自動車道関係の発掘成果をもとに，米代川右岸から北方の津軽地方に底面に砂粒を付着させる甕形土師器が分布していることを，口頭発表したにすぎない。(註33) この発表は，恒常的に律令政府に隷属しな

かった，米代川以北・津軽地方の住民が生産・消費した甕形土師器に「地方型」が出現すること，砂粒の付着に数種が認められることを述べたものである。この甕形土師器は，古代の土器の出土例が少ないにもかかわらず，「大館地方に普遍的に出土する土器」と奥山潤・板橋範芳両氏が看破した土器であり(註34)，その分布範囲も，冨樫泰時氏の「円筒土器文化圏の意味するもの」(註35)に論じられた範囲内に入るもので，新味はないが，広域火山灰と共に遺跡相互の比較研究時に１つの指標となり得る土器として注意を喚起した。

昭和57年には，『鹿角市史』第１巻が刊行され，鹿角市内各地から出土した遺物が図示された(註36)。昭和58年には，藤井安正氏が，「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」という標題で資料紹介をしている(註37)。この中で文様が描かれている甕形土器は，北海道および青森県の遺跡から出土する擦文土器に類似するもので，文様については擦文土器の影響を強く受けたものと推定している。鹿角盆地で出土した遺物と擦文土器の関係について言及した最初の文である。

庄内昭男氏は，『秋田考古学』38号に「鹿角地方の土師器」という標題で，鹿角市内の高市（本項では「万谷野」として扱っている。）・長野・源田平・上川原・高沢の各地から出土し，市内各所に保管されている11点の古代の土器を紹介し，８世紀後半から９世紀初頭という年代を与えている(註38)。

鹿角盆地における古代の土器に関する報告・論文で，土器の分類・編年に言及しているものは少なく，積極的に年代を記載しているのは庄内昭男・藤井安正両氏である。他は，年代決定に慎重なのか，あるいは決定根拠をもたないために消極的なのか，単に「平安時代」「桜井第Ⅱ型式」「表杉ノ入式」に終始している。

註

1．『猿賀神社縁由誌錦木塚其他遺跡誌綴り』の中に原本があり，これを昭和60年２月に複写した鹿角市立十和田図書館の蔵書による。

2．錦木公民館編『昭和５年版曲田慶吉先生遺稿　錦木村郷土史』の「第12節枯草坂の古ふん発掘の次第」による。

3．大和久震平・奈良修介著，秋田県編集『秋田県史考古編』　1977(昭和52年)

4．木村善吉「陸中大湯町竪穴調査報告」『人類学雑誌』45巻９号　1930(昭和５年)

5．後藤守一「菩提野の竪穴跡」『大湯町環状列石』埋蔵文化財発掘調査報告第二　文化財保護委員会　1953(昭和28年)

6．江上波夫・関野雄「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡」『館址』　1958(昭和33年)

7．a．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書―十和田町・小坂町地区―』秋田県文化財調査報告書第20集　1970(昭和45年)

b．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書―花輪町・尾去沢町・八幡平村地区―』秋田県文化財調査報告書第24号　1972(昭和47年)

c．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書―八幡平～十和田錦木―』

秋田県文化財調査報告書第56集　1978(昭和53年)
8．a．秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』1974(昭和49年)
b．鹿角市教育委員会『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』鹿角市文化財調査資料6 1976(昭和51年)
c．冨樫泰時『大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書(昭和51年度)』鹿角市文化財調査資料7 1977(昭和52年)
9．a．秋田県教育委員会『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集　1973(昭和48年)
b．秋田県教育委員会『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第30集 1974(昭和49年)
10．秋田県教育委員会『国営総合農地開発事業鹿角地区遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第　集　1977(昭和52年)
11．秋田県教育委員会『圃場整備地域内（鹿角北東地区）遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第54集　1978(昭和53年)
12．a．秋田県立十和田高等学校社会科同好会「餅野遺跡」『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集　1973(昭和48年)
b．奥山潤・大里勝蔵・菅原洋『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第30集　1974(昭和49年)
13．a．奥山潤「丸館表遺跡」『鹿角市・小坂町大規模農道発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第29集　1973(昭和48年)
b．奥山潤・大里勝蔵・菅原洋『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第30集　1974(昭和49年)
14．秋田県教育委員会『鳥野遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財報告書第49集　1978(昭和53年)
15．冨樫泰時「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん』19号　1978(昭和53年)
16．鹿角市教育委員会『小平遺跡発掘調査報告』鹿角市文化財調査資料第10号　1979(昭和54年)
17．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書II―歌内遺跡―』秋田県文化財調査報告書第88集　1982(昭和57年)
18．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書III―鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林I遺跡―』秋田県文化財調査報告書第89集　1982(昭和57年)
19．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV―北の林II遺跡・上葛岡I遺跡・上葛岡II遺跡・小豆沢館遺跡―』秋田県文化財調査報告書第90集　1982(昭和57年)
20．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書V―上葛岡IV遺跡・駒林遺跡・案内II遺跡・猿ケ平I遺跡―』秋田県文化財調査報告書第91集　1982(昭和57年)
21．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI―猿ケ平II遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内III遺跡―』秋田県文化財調査報告書第99集　1983(昭和58年)
22．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII―柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡―』秋田県文化財調査報告書第106集　1984(昭和59年)
23．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VIII―妻の神I遺跡・乳牛平遺跡―』秋田県文化財調査報告書第107集　1984(昭和59年)
24．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IX―孫右エ門館遺跡・案内I遺跡・妻の

神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第119集　1984（昭和59年）
25．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ―はりま館遺跡・横館遺跡・大岱Ⅰ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第109集　1984（昭和59年）
26．秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ―館平館Ⅰ遺跡・館平館Ⅱ遺跡・白長根館Ⅱ遺跡・丑森遺跡・道合Ⅰ遺跡・道合Ⅱ遺跡・大岱Ⅱ遺跡・大岱Ⅲ遺跡・円川原遺跡・大岱Ⅳ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第120集　1984（昭和59年）
27．鹿角市教育委員会『御休堂遺跡』　鹿角市文化財調査資料19　1984（昭和59年）
28．鹿角市教育委員会『新斗米館跡―鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書―』鹿角市文化財調査資料16　1981（昭和56年）
29．鹿角市教育委員会『高市向館発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22　1982（昭和57年）
30．鹿角市教育委員会『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26　1984（昭和59年）
31．鹿角市教育委員会『下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27　1984（昭和59年）
32．秋田県教育委員会『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書―案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第115集　1984（昭和59年）
33．桜田隆「底面に砂粒を付着させる甕形土師器とその分布範囲について」『日本考古学協会第48回総会研究発表要旨』　1982（昭和57年）
34．ａ．奥山潤・板橋範芳『粕田遺跡』大館市教育委員会　1974（昭和49年）
　　ｂ．門間光夫・板橋範芳『細越遺跡緊急発掘調査概報』比内町教育委員会　1976（昭和51年）
35．冨樫泰時「円筒土器文化圏の意味するもの」『北奥古代文化』第６号　1974（昭和49年）
36．柳沢弘志「古代の鹿角」『鹿角市史』第１巻　1982（昭和57年）
37．藤井安正「鹿角市中花輪遺跡出土の刻文絵画土器」『考古風土記』第８号　1983（昭和58年）
38．庄内昭男「鹿角地方の土師器」『秋田考古学』38号　1984（昭和59年）

2　鹿角盆地内各所出土土器群の様相

鹿角盆地内で発掘調査あるいは遺物が採集された古代の遺跡のうち，万谷野・鳥野・高市向館・下乳牛・一本杉・中の崎の６遺跡を対象とする。資料の選択にあたっては，遺構の一括遺物を取り上げ，同一時期としての土器組成を把握するよう努めたが，出土状況の明確で良好な資料は僅少なのが現状である。

古代の土器のうち，「平安時代」の土器の類型化については器形・製作技法による変化が大きいことに着目し，「様式」の概念による土器の類型化を目的とし，各遺跡・各遺構内から出土した土器群を「ほぼ同時期に廃棄された土器の一群」として把握し，各遺跡・各遺構名をとって呼称することとした。(註)

本論をまとめるにあたり，報告書に掲載された土器を実見させていただいたところ，いくつかの土器の成形方法・調整技法について報告者と見解を異にした。土器に対する「事実誤認」

か，「見解の相違」かの論争は別としても，基本的事項に対しては，詳細に観察すべきである。

古代の土器を多く出土し，資料的価値が極めて高いにもかかわらず，その出土状況，調整技法等が不明確なため，報告書の「実測図」が必要な情報を十分に提供していない。そのため，再観察・再実測が必要となる場合がある。

註　この方法は，安部実・佐藤庄一「庄内地方平安時代土器編年図」『新青渡遺跡第１次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第67集　1983(昭和58年)を参考にした。

(1)　万谷野(まんやの)遺跡出土土器群　(第３図)

万谷野遺跡から出土した土器群は，正式な発掘調査で得られたものではない。しかし，所蔵者である倍賞三雄氏が採集されたもので，聞き取り調査の結果，１棟の竪穴住居跡，あるいは１基の竪穴遺構の中から採集したものと判断されることから，採集品ではあるが，資料の１つとして採用した。

本土器群は，既に『鹿角市史』第１巻に図示されているが，詳しい説明文が割愛されているので，説明を加えたい。また，庄内昭男氏により一部が『秋田考古学』38号に紹介されている。

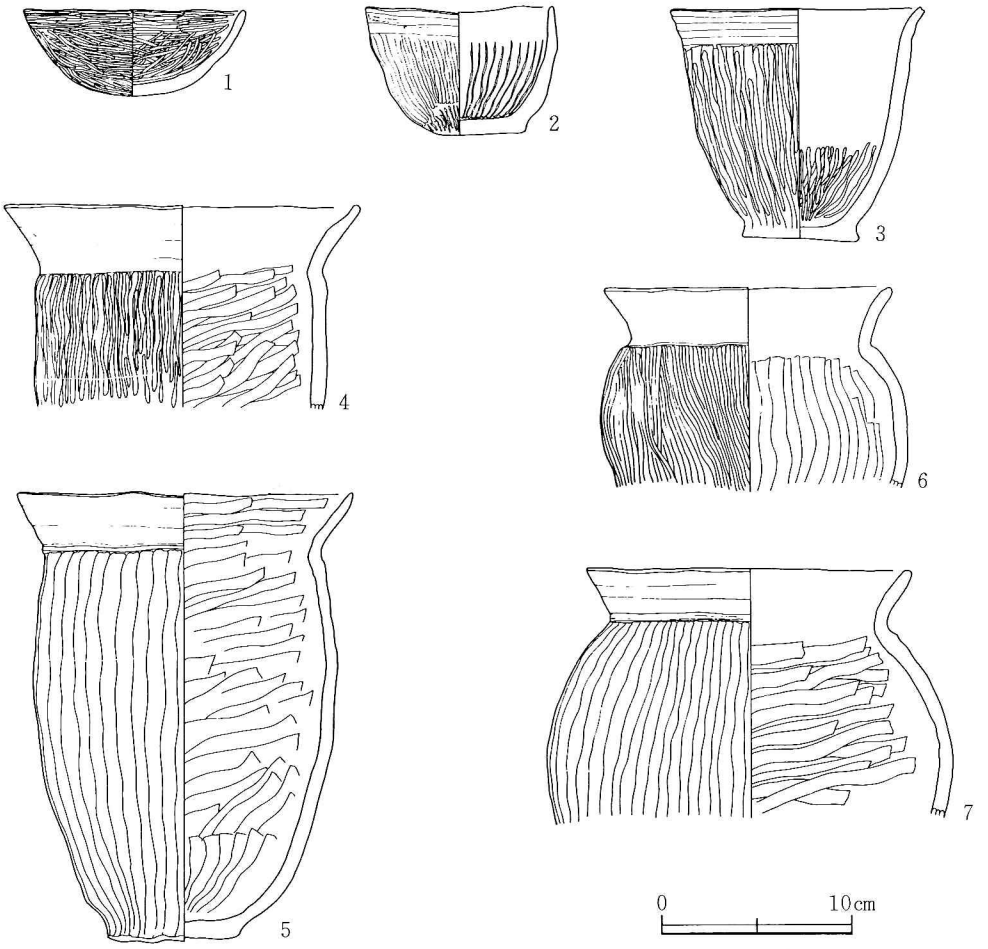
1．体部中央に両面から指で押圧して段を形成した痕跡を残す丸底の坏形土師器である。両面とも細かい篦磨き調整しているが，黒色処理を施していない。明褐色を呈する。口径11.2cm，高さ4.6cm。

2．粘土紐巻き上げ痕を外面に残す甕形土師器である。両面とも口縁部指など，胴部篦なでで調整されている。底部外面は平滑である。灰茶褐色を呈する。口径10.0cm，高さ6.9cm底径4.7cm。

3．口唇部を横方向に削るような篦なでをしている甕形土師器である。外面の口縁部は，横方向の篦なで，胴部は縦方向に篦なで後篦磨きして整形している。内面は，口縁部が指なで後部分的に篦磨きしており，以下は篦なで後，胴部下半から底部を放射状篦磨きしている。底部外面は平滑である。橙色を呈する。口径13.4cm，高さ12.1cm，底径5.1cm。

4．胴下半部を欠失し，口縁部を大きく外傾する甕形土師器である。外面は，胴部に縦方向の細かい篦磨き整形がなされ，内面は，胴部が横方向に篦なでがなされている。茶褐色を呈する。口径18.8cm，現高10.6cm。

5．頸部に弱い段をもち，口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。外面は胴部に縦方向の篦なで，頸部に横方向に削るような篦なでがなされている。内面は，全面篦なでがなされるが，胴部のなでは弱い。底部外面には，木葉の圧痕が認められる。茶褐色を呈する。



第３図　万谷野出土土器群実測図

口径17.5cm，高さ23.4cm，底径7.0cm。

６・７．胴部下半を欠失する壺形土師器である。球形の胴部と大きく外傾する口縁部との接合部の外面は，横方向にやや強く篦なでされている。胴部は，外面が細かい縦方向の篦なで，内面が６は縦方向に，７は横方向に弱い篦なでがなされている。いずれも茶褐色を呈する。６は口径15.3cm，現高10.8cm，最大胴径16.3cm。７は口径17.0cm，現高13.1cm，最大胴径21.2cm。

いずれの土器も胎土に，径0.1cm～0.3cm の砂粒を含み，焼成良好で堅緻である。器面調整に篦磨きあるいは細かい篦なでが多用され，成形時の巻上痕がほとんど認められない程，ていねいなつくりである。

万谷野遺跡では，丸底坏形・甕形(大・小)・壺形の３器種の土師器の組み合せが認められる。

(2) 鳥野(とりの)遺跡出土土器群 （第４・５図）

鳥野遺跡は，昭和52年に秋田県教育委員会が発掘調査を実施（担当者：大里勝蔵・庄内昭男）し，竪穴住居跡２棟（うち１棟は道路切り通し法面に露出）を調査し，７個体分の甕形土師器１個体分の壺形土師器，２個体分の甑形土師器や紡錘車等が得られた。しかし，坏形土師器はわずかに内面黒色処理された口縁部破片が出土したにすぎない。詳細は，報告書（秋田県教育委員会　昭和53年）を参照されたい。

その後昭和56年に鳥野遺跡の土地所有者である安保カヨ氏が，耕作の障害となる黒土中の粒状火山灰層（大湯浮石層）を除去中，石組のかまどを発見し，これの撤去も企てて黒土の落ち込み（竪穴住居跡）を掘り下げ中，２個体の坏形土師器，２個体の甕形土師器(第５図１～４)と多数の破片を発見，保管していた。

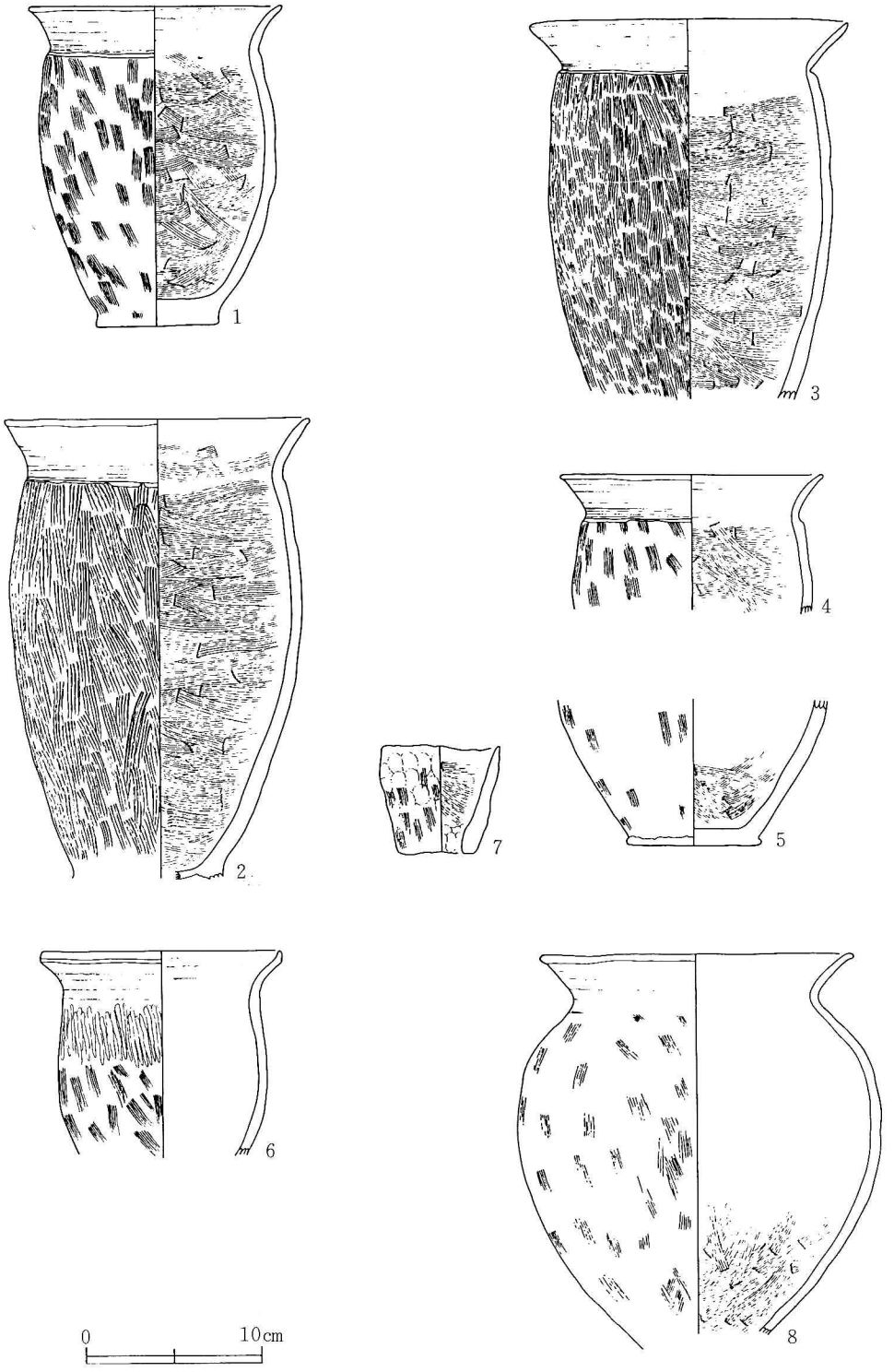
１．体部下半に両面から指で押圧して段を形成し，外面の上半部と内面を黒色処理した平底の坏形土師器である。両面とも細かい篦磨きがなされ，底部外面には篦なでがなされている。外面の下半は，にぶい黄橙色を呈する。口径15.1cm，高さ6.4cm，底径5.8cm。

２．体部中央からやや上に内面から指で押圧して段を形成し，外面の口縁部分と内面を黒色処理した平底の坏形土師器である。外面は口縁部が指なで，段部分が横方向の篦なで，その下方が横方向の篦磨きがされている。内面は，全面篦磨きされている。底部外面には細かい篦なでがなされている。外面は口縁部を除き浅黄橙色を呈する。口径12.0cm，高さ5.9cm，底径5.8cm。

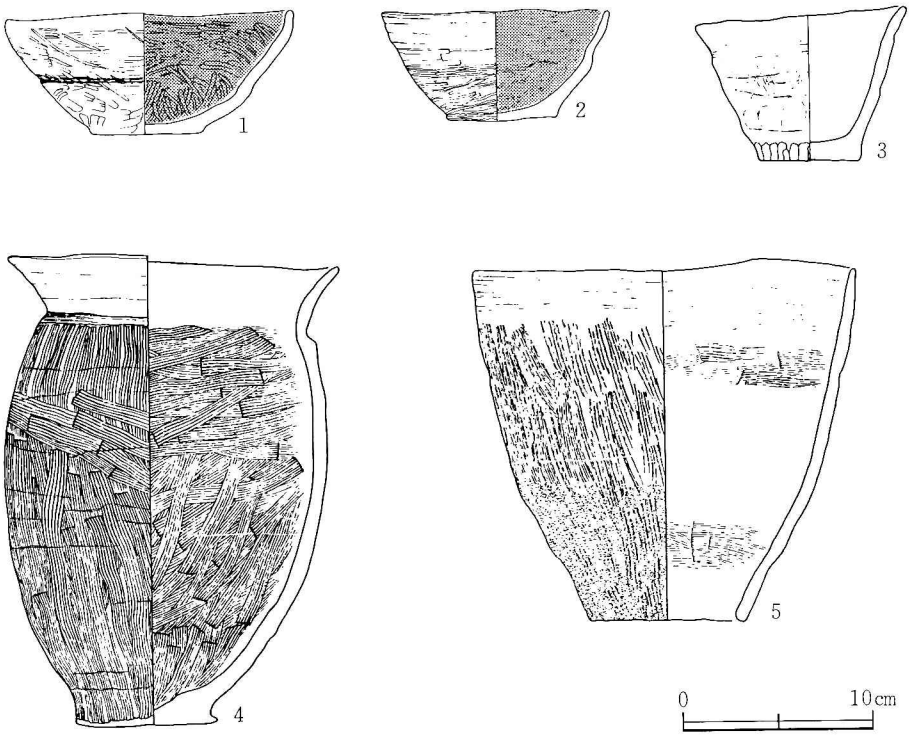
３．頸部に段が形成され，粘土紐巻き上げ痕が外面に残る甕形土師器である。外面の胴部には，楕円形の凹みが多く認められることから，紐巻き上げ後，内面から器壁を指頭で押圧した痕跡と思われる。この後，篦なでされている。底辺部は篦削りされている。内面は指でなでられているが粗い。底部外面は篦なでされている。橙色～にぶい褐色を呈する。口径11.1cm，高さ8.1cm，底径5.4cm。

４．頸部に段が形成され，口縁部が大きく外反する甕形土師器である。粘土紐巻き上げにより形成され，胴部は両面に縦方向（一部横方向）に篦なで（所謂「刷毛目状痕」を呈する）がなされている。底部外面は篦なでされている。橙色～にぶい黄橙色を呈する。口径17.6cm，高さ25.1cm，底径7.3cm。

鳥野遺跡の県教委調査時出土土器と安保カヨ氏発見土器は，甕形土師器の底部外面の木葉痕と篦なでの差異はあるものの他の器形的特徴，調整技法に差異を認めないことから，出土遺構



第４図　鳥野遺跡竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)



第5図　鳥野遺跡竪穴住居跡出土土器群実測図(2)

こそ違え，ほぼ同一時期のものと見なすことができる。第4図6の甕形土師器は，口縁部のつくり方のちがい，胴部上半の縦方向の篦磨きがなされるなど，他の甕形土器とは差異があるが第4図1・2と同じ出土状態であり，同時期の所産とすべきであろう。

器種構成は，平底内黒坏形・甕形（大・中・小）・壺形・甑形（大・小）の4種である。

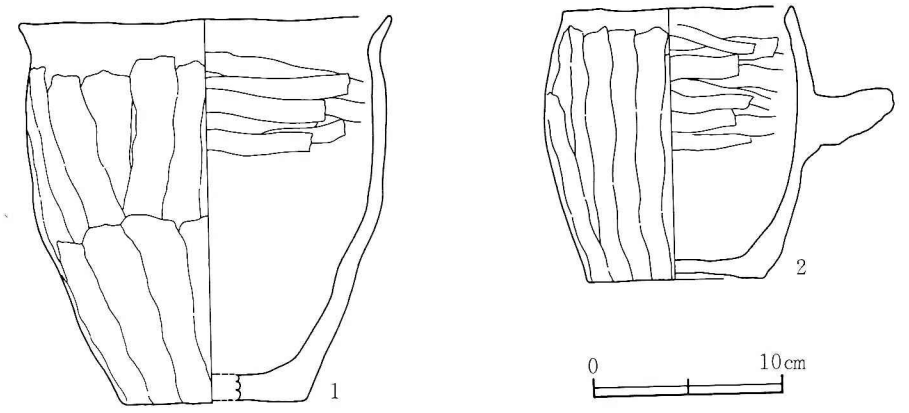
(3)　高市向館（たかいちむかいだて）跡出土土器群　（第6・7図）

高市向館跡は，鹿角市立花輪第二中学校建設に伴い，昭和56年に鹿角市教育委員会（担当：秋元信夫）が発掘調査を行ない，昭和58年に報告書が刊行された。

第10号竪穴住居跡出土土器群　（第6図）

かまど内から出土したものである。

1．口縁部が強く外傾する甕形土師器で，外面を粗い篦削り，内面の上半を篦なで調整した



第６図　高市向館跡第10号竪穴住居跡出土土器群実測図

ものである。暗褐色を呈する。口径19.5cm，高さ20cm，底径9.6cm。

２．胴張りが強く，口縁部内側を横方向に篦削りして口唇部をつくり出した甕形土師器で，胴部中半に把手が付けられている。胴部外面を篦削り，内面上半を篦なで調整している。褐色～暗褐色を呈する。口径12cm，高さ14.3cm，底径9.4cm。

第31号竪穴住居跡出土土器群　（第７図）

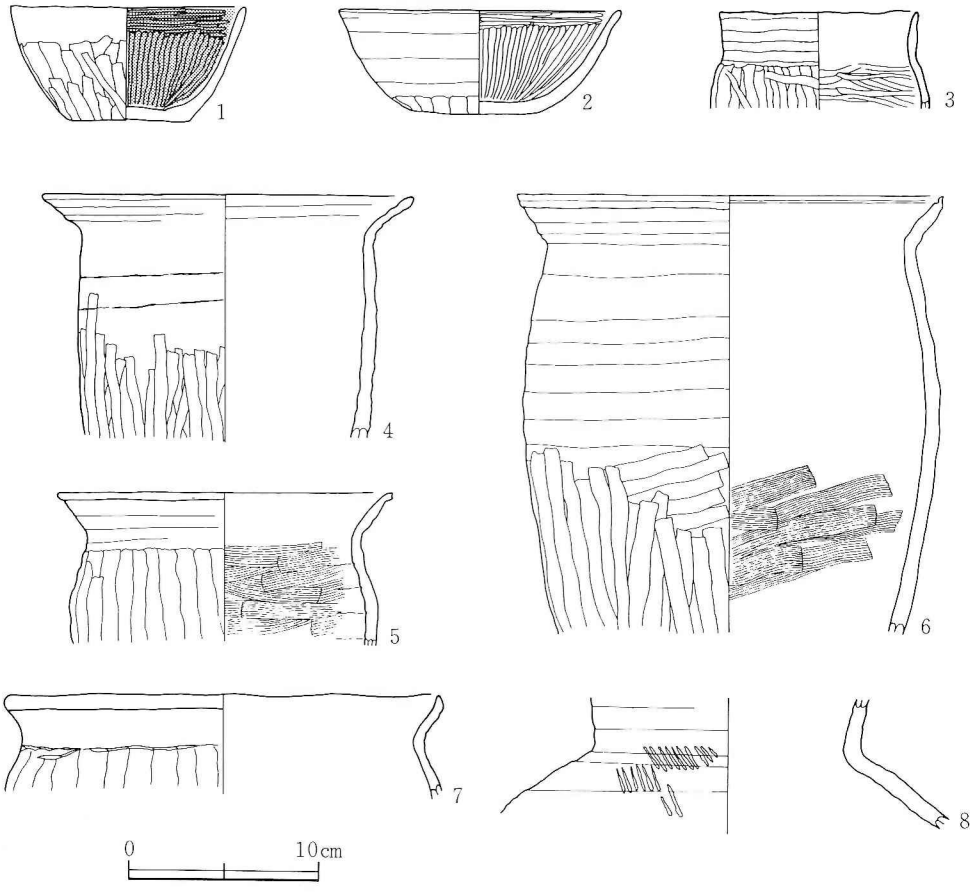
第31号竪穴住居跡は，自然営力による堆積を示す埋土の上半分に粒状火山灰（大湯浮石層）が厚く堆積しており，土器は，下半の埋土中，かまどの中からの出土である。

１．轆轤から静止糸切り技法により切り離されたあと，体部外面が縦方向に細かい篦削りされ，更に篦なでされている坏形土師器である。内面は，篦磨き後黒色処理されている。外面は，橙色～茶褐色を呈する。口径12.5cm，高さ6.0cm，底径6.3cm。

２．報告書では，「２は，ロクロ成形後，回転ヘラケズリを施したもので，底面に回転糸切り痕がみられる」と説明され実測図では底辺部手持ち篦削りの表現がなされた土器である。轆轤から回転糸切り技法で切り離された後，底辺部を縦方向の手持ち篦削りした，坏形土師器である。内面には，細かいていねいな篦磨きがなされているが，黒色処理はされていない。橙色～茶褐色を呈する。口径15.0cm，高さ6.0cm，底径6.5cm。

３．胴部上半の残存する甕形土師器である。口縁部がほぼ垂直に立ち上っている。胴部は両面篦なでされている。明灰茶褐色を呈する。口径10.6cm，現高5.1cm。

４．報告書では，「４は，ロクロ成形後，胴部にヘラナデを行なう長胴のもので，口縁部はやや強く外反する。」と説明された甕形土師器であるが，粘土紐巻き上げ痕が認められる。口縁部が大きく外傾し，胴部は縦方向に篦なでされている。茶褐色を呈する。口径19.6cm



第7図　高市向館跡第31号竪穴住居跡出土土器群実測図

現高12.8cm。

5．胴部内面に粘土紐巻き上げの痕跡が認められ，横方向に篦削りされた口唇をもつ。口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。胴部外面には縦方向の篦なで，内面には横方向の篦なで（所謂「刷毛目状痕」を呈する）がなされている。暗褐色を呈する。

6．報告書では，「ロクロ成形後，胴部外面にヘラナデ，内面に刷毛目調整を施したもので頸部で「く」の字状に外反し，口縁部でさらに直立する形態を呈し，胴部の張りの少ない長胴のものである。」と説明された甕形土師器である。大きく外傾する口縁部の口唇内側に横方向に1条の沈線を巡らし，内側を削りとることにより，口唇部が直立するように見える。胴部下半は，横方向の篦削りをした後，縦方向に篦なでしている。内面は，部分的に横方向の篦なで（所謂「刷毛目状痕」を呈する）がなされている。やや暗褐色～明褐色を呈する。口径22.5cm，現高23.0cm。

７．口縁部が外傾し，口唇部で立ち上る甕形土師器である。頸部には，粘土のたまりが見られる。胴部外面には縦方向の篦なでがなされている。やや暗褐色～明褐色を呈する。
口径22.4cm，現高5.5cm。

８．壺形須恵器の頸部から肩部にかけての破片である。肩部に所謂「平行叩き目」が認められる。対応する内面には「当て具痕」等は認められない。現高6.9cm。

いずれの土器も焼成良好で堅緻なつくりである。やや濃い茶褐色を呈する土師器が多い。

高市向館跡第31号竪穴住居跡の土器は，轆轤使用坏形土師器・甕形土師器・壺形須恵器の３器種によって構成されている。

(4)　下乳牛（しもちうし）遺跡出土土器群　（第８・９・10図）

下乳牛遺跡は，東北縦貫自動車道建設に伴い，昭和55年に県教育委員会（担当：熊谷太郎）が発掘調査を行ない，昭和59年に報告書が刊行された。

第１号竪穴住居跡出土土器群　（第８・９図）

粒状火山灰（大湯浮石層）が埋土中に凹レンズ状に厚く堆積する竪穴住居跡の１隅の床面上あるいは床面に敷かれた炭化板材上から，坏形土師器が重なり合うなどして集中出土した。

報告書では，37個体の坏形土師器，２個体の坏形須恵器，３個体の甕形土師器，１個体の鍋形土師器の他，石帯・櫛・皿形木製品が図示されている。また，土器観察表では，図示された37個体の坏形土師器全てが底部篦削りされ，そのうち３点が内面篦磨き・黒色処理され，４点が内面篦磨きされていると説明されている。色調は，浅黄橙色・灰白色・橙色・褐灰色・黄橙色・灰黄褐色・黒褐色・明褐色などを呈するとされている。

本稿では，36個体の坏形土師器を整形技法の違いなどにより６大別10細分した。

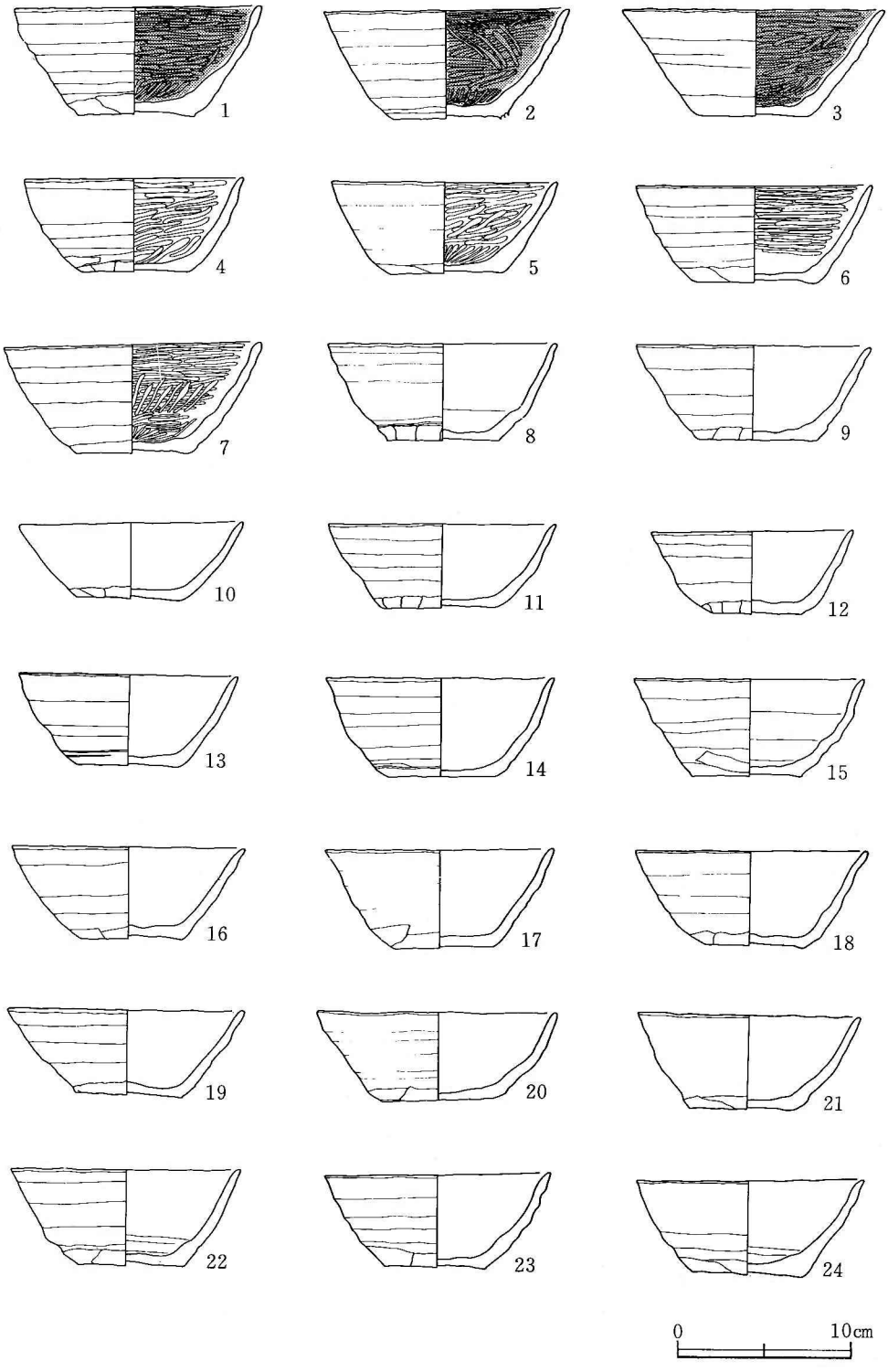
Ａ．轆轤から回転糸切り技法で切り離し，内面を篦磨き後，黒色処理した土器（１～３）
　　Ａ－１　切り離し後，底辺部に手持ち篦削り調整した土器（１）
　　Ａ－２　切り離した後，外面に何ら調整を加えない土器（２・３）

Ｂ．轆轤から回転糸切り技法で切り離し，内面を篦磨きした土器（４～７）
　　Ｂ－１　切り離し後，底辺部に手持ち篦削り調整した土器（４）
　　Ｂ－２　切り離し後，底辺部を回転篦削り調整した土器（５・６）
　　Ｂ－３　切り離し後，外面に何ら調整を加えない土器（７）

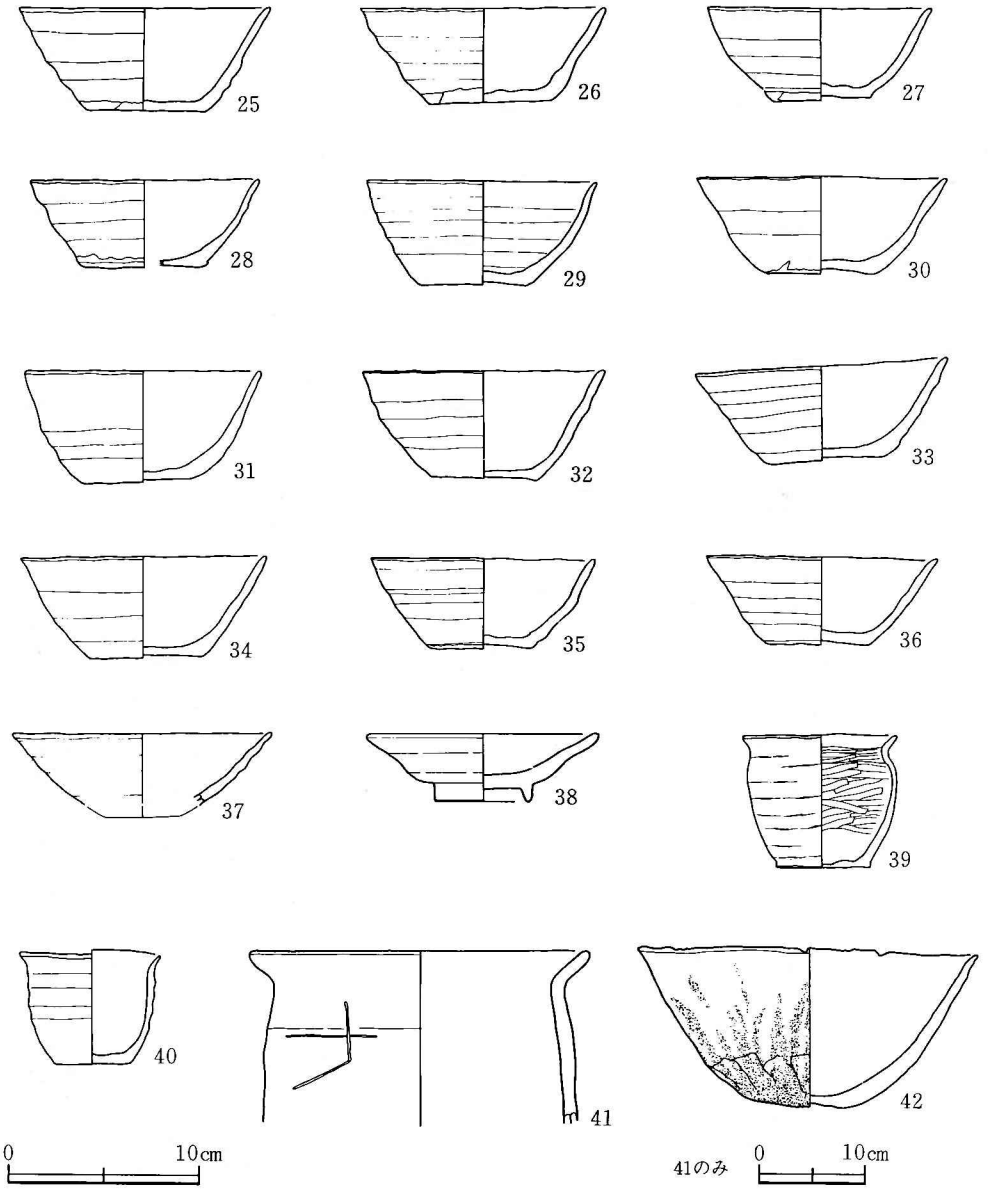
Ｃ．轆轤から回転糸切り技法で切り離し，底辺部に手持ち篦削り調整を加えた土器（８～12）

Ｄ．轆轤から回転糸切り技法で切り離し，底辺部に回転篦削り調整を加えた土器（13～27）

Ｅ．体部の外面のみに回転篦なで調整が加えられ，轆轤から回転糸切り技法で切り離された土器（28・29）



第8図　下乳牛遺跡第1号竪穴住居跡出土土器群実測図(1)



第９図　下乳牛遺跡第１号竪穴住居跡出土土器群実測図 (2)

Ｆ．轆轤から回転糸切り技法で切り離され，何ら調整の加えられない土器（30～36）

　Ｆ－１　内面に黒斑の付く土器（30～32）

　Ｆ－２　内・外面とも黒斑の付かない土器（33～36）

Ｆ－１・Ｆ－２は，器面に残る黒斑の有無が所謂「あかやき土器」の分別基準の１つになっていることから細分の１つに加えたものである。

（６・８・14・18・26・36）と（19・20・23・32）は，重なり合って出土した土器である。

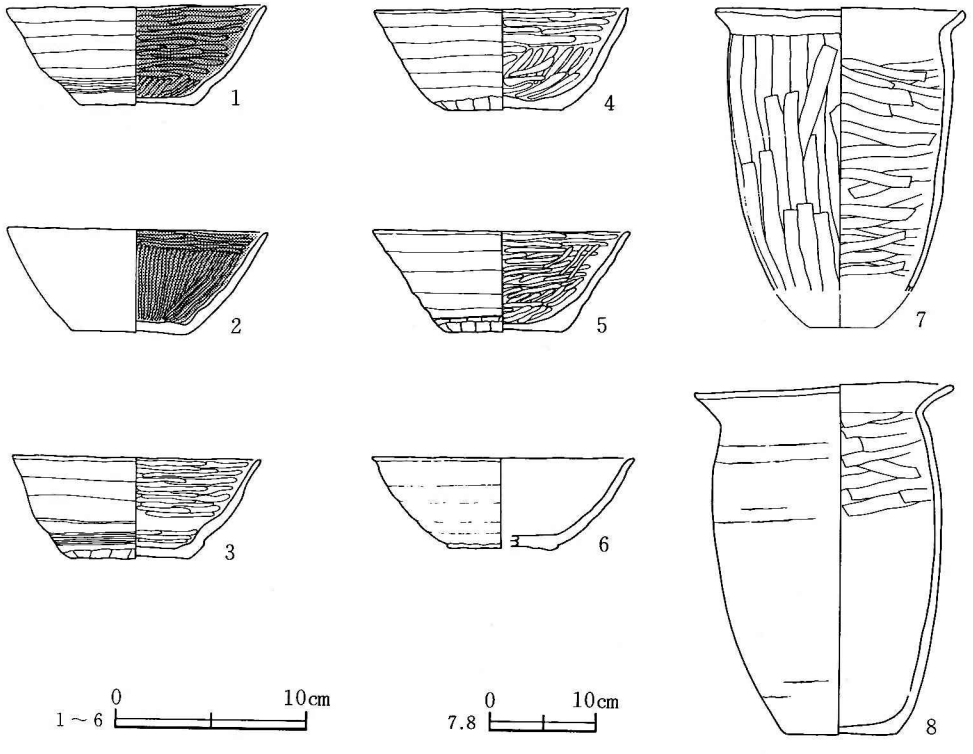
これら２つの重なり合った土器群を観察すると，内面を黒色処理した土器はどちらにも含まれていない。また（19・20・23・32）グループには，内面を篦磨き調整した土器，手持ち篦削りした土器は含まれていない。

坏形須恵器は２点（37・38）出土している。38は高台を付している。

甕形土師器は３点（39～41）出土している。39は，口径に比して底径が大きく，その外面に成形時の粘土紐巻上げ痕が明瞭に残る小型甕で，内面は篦なでされている。底部外面は平滑である。40は，轆轤上で製作された小型甕で，回転糸切り技法により切り離されている。胎土に砂粒が多く含まれている。41は，胴部下半を欠失する。篦なでされている上半部に篦書が認められる。42は，かまどに設置されたまま廃棄され，燃焼部内で出土した鍋形土師器である。胎土に砂粒を多量に含み，底辺部を篦削りしている。外面に赤変部分が認められる。

下乳牛遺跡第１号竪穴住居跡出土土器群は，坏形・甕形（大・小）・鍋形土師器と坏形・蓋形須恵器の５器種で構成されている。

第２号竪穴住居跡出土土器群　（第10図）



第10図　下乳牛遺跡第２号竪穴住居跡出土土器群実測図

報告書では，坏形土師器15個体，坏形須恵器１個体，甕形土師器７個体が図示されている。坏形土師器のうち10個体は，洗浄時に刷毛で強くこすったため，器表が磨滅しており，そのま

までは，「回転糸切り後，何ら調整を加えていないタイプ」になるが，調整が不明のための割愛した。また甕形土師器については，その出土状況から割愛した。

1．回転糸切り技法により轆轤から切り離したあと，外面を回転篦なで調整した坏形土師器である。内面は篦磨きのあと黒色処理している。灰白色を呈する。口径13.7cm，高さ5.3cm，底径6.1cm。

2．粘土紐巻き上げ後，轆轤の回転を利用して整形したと観察される坏形土師器である。回転糸切り後，底部外面の周縁を幅約0.5cmでドーナツ状に篦なでしている。内面を，篦磨き後黒色処理している。橙色を呈する。口径13.7cm，高さ5.5cm，底径5.9cm。

3．外面上半を篦なで，下半を回転篦削り，底辺部を手持ち篦削りしている坏形土師器である。回転糸切り技法で切り離されている。内面を横方向の篦磨き調整しているが，黒色処理はしていない。灰黄褐色を呈する。口径13.0cm，高さ5.0cm，底径6.1cm。

4．外面を篦なでし，底辺部を手持ち篦削りしている坏形土師器である。回転糸切り技法で轆轤から切り離している。内面を篦磨き調整しているが，黒色処理はしていない。褐灰色を呈する。口径13.5cm，高さ5.5cm，底径6.2cm。

5．回転糸切り後，手持ち篦削りした坏形土師器である。内面を篦磨き調整しているが，黒色処理はしていない。灰褐色を呈する。口径13.6cm，高さ5.3cm，底径6.0cm。

6．回転糸切り技法により轆轤から切り離された坏形須恵器である。灰オリーブ色を呈する。口径13.8cm，高さ4.9cm，底径5.9cm。

7．口縁部が外傾し，口唇部が若干立ち上る。また，胴部外面を全面縦方向に篦削り調整し内面を横方向に軽い篦なでをした甕形土師器である。褐灰色～にぶい橙色を呈する。口径22.6cm，現高26.1cm。

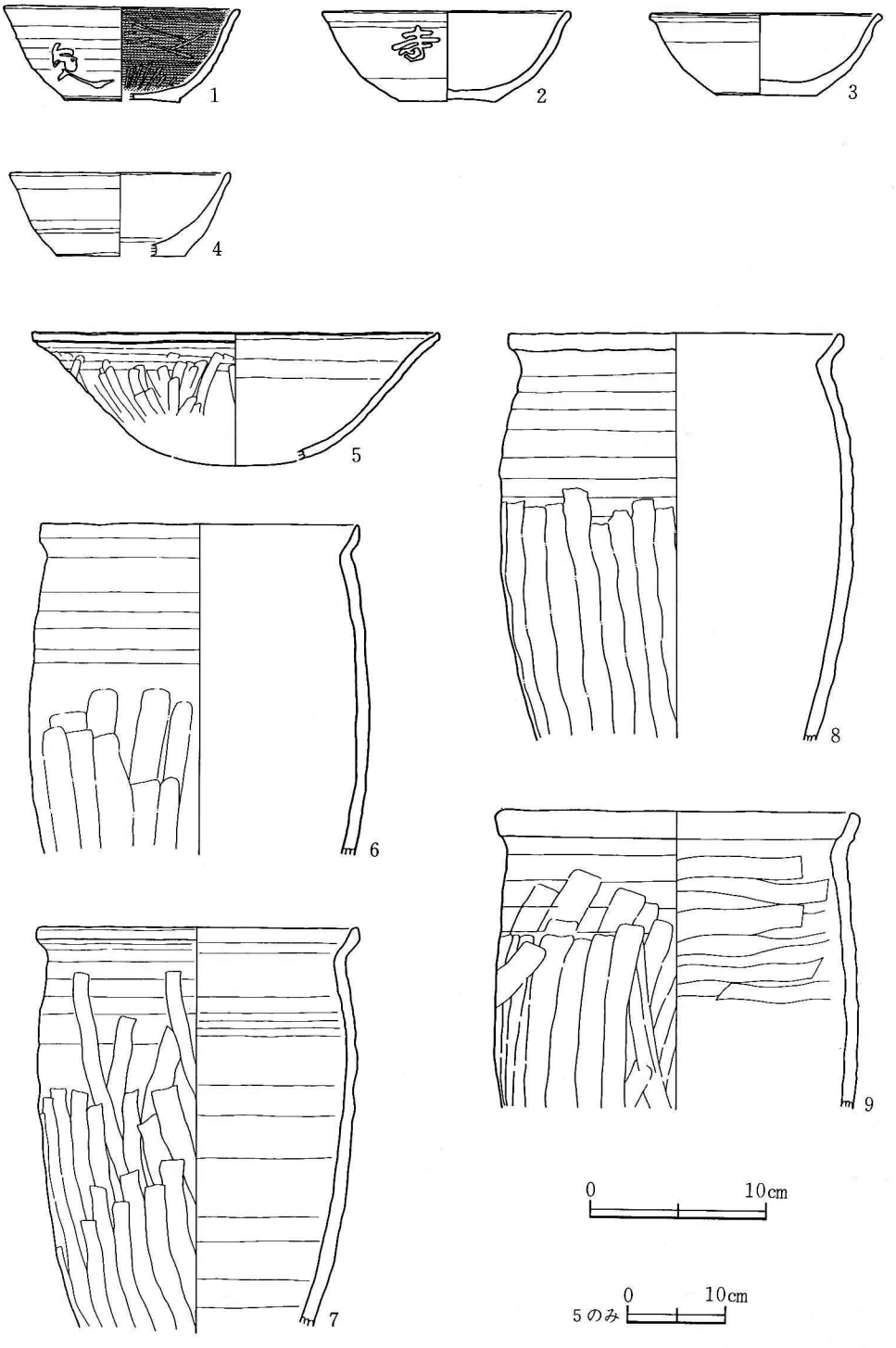
8．粘土紐巻き上げにより成形されたもので，口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。内面胴部上半は横方向の篦なでがなされている。浅黄橙色を呈する。口径20.6cm，高さ32.6cm，底径10.6cm。

下乳牛遺跡第２号竪穴住居跡出土土器群の土器構成は，坏形土師器，坏形須恵器，甕形土師器の３器種の組み合せである。坏形土師器は，その調整方法から２大別できる。ただし，上述の割愛したタイプがもし生きるとすれば，３タイプに大別できることになる。

(5)　一本杉（いっぽんすぎ）遺跡出土土器群　（第11・12・13図）

一本杉遺跡は，東北縦貫自動車道建設に伴い，昭和56年に県教育委員会（担当：桜田）が発掘調査を行ない，昭和58年に報告書が刊行された。

第13号竪穴住居跡出土土器群　（第11・12図）



第11図　一本杉遺跡第13号竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)

第13号竪穴住居跡は，粒状火山灰（大湯浮石層）が，所謂「霜降り状」に含まれる黒褐色土層に覆われているが，床面を灰・炭化物・焼土が厚く堆積する焼失家屋である。

図化できた土器は，坏形土師器３点，坏形須恵器１点，鍋形土師器１点，甕形土師器８点の計13点である。坏形土器はいずれも回転糸切り技法により轆轤から切り離されているが，坏形土師器は器壁が湾曲し半円形に近い形状を呈するのに対し，坏形須恵器は直線的で逆台形に近い形を呈する。

１．轆轤から切り離した後，内面を篦磨きし黒色処理している。外面体部に墨書が認められる。にぶい黄橙色を呈する。口径13.3cm，高さ5.3cm，底径6.5cm。埋土中から出土した。

２．切り離し後の調整の痕跡が認められないが，外面体部上半に，「寺」の墨書が認められる。黒褐色を呈する。口径14cm，高さ5.2cm，底径5.4cm。かまど中から出土した。

３．切り離し後の調整の痕跡が認められない。灰黄褐色を呈する。口径12.9cm，高さ4.7cm，底径5.7cm。かまど中と埋土中から出土した破片が接合した。

４．切り離し後の調整の痕跡が認められない。橙色を呈するが，胎土・焼成から須恵器と判断した。口径12.4cm，高さ4.7cm，底径7.3cm。埋土中から出土した。

５．丸底を呈すると推定される鍋形土師器である。外面の体部下半を篦削り，内面を篦なで調整している。にぶい黄橙色を呈し，胎土に粗砂が混入している。口径40.7cm，現高12.7cm。かまど中から出土した。

８点の甕形土師器は，口縁部形状により，４分類できる。

１類　短い口縁部が大きく外傾したあと，直立気味に立ち上る類（６・７・８）

２類　短い口縁部が小さく外傾したあと，緩やかに立ち上る類（９・10）

３類　短い口縁部が大きく外傾する類（11・12）

４類　口縁部分の器壁が厚く，短い口縁部が外反する類（13）

（１類・２類は，「弱いＳ字状口縁を呈する」という観点では，同類とみなすことも可能である。）

成形後の調整を観察すると，６～11は，外面の上半は，轆轤または回転台上で横方向になで（所謂水挽き）られ，下半は，篦削りしている。内面は横方向に篦なでしている。12・13は，内・外面とも篦なでされている。いずれも胎土に粗砂が混入している。

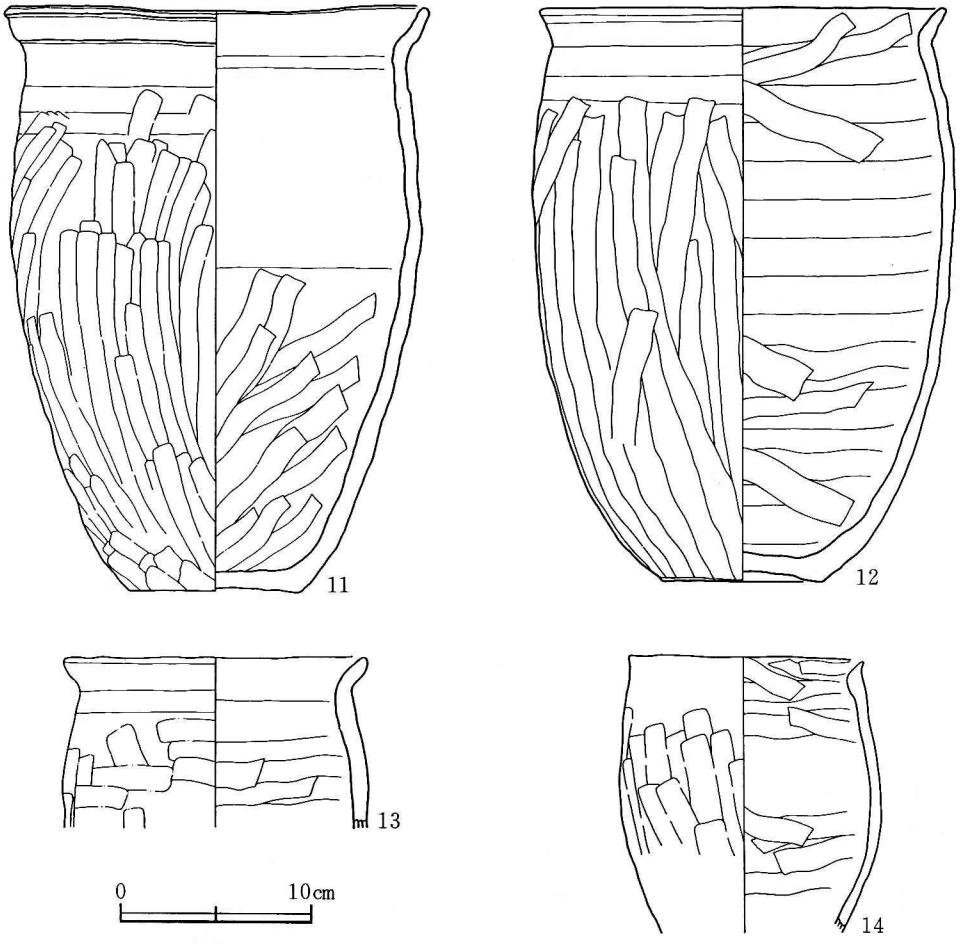
６．浅黄色を呈する。口径17.8cm，現高18.7cm。かまど中と埋土中から出土した破片の接合。

７．淡橙色を呈する。口径18cm，現高22.5cm。埋土中からの出土である。

８．灰白色を呈する。口径18.6cm，現高22.9cm。埋土中からの出土である。

９．にぶい黄橙色を呈する。口径19.7cm，現高16.7cm。埋土中からの出土である。

10．明褐色を呈する。口径19.2cm，高さ27.3cm，底径7.8cm。底部外面は平滑である。埋土



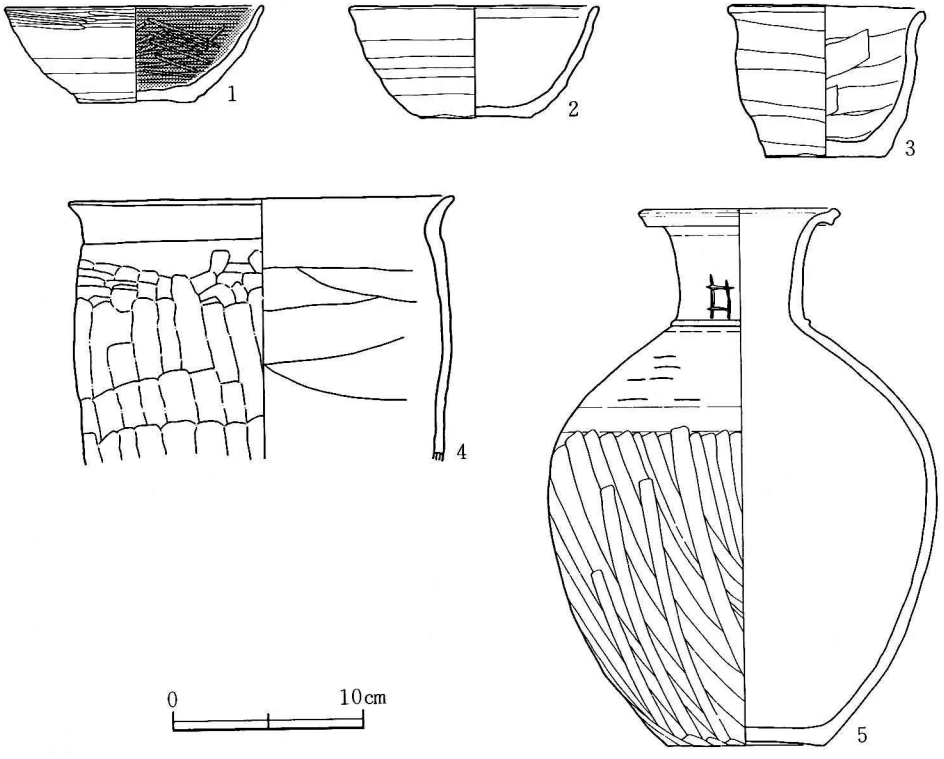
第12図　一本杉遺跡第13号竪穴住居跡出土土器群実測図(2)

中からの出土である。　11．胴張りが強く，灰白色を呈する。口径21.2cm，高さ30.1cm，底径8.4cm。砂粒が，底部外面の縁辺にドーナツ状に付着している。かまど中と埋土中及び第16号竪穴住居跡床面出土土器片と接合している。　12．にぶい橙色を呈する。口径15.5cm，現高9.0cm。埋土中からの出土である。　13．胴張りが強く，灰黄褐色を呈する。口径12.3cm，現高14.3cm。かまど中からの出土である。

一本杉遺跡第13号竪穴住居跡の土器は，坏形（土師器・須恵器）鍋形・甕形（大小）の3器種で構成されている。

第14号竪穴住居跡出土土器群　（第13図）

第14号竪穴住居跡は，粒状火山灰（大湯浮石層）が，黒褐色土に所謂「霜降り」状に含まれている土層に覆われていた。図化できた土器は，坏形土師器2点，甕形土師器2点，長頸壺形須恵器1点の計5点である。



第13図　一本杉遺跡第14号竪穴住居跡出土土器群実測図

1．回転糸切り技法により轆轤から切り離された坏形土師器である。外面の口辺と内面全面を篦磨きし，その後，内面を黒色処理している。口径13.4cm，高さ５cm，底径６cm。にぶい黄橙色を呈する。かまど中から出土した。

2．轆轤から回転糸切り技法によって切り離した後，何ら調整を加えていない坏形土師器で灰白色を呈する。口径13cm，高さ5.8cm，底径5.7cm。床面上に出土した。

3．轆轤から回転糸切り技法によって切り離された小型の甕形土師器である。外面を横方向の篦削り，内面を横方向の篦なでをしている。にぶい黄橙色を呈する。口径10.2cm，高さ7.9cm，底径6.1cm。

4．短かい口頸部がわずかに外反し，胴部下半を欠失する甕形土師器である。外面を細かく篦削りし，内面を篦なでしている。褐灰色を呈する。口径20.2cm，現高13.6cm。床面上に出土した。

5．頸部に断面半円形の隆帯を１条巡らした長頸壺形須恵器である。頸部に所謂「篦書き記号」がある。轆轤から切り離し後，胴部下半を篦削りしている。底部外面の全面には，砂粒が付着している。褐色を呈する。口径9.8cm，高さ28.1cm，底径8.2cm。かまど左側の

床面上から出土した。

第14号竪穴住居跡では，坏形，甕形，壺形の３器種の組み合せが認められる。

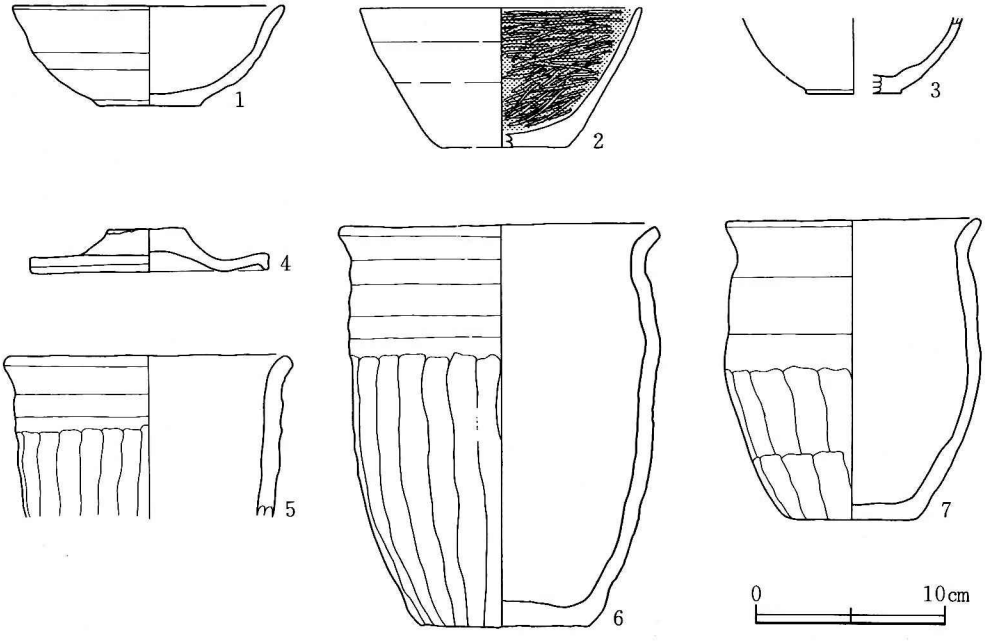
(6) 中の崎遺跡出土土器群 （第14・15・16・17・18図）

中の崎遺跡は，東北縦貫自動車道建設に伴い，昭和55年と昭和56年の２カ年にわたって，県教育委員会（担当：橋本高史）が発掘調査を行ない，昭和59年に報告書が刊行された。

第１号竪穴住居跡出土土器群 （第14図）

本竪穴住居跡は，かまどの構築土中に粒状火山灰（大湯浮石層）が混入していることから，大湯浮石層の堆積後に構築されたものであることが判明している。また，焼土・炭化板材等が多量に床面上あるいは壁面に沿って建てられた状況で出土しており，所謂焼失家屋である。

報告書には，11個体の土器が図示されているが，本稿では７個体の土器を図示・説明する。



第14図 中の崎遺跡第１号竪穴住居跡出土土器群実測図

１．轆轤から回転糸切り技法により切り離された後，何らの調整も加えられていない坏形土師器である。にぶい橙色を呈する。口径14cm，高さ5.3cm，底径5.2cm。床面上から出土した。

２．轆轤から回転糸切り技法により切り離した後，内面にアトランダムな篦磨きをし，黒色処理した，やや器高の高い坏形土師器である。胎土に粗砂が混入している。口径15cm高さ7.5cm，底径6.8cm。床面上から出土した。

３．轆轤から回転糸切り技法により切り離された後，何らの調整も加えられていない坏形土師器の破片である。にぶい橙色を呈する。底径５cm，現高４cm。埋土中から出土した。

４．轆轤から回転糸切り技法により切り離された後，糸切り痕跡をそのまま残し，つまみをつけない蓋形須恵器である。青灰色を呈する。口径12.4cm，高さ2.3cm，底径4.1cm。埋土中からの出土である。

５．短かい口頸部が外反する甕形土師器である。轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向になで（水挽きし），下半を篦削りしている。小礫を含む器壁は厚く，口唇部までその厚さは，ほとんど変化しない。にぶい黄褐色を呈する。口径14.4cm，現高8.2cm。かまど中から出土した。

６．頸部が直立したあと，短かい口縁部が大きく外傾する甕形土師器である。轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向になで（水挽きし）下半を篦削りしている。小礫を含む器壁は厚く，口唇部までその厚さはほとんど変化しない。底部外面は，平滑である。にぶい黄褐色～褐灰色を呈する。口径16.9cm，高さ21.1cm，底径8.8cm。かまど中から出土した。

７．短かい口縁部が大きく外傾し，胴張りのある甕形土師器である。轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向になで（水挽きし），下半を篦削りしている。底部外面は平滑で胎土に礫を混入する。浅黄橙色を呈する。口径13.4cm，器高15.6cm，底径７cm。かまど中から出土した。

第１号竪穴住居跡では，坏形・蓋形・甕形土師器の３器種で構成されている。

第104号竪穴住居跡出土土器群　（第15・16図）

第104号竪穴住居跡は，その埋土中に粒状の火山灰（大湯浮石層）を堆積させており，床面上から９点の坏形土師器，１点の鍋形土師器の他，甕形土師器も多く出土した。

坏形土師器９点は，その整形技法から３大別６細分できる。

Ａ．轆轤から回転糸切り技法により切り離し，内面を篦磨き後，黒色処理した土器（１）

Ｂ．轆轤から回転糸切り技法により切り離し，内面を篦磨きした土器（２～７）

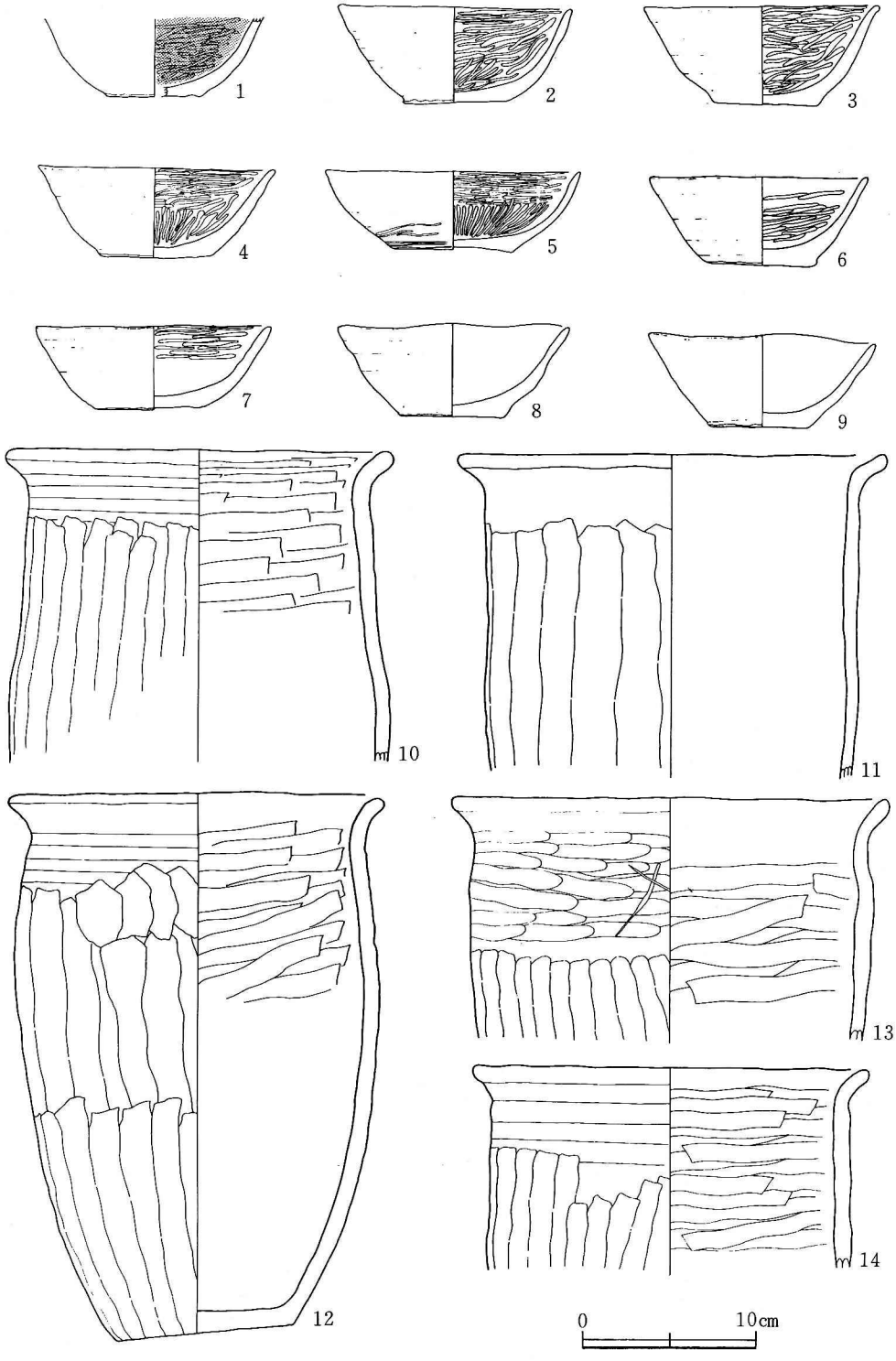
Ｂ－１　内面にアトランダムな篦磨きをした土器（２・３）

Ｂ－２－(1)　内面の上半を横方向，下半を放射状に篦磨きをした土器（４）

Ｂ－２－(2)　内面の上半を横方向，下半を放射状に篦磨きをし，外面底辺部を横方向に篦なでした土器（５）

Ｂ－３　内面に横方向の篦磨きを施した土器（６・７）

Ｃ．轆轤から回転糸切り技法により切り離し，内・外面に何ら調整を加えず，黒斑のない土器（８・９）



第15図　中の崎遺跡第104号竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)

プロポーションは，（2・7），（4・6），（8・9），3，5の5タイプに分けられる。この中で，5の土器のプロポーションは他の土器と比べ異質な感がする。色調は浅黄橙色，橙色，黄橙色を呈する。

甕形土師器は，口縁部の形状と調整方法から4大別9細分できる。

A．やや短い口縁部が外反する土器（10～15）

A－1　外面の口縁部を横方向に篦なで，胴部を篦削りし，内面を篦なでした土器（10・12・14・16）

A－2　外面の胴部を篦削りした土器（11）

A－3　外面の口縁部を強い横方向の指なで，胴部を篦なで，内面を篦なでした土器（13）

B．短い口縁部が強く外反する土器（16～18・21）

B－1－(1)　外面を全面篦なで後，指なでし，内面の上半に横方向の篦なでをした土器（16）

B－1－(2)　上半にある最大胴径部分から下方を篦なでし，内面の最大胴径部分周辺を横方向に篦なでした土器（17・21）

B－2　外面の頸部以下を篦削りし，内面の頸部以下の狭い部分を横方向に篦なでした土器（18）

C．短い口縁部がわずかに外傾する土器（19・20）

C－1　外面の頸部以下を篦なでし，内面は上半を横方向に篦なでした土器（19）

C－2　外面の頸部以下を篦なで後，下半のみ指なでした土器（20）

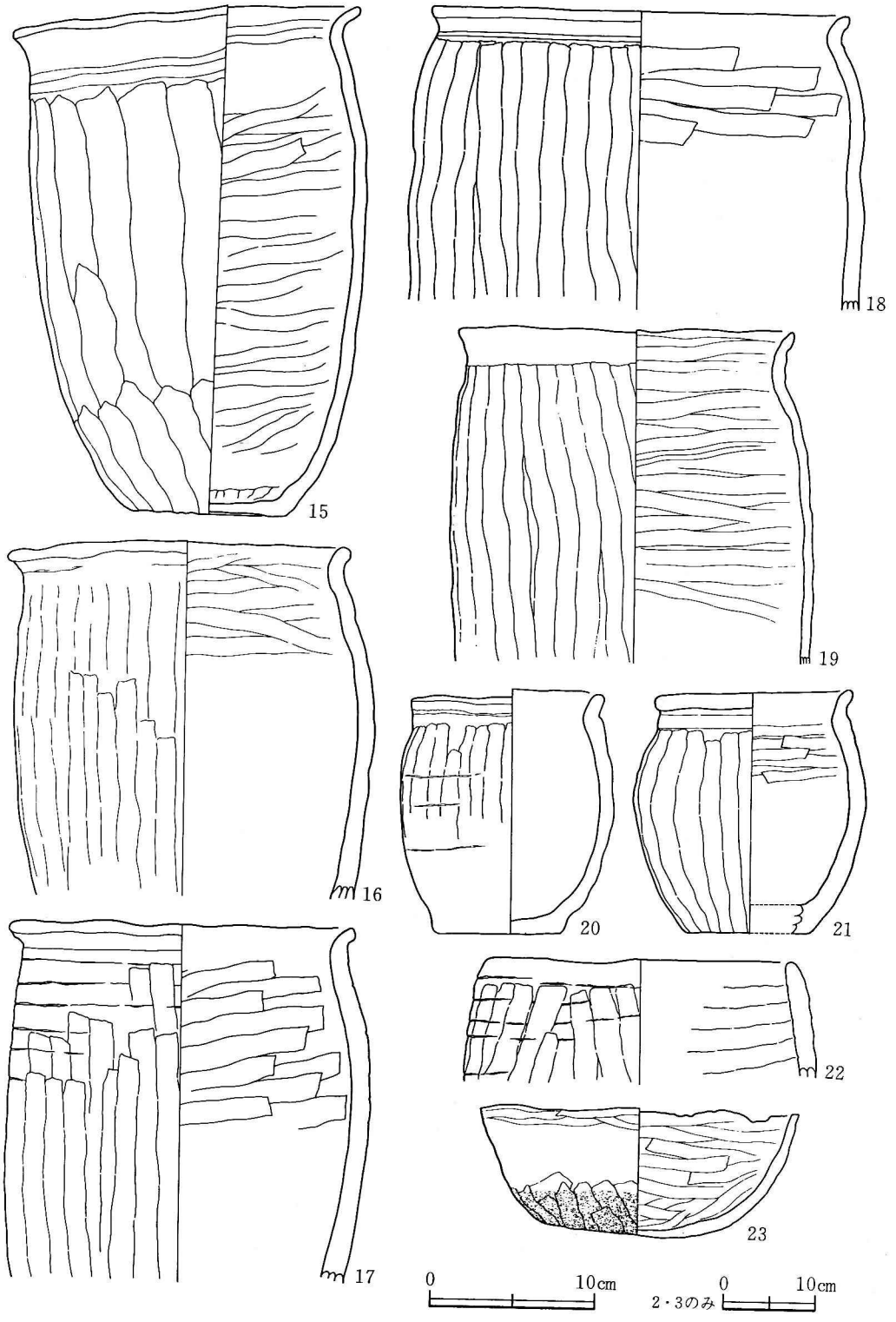
D．口縁部が内傾する土器（22）

D－1　内・外面とも篦なでした土器（22）

砂粒を多量に含む胎土を使用しているので器面がザラザラしており，成形方法（粘土紐巻き上げ）がわかる程，粗いつくり方をしている土器が多い。器面を篦削りする土器が多いが，なかでも11・12・15は，所謂「ナタ切り」である。内面は，胴上半にのみ篦なでした土器が多い。底部の観察できる土器では，外面が篦なで（12），平滑（15），木葉痕（20・21）となっている。プロポーションは，口径に比して底径が大きく，胴張りの強い土器である。

鍋形土師器は，粘土紐巻き上げにより成形され，平底風を呈する。外面は，底部が篦削りされ，口縁部は横方向に篦なでされている。内面は全面篦なでされている。口唇は，横方向に篦削りされ扁平になっている。底部外面には，火熱による赤変が認められ，内面でも底部には煤が付着したような黒変が認められる。黄橙色～褐色を呈する。

中の崎遺跡第104号竪穴住居跡出土土器群は，坏形・甕形（大・小）・鍋形土師器の3器種で



第16図　中の崎遺跡第104号竪穴住居跡出土土器群実測図 (2)

構成されている。

第107号竪穴住居跡出土土器群　（第17・18図）

本竪穴住居群は，粒状火山灰の混入をみない黒褐色土を埋土としているが，床面に炭化した禾本科植物や焼土及び自然礫が多量に検出された所謂焼失家屋である。

報告書では，19点図化されているが，本稿では器種・器形の明確な16点を図化・説明する。

坏形土師器は，４点出土しており，いずれも回転糸切り技法により轆轤から切り離されたあと，内・外面に整形のため調整を行なっている。

1．器外面に粘土紐の巻き上げ痕か，胎土に含まれた細礫の移動痕か明確でないが，凹線が数条認められる。轆轤から切り離された後，外面底辺部を手持ち篦削りし，内面は，細かい篦磨き後，黒色処理されている。にぶい黄橙色を呈する。口径14.1cm，高さ５cm，底径5.7cm。床面上から出土した。

2．轆轤から切り離し後，外面底辺部を手持ち篦削りし，内面は細かい篦磨き後，黒色処理している。胎土に砂礫を多く混入している。浅黄橙色を呈する。口径13.6cm，高さ5.2cm，底径５cm。かまど左側袖部近くの床面上から出土した。

3．轆轤から切り離し後，外面底辺部を手持ち篦削りし，内面は細かい篦磨き後，黒色処理している。胎土にシルト質砂を混入しているためか，器表はなめらかである。橙色を呈する。口径13cm，高さ5.1cm，底径6.4cm。かまど右袖部内側の焼土上から出土した。

4．轆轤から切り離し後，内・外面とも篦なでしている。胎土にシルト質砂を混入しているためか，器表はなめらかである。にぶい橙色を呈する。口径13.3cm，高さ５cm，底径5.9cm。床面上から出土した。

甕形土師器は，10点図示したが，口縁部の形状により４分類できる。

１類　短かい口縁部が大きく外反する類（５・６）

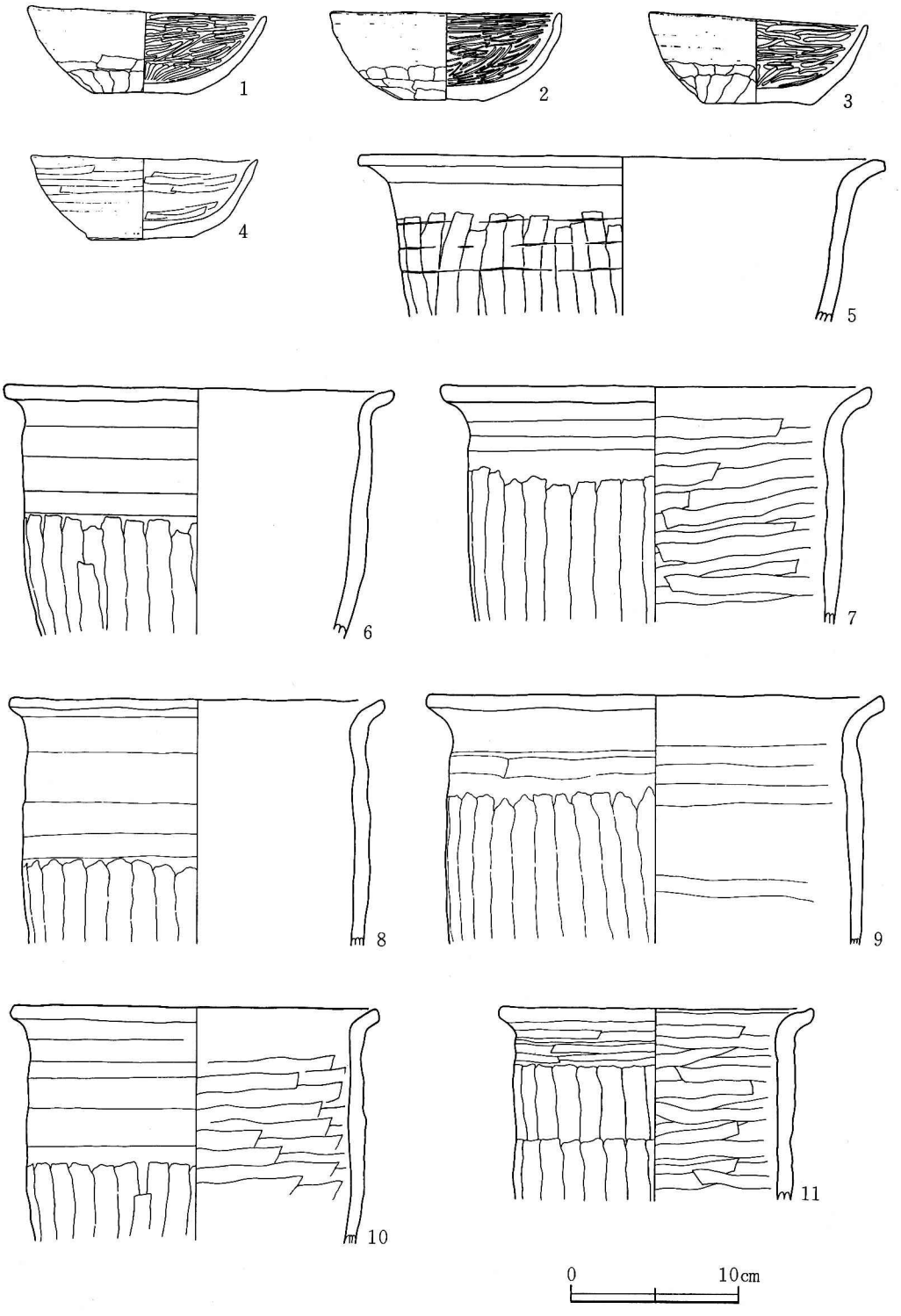
２類　短かい口縁部が外傾する類（７～10・12）

３類　短かい口縁部が大きく外反したあと，口唇部が立ち上る類（11）

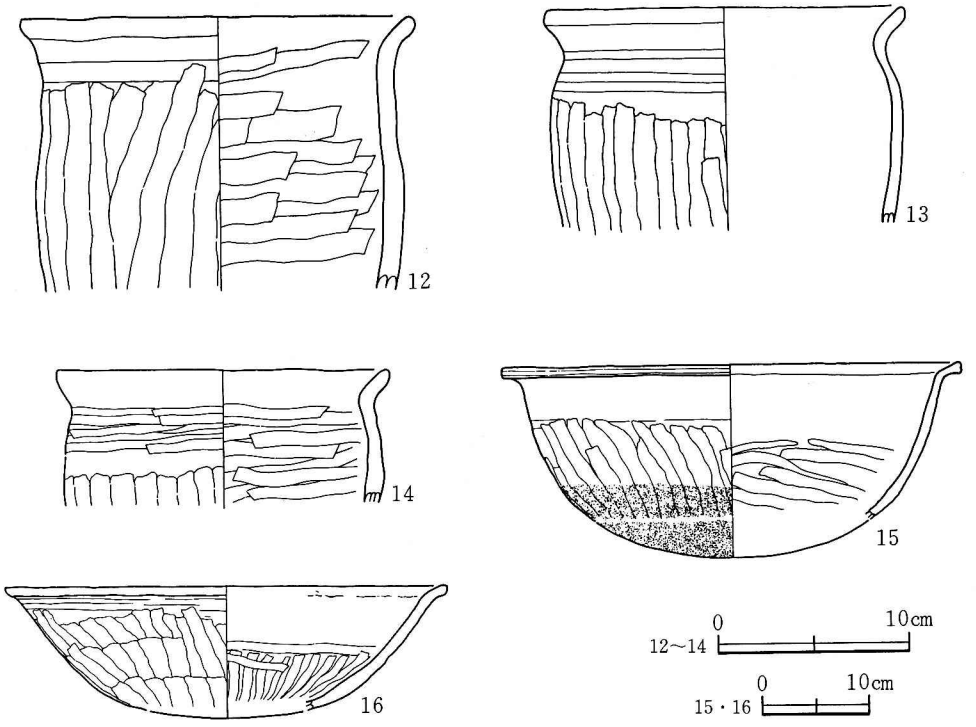
４類　頸部で一度狭くなったあと「く」の字状に大きく外傾する類（13・14）

5．外面に粘土紐巻上痕が残る甕形土師器である。胴部外面を篦なでし，口唇部を篦状工具で調整している。胎土に砂礫を混入し，にぶい橙色～橙色を呈する。口径31cm，現高9.4cm。埋土中から出土した。

6・8・13．轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向に篦なでしたあと，下半を篦削りした甕形土師器である。いずれも胎土に砂礫を混入し，褐灰～にぶい黄橙色を呈する。６が口径23cm，現高14.5cm。８が口径22cm，現高14.4cm。13が口径18.5cm，現高11.5cm。いずれも埋土中から出土した。



第17図　中の崎遺跡第107号竪穴住居跡出土土器群実測図 (1)



第18図　中の崎遺跡第107号竪穴住居跡出土土器群実測図 (2)

7・9～12・14．轆轤あるいは回転台上で外面上半を横方向に篦なでをしたあと，下半を篦削りしている。内面は，横方向に篦なでしている。いずれも胎土に砂礫を混入している。7は口径25.2cm，現高14cmで，にぶい黄橙色～浅黄橙色を呈する。9は口径20.4cm，現高11.3cmでにぶい黄橙色を呈する。10は口径21.3cm，現高13.4cmでにぶい黄橙色を呈する。11は口径13.3cm，現高11.4cmで浅黄橙色～灰黄褐色を呈する。12は口径20cm，現高14cmでにぶい橙色を呈する。14は口径17cm，現高７cmでにぶい褐色～にぶい橙色を呈する。いずれも埋土中から出土した。

鍋形土師器は２点出土している。いずれも底部を欠失するが丸底と推定される。（報告書では，５も鍋と判断され３点出土となっているが，検討の結果，５は甕形と判断した。）いずれも胎土に砂礫を多く混入している。15は体部外面を篦削り，内面を篦なでしており，口径37.5cm現高12.6cmで浅黄橙色を呈する。外面の口縁部下に炭質物が付着し，底辺部に煤状炭化物が付着している。16は体部外面に弱い篦削り，内面下半に篦なでをしている。浅黄橙色～暗褐色を呈するが，外面体部上半に粘質の炭化物が多く付着している。口径35.6cm，現高10.2cm。いずれも埋土中からの出土である。第107号竪穴住居跡は，坏形・鍋形・甕形土師器の３器種で構成されている。

（未了）

男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について

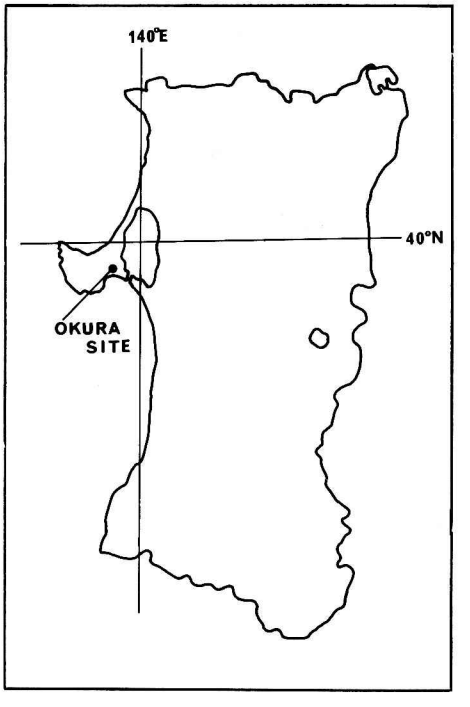
児　玉　　準

I　緒　　言

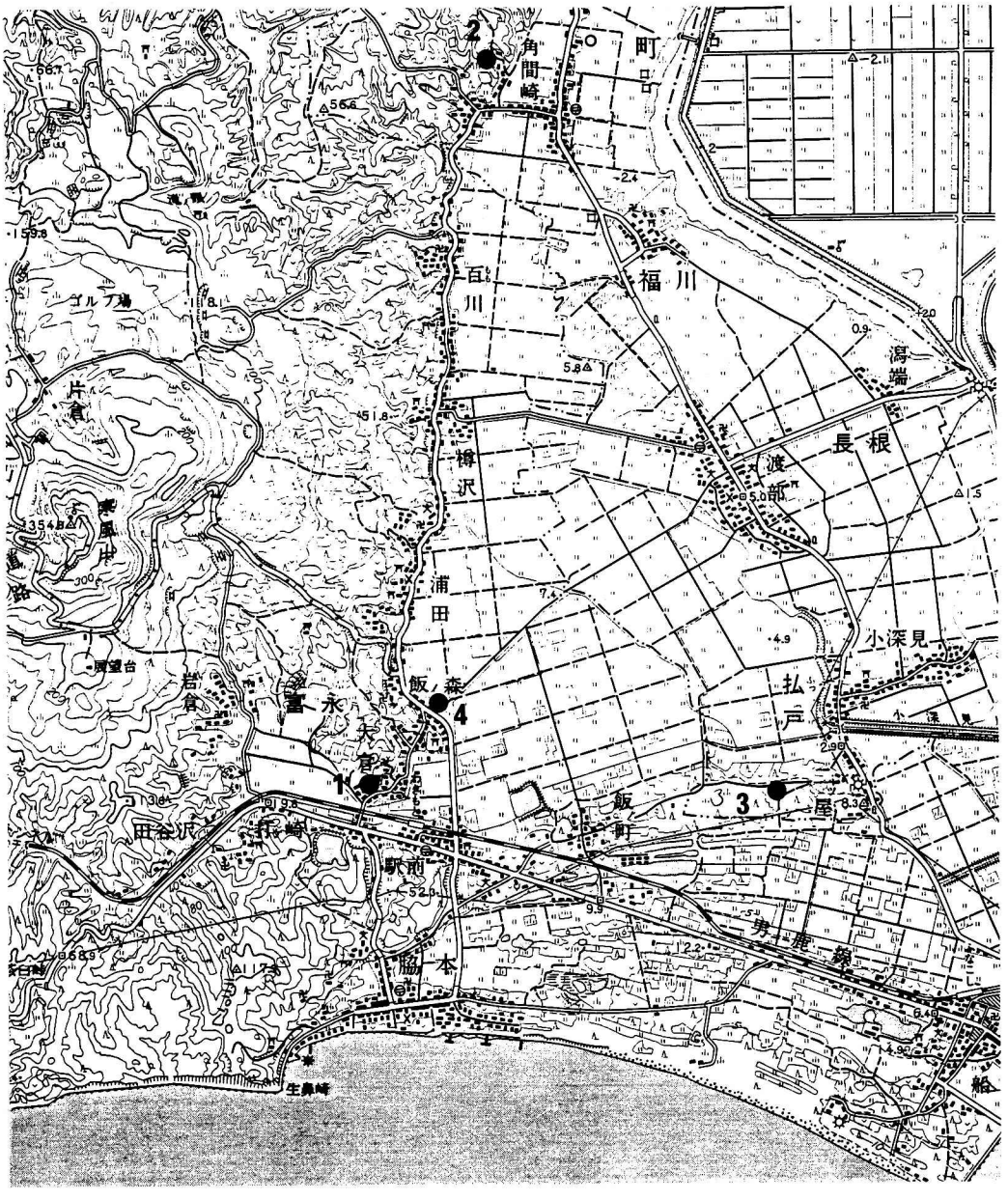
八郎潟西岸に位置する若美町，男鹿市脇本・船越は志藤沢式土器を出土する弥生時代の遺跡が濃密に分布する地域である。脇本富永字大倉に所在する大倉遺跡が土砂採取工事によって破壊を受け，その際に磯村朝次郎，泉明，目黒明彦氏および筆者らが，崩壊した黒色土の中から辛うじて遺物を収集し得たのは，昭和50年の春まだ浅い弥生３月のことであった。この時の遺物は，その後，男鹿市立男鹿東中学校生徒らの手によって洗浄され，確たる保管場所のないまま，昭和56年夏より筆者の手元にある。これらの遺物を速やかに復元・図化し，研究資料として多くの方々に提供すべきであったが，今日に至るまでそれを果たし得なかったのはひとり筆者の怠慢に尽きる。極めて恣意的にではあるが，ようやく整理を終了したので，以下に資料を紹介することとした。研究者の方々に少しでも裨益するところがあるならば望外の喜びである。

II　遺跡の位置

大倉遺跡のある男鹿市脇本の地形は，標高354.6mの寒風火山とその周縁部をとりまく丘陵地，そして丘陵地に挟まれた谷底平野と八郎湖に連なる湖岸平野，その上に乗る被覆砂丘および浜堤間湿地などを含んだ平野部，つまりは丘陵と平野という２大単元から成り立っており，しかもこれらが複雑に入り組むことなく，東の平野部，西の丘陵地という如く一線をもって明確に区分できるところに特色があると言えようか。



第１図　遺跡の位置



1 大倉　2 志藤沢　3 横長根A　4 飯森・小谷地

第２図　遺跡周辺の地形　国土地理院発行5万分ノ1「船川」使用 □

大倉遺跡は丘陵地の南端が低地に向って半島状に南西へ延びた，標高35m，現水田面との比高20mほどの小さな丘陵上にある。３方向は水田に囲まれており，遺跡地に立つと西側と南側は丘陵の間に挾在する狭い水田ながら，東側は八郎湖を介して秋田平野へと続く黄金波打つ水田地帯で，背景には出羽山地を望見することができる。

丘陵地と沖積地との交線は，八郎湖岸を西から取り巻くように東にやや湾曲しながら北へ延

び，5，6箇所の弥生時代の遺跡を介在させて，その延長線上に昭和32年に調査された志藤沢遺跡がある。大倉遺跡からは北へ5kmの位置である。昭和39～41年と56年に調査され，少量の弥生時代遺物を出土した飯森・小谷地遺跡は北東0.7kmにあり，58年に調査が行われ，炭化米を出土した横長根A遺跡は脇本本郷から弧状に東へ延びる第I列砂丘上にあり，大倉遺跡からは東へ2.8kmほど離れている。横長根A遺跡が沖積地の中の比高2m弱の微高地に占地するのに比して，志藤沢遺跡は比高20mほどの丘陵末端にあり，背後は平坦な潟西台地へと連なっている。丘陵末端を居住の場としながらも水稲耕作適地を丘陵前方の低地に求めることは当然であり，こうした点において大倉遺跡の立地環境は志藤沢遺跡のそれに似ると言ってよいであろう。

III　遺物の出土状況

遺物は遺跡のある小丘陵の東側斜面から出土した。この斜面は約25度の角度をなし，土層は第I層が一部に黄褐色の盛土を含んだ茶褐色の表土で，80～100cmの厚さがある。第II層は褐色の遺物包含層で60～100cmの厚さを有し，第III層が黒褐色土で30～50cmあり，遺物を全く含有しない。第IV層が黄褐色の地山である。竪穴住居跡等の遺構は丘陵の平坦面に存在が予想され，この斜面には生活残滓などを廃棄したものと考えられる。

IV　遺　　物

出土した遺物は，弥生土器のほか縄文時代晩期の条痕文のある粗製土器が1点，大洞A式土器2点，平安時代の土師器・須恵器が10点，中世の珠洲系陶器が1点，そして石器およびフレイクである。このことから石器の帰属時期は弥生時代と見なして誤りないであろう。

1　土　　器

大倉遺跡から出土した土器は，層位的まとまりや，遺構内からの一括出土によるものではなく，採集に近い状態で出土したものであり，しかも一瞥すると明らかに時期の異なる土器が含まれ，単一の時間幅に製作，使用されたものではない。このような土器群を整理するにあたって，まず土器の形態を観察して器種を認定し，器種と主として施文・装飾技法との結びつきの共通性から分類を行い，隣接地域との編年的対応関係から，ある程度の同時性を想定し得る各器種ごとのまとまりを群として把えることにした。

大倉遺跡から出土した弥生土器の器種は，I類（甕形土器），II類（鉢形土器），III類（高坏形土器），IV類（壺形土器），V類（蓋形土器）の5類型によって構成される。

Ⅰ類（甕形土器）（第３～11図）

Ⅰａ類（第３図～第８図１～９）ゆるやかに外反する口頸部，膨らんだ胴部を有し，体部上半は内傾し，下半はしだいに内湾して底部へ至る。口縁部は平坦口縁であるが，小波状を呈するものも稀にある（第６図８）。体部と同一走向の斜縄文が施される。この斜縄文の下位には１～３条の平行沈線文が施される場合があり，この沈線文と頸部の沈線文との間には斜位または縦位の刷毛目調整が見られるが，横位の刷毛目調整は極めて稀である（第４図５）。刷毛目調整はそのまま残される場合と，横位のなでによって消去される場合とがある。肩部に平行沈線文が巡る場合には２条または３条が通例であるが，５条を施すものもあり（第８図４），口縁部の平行沈線文ともに全くないものもある（第４図）。平行沈線文の下位には列点文が施されることがあるが，これが刷毛目工具の圧痕による木目列点文である場合と，その圧痕が観察されずに必ずしも刷毛目工具を使用したとは言えない場合とがある。最大の列点文は長さ 3.4cmを測る。胴部には主として横位の刷毛目調整の後に斜縄文が施文されて底部周縁に至る。

Ⅰｂ類（第８図10・11）口頸部がくの字状に強く屈折するものである。個体数は極めて少い。縄文が施文されている。

Ⅰｃ類（第９図，第10図１～８）口縁部が頸部から急角度で屈折するものである。内傾する頸部を有する長頸甕を含む。口縁部は第９図１・２の場合，低い山形突起を有し，２の山形突起頂部には刻み目が加えられ，これよりも細かい刻み目が口唇部に並列する。頸部から肩部にかけて平行沈線文，鋸歯文，重菱形文などの文様が施文される。鋸歯文は主として最下段の平行沈線文の下位に施されることが多く，第10図７・８のそれは上向きの連弧文となっている。器面調整として刷毛目を用いていることが多い。

Ⅰｄ類（第10図９～14，第11図１～８）外傾しながらも，いくぶん内湾ぎみの口縁部を有し，交互刺突文を主とした文様を施す。口縁部形態は平坦か，低い山形突起を有し，縦位あるいは斜位の細かな刻み目が施される。平行沈線文，上向きの連弧文，刺突文など，Ⅰｃ類と共通する文様も見られるが，何よりも交互刺突文が本類文様の最大の特徴で，これに磨消縄文手法も加わっている（第11図１～３）。本類には刷毛目調整痕は全く見られない。

Ⅱ類（鉢形土器）（第11～24図）

Ⅱａ類（第11図９～15）口径よりも器高が低い浅鉢形を呈すると考えられるもので，体部から口縁部にかけて直線的か口縁部のみ外反する。口縁部は平坦か，山形突起を有し，体部には結節点に粘土粒の貼瘤のある変形工字文が施されている。刷毛目調整痕は見られない。

Ⅱｂ類（第12・13図，第14図１～４）浅鉢形で，体部から口縁部にかけてほぼ直線的か，わずかに内湾し，頸部にわずかにくびれを有するもので，充塡縄文，磨消縄文手法を用いて変形工字文などの文様が描かれる。小破片の場合，高坏形土器の坏部との区別が難しいものがある。

口縁部は山形突起をなすものが多く，内面にもこれに沿う山形状沈線文と水平に走る沈線文が描かれる。第12図４には沈線に沿って列点文，同図８には円形の刺突文が並列する。第12図１・６・７，第13図５・７は胎土に金雲母を含む。刷毛目調整痕は見られない。

Ⅱｃ類（第14図５～14，第15図，第16図１～12）体部から口縁部にかけてほぼ直線的か，わずかに内湾する器形で変形工字文を主としたモチーフが描かれる。平坦口縁が多いが，稀に小さな山形突起を有するものもある。口縁部は斜縄文による縄文帯となり，体部上半に変形工字文のみを描くものと，体部全体に地文として斜縄文を施した後に変形工字文を描く場合とがある。この他に列点文，平行沈線文が組み合わされる。第13図12，第14図12の胎土には金雲母を含んでいる。刷毛目調整を施すものが多い。

Ⅱｄ類（第16図13・14，第17図１～６）Ⅱｃ類同様に変形工字文のモチーフが描かれるものであるが，口頸部にくびれを有し，口縁部が外反ぎみとなるものである。

Ⅱｅ類（第17図７～11）わずかに丸みを帯びた体部から口頸部が外反する。平坦口縁あるいは山形突起を有する。文様として口縁部と体部の平行沈線文の間に２条あるいは３条単位の上向きの連弧文が描かれる。体部の平行沈線文の下位には列点文を施す。刷毛目調整痕を有する。

Ⅱｆ類（第18図，第19図１～６）体部から口縁部まで直線的に開くか，わずかに外反する器形で，横位の平行沈線文が施される。平坦口縁と山形突起をなすものがあり，口縁部にはほとんどが斜縄文の施された縄文帯となる。多くの場合，口縁部内面にも平行沈線文が見られる。第18図１は２段にわたる平行沈線文が工字文となっている唯一の例である。平行沈線文は２ないし５条単位で間隔をあけて施され，これが４段以上にわたる場合がある。（第18図14）。刷毛目調整痕が顕著に見られる。

Ⅱｇ類（第19図７～10）Ⅱｆ類と同様に平行沈線文が施されたものであるが，口縁部にくびれを有する。10の土器は胎土に金雲母を含んでいる。

Ⅱｈ類（第20図１～12）浅鉢形土器で，主として鋸歯文が描かれる。９は体部にくびれを有し12は体部下半が著しく丸みを帯びる。２は口唇部と口縁部外面に木目列点文（第三図版４）を並列し，鋸歯文は内面にも及ぶ。８・９には平行沈線間を充填する縦位の刻み目文が見られ，９の上部はやや崩れた重菱形文である。口縁部に縄文帯を有するものは１のみである。ほとんどの土器に刷毛目調整痕が認められる。

Ⅱｉ類（第20図13・14，第21～第23図１～５）Ⅰａ類の甕形土器をそのまま小型化した形態で口頸部文様も類似する。口頸部はゆるやかに外反し，体部上半はわずかに丸みを有している。口縁部に低い山形突起を有するものは少なく，小波状もしくは平坦で，外面に斜縄文が施され，多くは内面にも１～３条の沈線がめぐる。斜縄文がなく，刻み目文である場合もある（第22図９）。頸部にも平行沈線がめぐるが，その下部は無文帯となり，さらに肩部にも頸部に呼応す

るように２～６条の沈線がめぐる。この部位の沈線には粘土粒の貼付がなされるもの（第21図９，第22図１）や，縦位の短沈線が加えられるもの（第23図４），工字文となるもの（第23図５）などがある。平行沈線文の下部には列点文が施されるもの（第22図17）もある。第22図16には頸部内面に斜縄文が施される。体部は斜縄文である縦位の場合もある（第22図１・13）。

Ⅱｊ類（第23図６～15）甕形土器を小形化した形態で，沈線文が施文されずに縄文のみを施す。口頸部がなだらかに外反するものと，わずかに頸部がくびれるものがあり，13はくびれの度合が大きい。８～11，14はくびれ部が磨かれて無文帯となっている。

Ⅱｋ類（第24図）口縁部から底部に至るまでほぼ直線的か，口縁部付近のみわずかに内湾する。太めの沈線と充填縄文手法を用いて連繋菱形文や流動的な曲線文などの文様を描く。

Ⅱℓ類（第25図１～10）口頸部が体部から急角度で外傾ないしは外反する。肩部から体部中央部にかけて丸みをもって膨らみ，直線的に底部に至る。口径よりも体部最大径が大きい。１～５は大きな山形突起を有し，これに沿って両面に沈線文が描かれる。２は口唇部に刻み目が並列し，内面には山形に沿う３条の沈線があり，この下位の横位の沈線との間を連絡して縦位の刻線が加えられている。肩部文様帯には縄文の他，変形工字文，波状工字文，刺突文などの文様を施す。１の変形工字文，９の波状工字文の結節部には明瞭な粘土粒の貼付が見られる。

Ⅱｍ類（第25図11）頸部がわずかに丸みを帯びて膨らむ。口縁部はゆるく外傾するらしい。肩部文様帯に縄文と，丁寧に描かれた鋸歯文を有する。

Ⅱｎ類（第26図１～４）口縁部が頸部から屈折して外傾し，頸部は肩部からほぼ直立する。肩部はわずかに張り出すが，頸部との屈折は明瞭である。低い山形突起を有し，突起の頂部には大きめの刻み，口唇部にはそれよりも小さな刻み目を並列する。口縁部文様帯には斜縄文，頸部には平行沈線文と無文帯が設けられる。２の場合，この平行沈線は12条にも及び，その上下を結ぶように弧線を描く。無文帯の下位に７条の平行沈線文と，鋸歯文を施文している。

Ⅱｏ類（第26図５・６）ゆるやかに外反する口頸部を有し，平行沈線文と鋸歯文を施す。

Ⅱｐ類（第26図７～９）口縁部がゆるやかに外反し，体部もわずかに膨らんですぼむ。横位の平行沈線や曲線文，斜縄文が施されている。９は磨消縄文である。

Ⅲ類（壺形土器）（第27～31図）

Ⅲａ類（第27図１）口頸部がやや急角度で外反する。口縁部外面に２条，内面に１条の沈線を施す。他はよく磨かれて無文である。胎土に金雲母を含有する。

Ⅲｂ類（第27図２～７，第28図１・２）磨消縄文，充填縄文手法を用いた文様が描かれる。第27図４・５・７，第28図１・２などは強く膨らんだ球形の体部を有する。横位沈線文と鋸歯状文の組み合わせ（第27図２～４），連繋菱形文（同図６），錨形文（同図７・第28図１・２）などの文様がある。刺突文，縦位の刻み目文も併用される。第27図７・28図１・２の胎土には金

雲母が含まれる。

Ⅲｃ類（第28図３～11，第29図）短かく外反する口頸部を有し，肩部は大きく張り出す。肩部に３，４条の平行沈線と，その下位に木目列点文，体部最大径付近にも平行沈線が施され，両者の平行沈線を結んで３～５条の沈線が垂下する。この縦位の沈線の両側にも列点文が施されるものがある。口頸部，肩部は多くは丁寧に磨かれるが，斜縄文を施すこともある。第29図９・11などは極めて大型の壺である。

Ⅲｄ類（第30図１～９）肩部のみの破片であるが，変形工字文と刺突文が施文される。

Ⅲｅ類（第30図10）無頸壺である。少くとも３段にわたって平行沈線文が施されている。３個の補修孔があり，外面と土器断面に天然アスファルトが付着している（第四図版２）。

Ⅲｆ類（第30図11・12，第31図１・２）肩部をめぐる平行沈線文を施す。第30図12の下段の平行沈線には縦位の短刻線が見られる。第31図１・２は３条単位の上向きの弧線が加えられる。

Ⅲｇ類（第31図３～10）肩部文様帯に鋸歯文，重菱形文が施文される。鋸歯文は４のように平行沈線と交互に，少くとも３段にわたる場合がある。５・６は２，３条１単位で施文される。

Ⅲｈ類（第31図11）Ⅲａ類の口頸部形状に類似して，ゆるやかに外反する口頸部であるが，口縁部および頸部・肩部の境に刻み目を有する隆帯がある。口縁部隆帯の刻み目は幅広く，相互の間隔も広い。この下位に３条の平行沈線があり，口縁部内面にも１条めぐる。

Ⅳ類（高坏形土器）（第32・33図）

Ⅳａ類（第32図１・２）口縁部が軽く外反し，頸部はくびれ，体部がほぼ直線的に脚部付け根に至る。口縁に低い山形突起を有するが，その単位は不明である。１のくびれ部付近には縄文帯を残し，体部下半の斜縄文との間に変形工字文が描かれる。１・２ともに口縁部内面にも沈線がめぐる。

Ⅳｂ類（第33図４）坏部と脚部付け根付近に平行沈線を引き，その間を斜縄文で埋める。坏部はわずかに内湾している。

Ⅳｃ類（第32図３～12）脚部に平行沈線文と波状文が描かれるものである。沈線文の他はよく磨かれるが10のみ縄文を施す。脚部はわずかに内湾するが，ほぼ直線的な場合もある。

Ⅳｄ類（第33図１・２）脚部に２段にわたる平行沈線が施される。器面はよく研磨されている。

Ⅳｅ類（第33図３）沈線による区画内に縄文を充塡した文様が脚部に描かれる。

Ⅳｆ類（第33図５）付け根からほぼ直線的にのびる脚部である。上下の平行沈線間に２条１単位の鋸歯文が施文される。

Ⅴ類（蓋形土器）（第32～34図，第35図１～４）

Ⅴａ類（第33図６～14，第34図１～９）笠形を呈する。上面は凹み，多くは丁寧な篦磨きがなされる。上面と側面の境は直立するか，わずかに外反する。側面は端部までほぼ直線的にのび

る。

Ｖａ$_1$類（第33図６・10・14，第34図１・５～８）無文か刷毛目あるいは斜縄文のみのもの。

Ｖａ$_2$類（第33図７～９，11～13）側面に平行沈線文が施される。第33図８・９のように側面下部に２段にわたるものがあり，この場合，沈線の間には篦磨きが施されている。つまみ部分に斜縄文を施すものがある（第33図13）。

Ｖａ$_3$類（第34図２～４）沈線と磨消縄文による文様を描く。３は側面に無文帯がめぐる。４は沈曲線による複雑な文様を施したものである。

Ｖａ$_4$類（第34図３・９）平行沈線と磨消手法を用いる。９には４条単位の鋸歯文がめぐる。

Ｖｂ類（第34図10～12，第35図１・２）倒皿形を呈する。上面は平坦であるが，第34図12のみわずかに凹む。上面に十字形文，側面に平行沈線がめぐる。鋸歯文も見られる（第35図２）。

Ｖｃ類（第35図３・４）偏平な板状を呈するが，上面がわずかに丸みを帯びる。３は端部に１条の沈線がめぐり，少くとも17条の平行沈線が施される。４は２重の同心円の中に十字文を描き，この中に走向の異る縄文を交互に施文する。円文の間は無文帯となし，その外方にも縄文を施文する。

その他の土器

第35図５～10：台付鉢形土器の台部で，平行沈線文，弧線文，刻み目文などが施される。10は透し孔を有する。

第35図11～14：甕形土器の底部周縁部である。この部分のみ横位の刷毛目調整が顕著である。

籾圧痕土器：（第四図版５・６）甕形土器底部の縁辺部に籾圧痕が付着する。大倉遺跡出土土器の中で籾圧痕を認めるものは本例のみである。

２　石　　器

石　鏃（第36図１～５）１～４は凸基有茎式で基部の作り出しが明瞭である。全体に厚みがなく，調整は１を除いて縁辺部に限られる。１～３は基部に天然アスファルトが付着する。５は凸基無茎式で，片面中央部に自然面を残し，１～４に比べ厚みがあり，丁寧な調整が施される。

石　錐（第36図６）縦長の剥片の縁辺と末端に調整を加えるが，主要剥離面を大きく残している。基部と錐頭部の区別は不明瞭である。

スクレイパー（第36図７～16，第37図，第38図１～６・８）

１類（第36図７～14）剥片の両側縁と端部に調整剥離を施し，自然面や主要剥離面を大きく残す。端部とほぼ同じ幅か，あるいはやや広い刃部を有し，比較的小型である。９は有柄である。

２類（第36図15・16，第37図１～５）１類よりも長さに対する幅の比が大きく，丸みのある形状を呈する。側縁には，全く調整の加えられないものもある。第37図５は短い柄を有する。14

の端部には天然アスファルトが付着している。

3類（第37図６・７）横長の剝片を利用したもので，自然面や主要剝離面を大きく残し，わずかに調整を加えて刃部を形成する。

4類（第37図８・９，第38図１～６・８）両面に加工した縦長で比較的大型のスクレイパーである。第38図８は打製石斧とすべきか。厚みがあり，断面が菱形を呈するものがある。第38図２は一端を細く加工して柄を作り出したもので，５もやや長い舌状の柄を有する。

磨製石斧（第38図７）基端部のみであるが，両面，両側縁ともに丁寧に研磨されている。

凹　石（第39図１・２）１は長さ14.8cm，幅5.6cmの自然礫を利用したもので，１面を除いて凹みがある。２は半截した礫で，１面に小さな自然面を有する。

その他の石器（第39図３～７）３・４はともに自然面を有するもので，側縁に調整を施す。５は剝片の上下両端の両面から調整を加えたもので，偏平かつ小型である。「楔形石器」に類似する。６は両面から調整を加え，両端を細く尖らせたものである。７は長さ3.3cm，幅1.1cmと細長い石器で，１側縁と両端に調整を施している。

Ⅴ　ま　と　め

秋田県内出土の弥生土器編年に関して幾ばくかの卑見を述べたことがあるが，その後，遠賀川式土器を伴う極めて古い段階の土器群が報ぜられ，さらに後北C_2式土器と終末期の弥生土器の確実な伴出例も出現するに至った。これらを加えた編年は，鐙田出土の大洞A′式の直後の土器として，地蔵田Ｂ・新間・平鹿出土の土器があり，その後に湯ノ沢Ａ，手取清水，横長根Ａ，宇津ノ台Ⅰ群，三十刈・宇津ノ台Ⅱ群，小坂町などの天王山式と続き，後北C_2式と伴出する小坂Ｘ式へと至るものと推定されよう。

こうした編年観に基づいて，大倉遺跡出土土器の各類型をある程度同時性が想定されるまとまりによって群として把えると，大倉遺跡の土器は１～５群に大別することができる。１群は地蔵田Ｂ・新間・平鹿の段階に併行する時期の土器で，量的には少ないが，Ⅱａ類，Ⅲａ・ｃ類，Ⅳａ類の一部・Ⅳｃ・ｄ類などが該当するものと考えられる。２群にはⅠａ類，Ⅱｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇ・ｉ・ℓ・ｍ類，Ⅲｃ・ｄ・ｅ類，Ⅳａ類の一部・Ⅳｃ・ｄ類，Ⅴa_2・a_3・ｂ類などがあり，湯ノ沢Ａないし横長根Ａの時期にわたるものであろう。３群としてはⅠａ類，Ⅱｋ類，Ⅲｂ・ｃ類，Ⅳｅ類，Ⅴa_4・ｃ類があり，ほぼ宇津ノ台Ⅰ群に併行する時期が与えられる。４群はⅠｃ類，Ⅱｈ・ｏ類，Ⅲｇ類，Ⅳｆ類で，三十刈・宇津ノ台Ⅱ群と共通性を有している。５類はⅠｄ類とⅡｐ類で天王山式土器である。これらの変遷を第40図に示した。

大倉遺跡から出土した土器は前述のように発掘調査によるものではないが，県内資料と対比

させてみると年代幅が認められながらも，その主体は２・３群の時期にあり，近隣では横長根A遺跡などと併行する時期にその主たる活動が行なわれ，その後もわずかながら継続して営なまれたものであろう。出土土器の編年的位置関係については近県の研究成果を参酌して，後日その誤りを補訂することとしたい。

参考文献

半田市太郎　「志藤沢遺跡発掘調査報告書」『秋大史学』　第９号　1959（昭和34年）

伊東信雄　「東北北部の弥生式土器」『文化』　第24巻第１号　1960（昭和35年）

奥山　潤・安保　彰　「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生式文化とその後続形態（上）・（下）」『考古学雑誌』　第49巻第２，３号　1963（昭和38年）

奥山　潤　「秋田県北半部の弥生文化終末後の土器序説」『秋田考古学』　10周年記念特集号　1964（昭和39年）

秋田県教育委員会　『脇本埋没家屋第三次調査概報』　秋田県文化財調査報告書　第11集　1967（昭和42年）

富樫泰時　「男鹿市脇本埋没家屋遺跡出土の続縄文土器について」『物質文化』　第10号　1967（昭和42年）

須藤　隆　「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』　第33巻第３号　1970（昭和45年）

横手市教育委員会　『手取清水遺跡発掘調査報告書』　1974（昭和49年）

中村五郎　「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』　1976（昭和51年）

小武海松四郎　『籾痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について』　1977（昭和52年）

男鹿市教育委員会　『脇本埋没家屋第四次発掘調査報告書（小谷地遺跡）』　男鹿市文化財調査報告書　第２集　1982（昭和57年）

伊東信雄・須藤　隆　『瀬野遺跡』　1982（昭和57年）

須藤　隆　「北辺の弥生文化」『縄文土器大成５――続縄文』　1982（昭和57年）

須藤　隆　「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢Ⅰ』　1983（昭和58年）

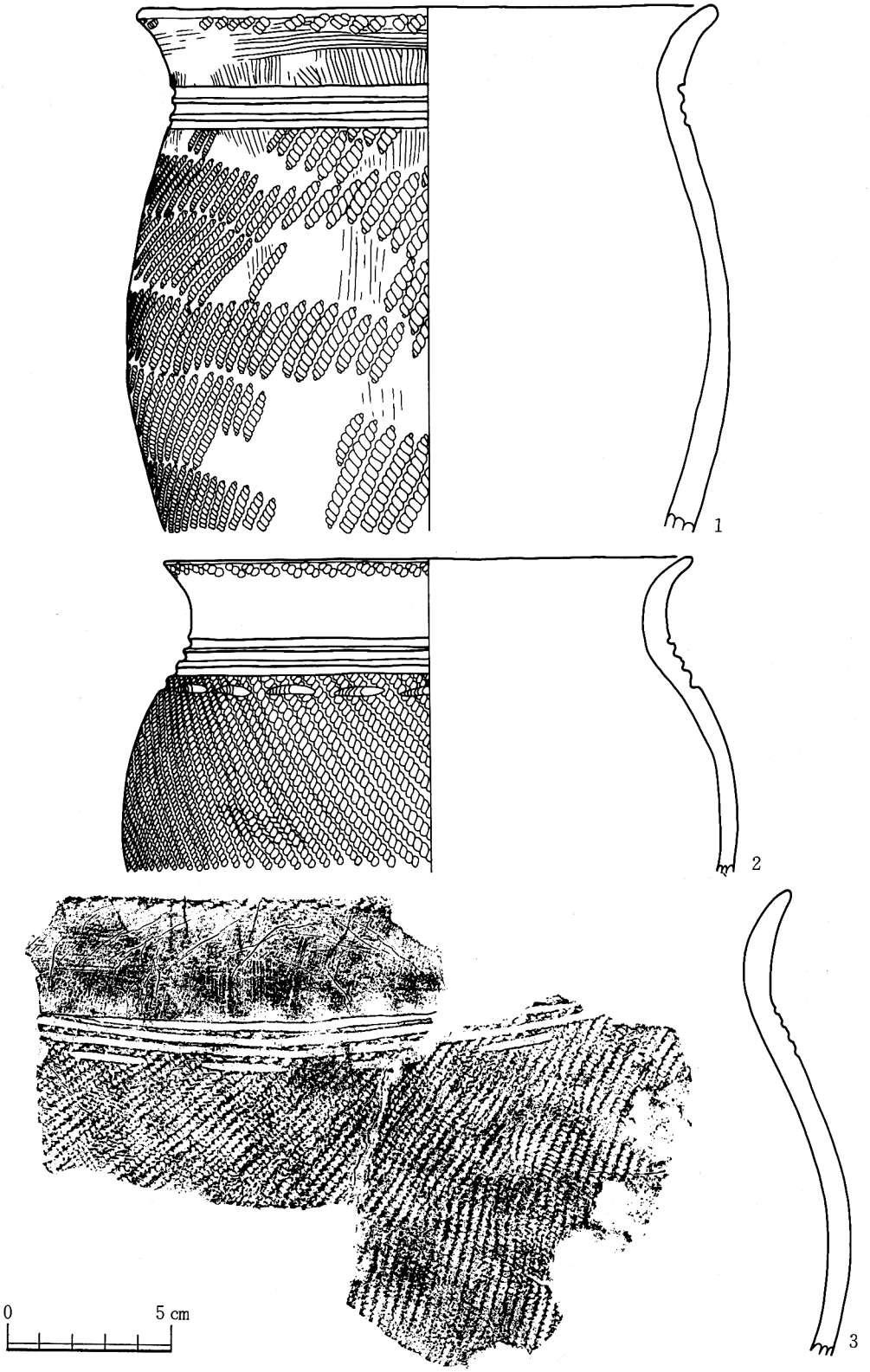
須藤　隆　「東北地方の初期弥生土器――山王Ⅲ層式――」『考古学雑誌』　第68巻第３号　1983（昭和58年）

中村五郎　「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学』　下巻　三世紀の日本列島　1983(昭和58年)

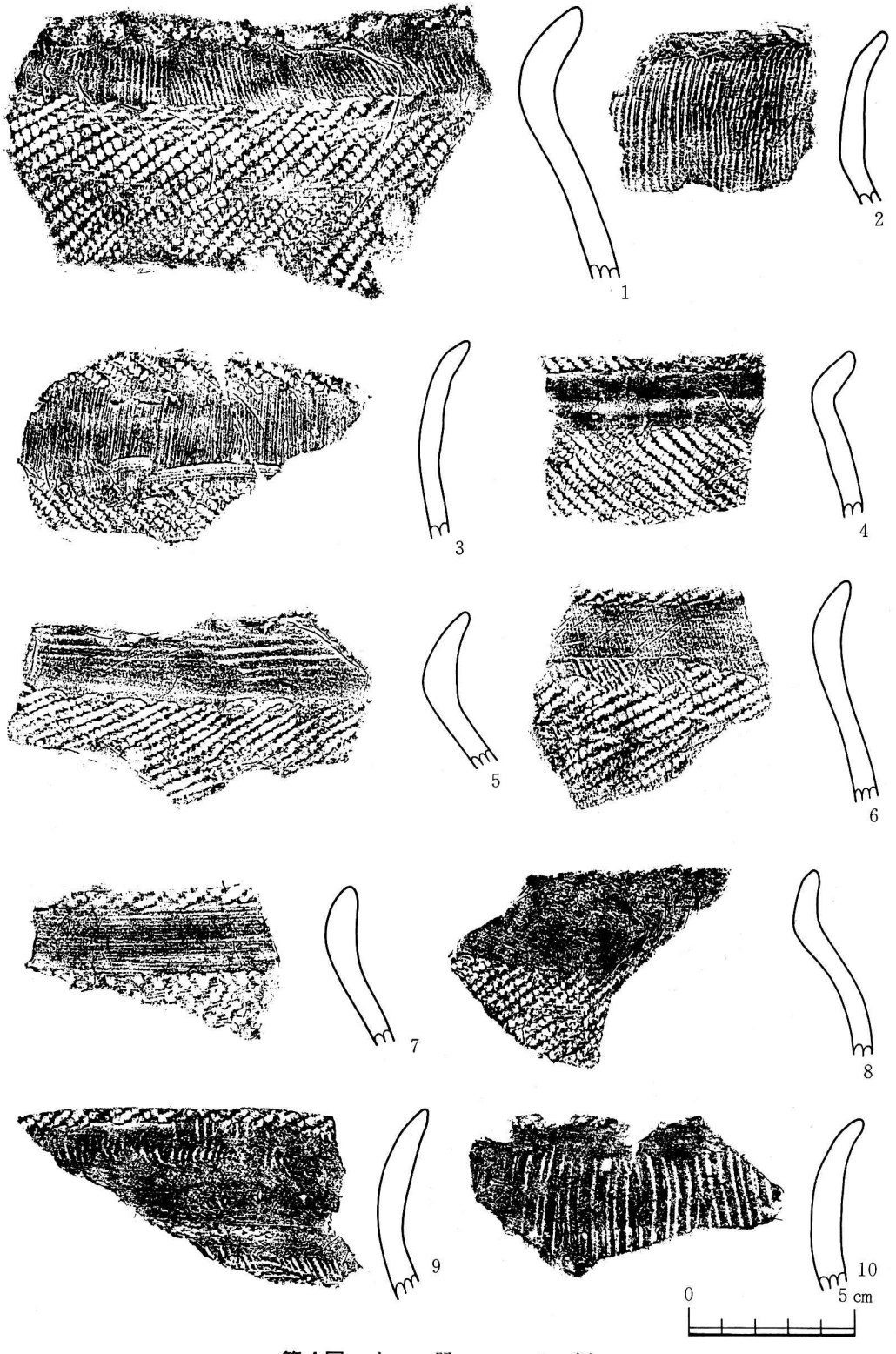
秋田県教育委員会　『平鹿遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書　第101集　1983（昭和58年）

秋田県教育委員会　『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書　第110集　1984（昭和59年）

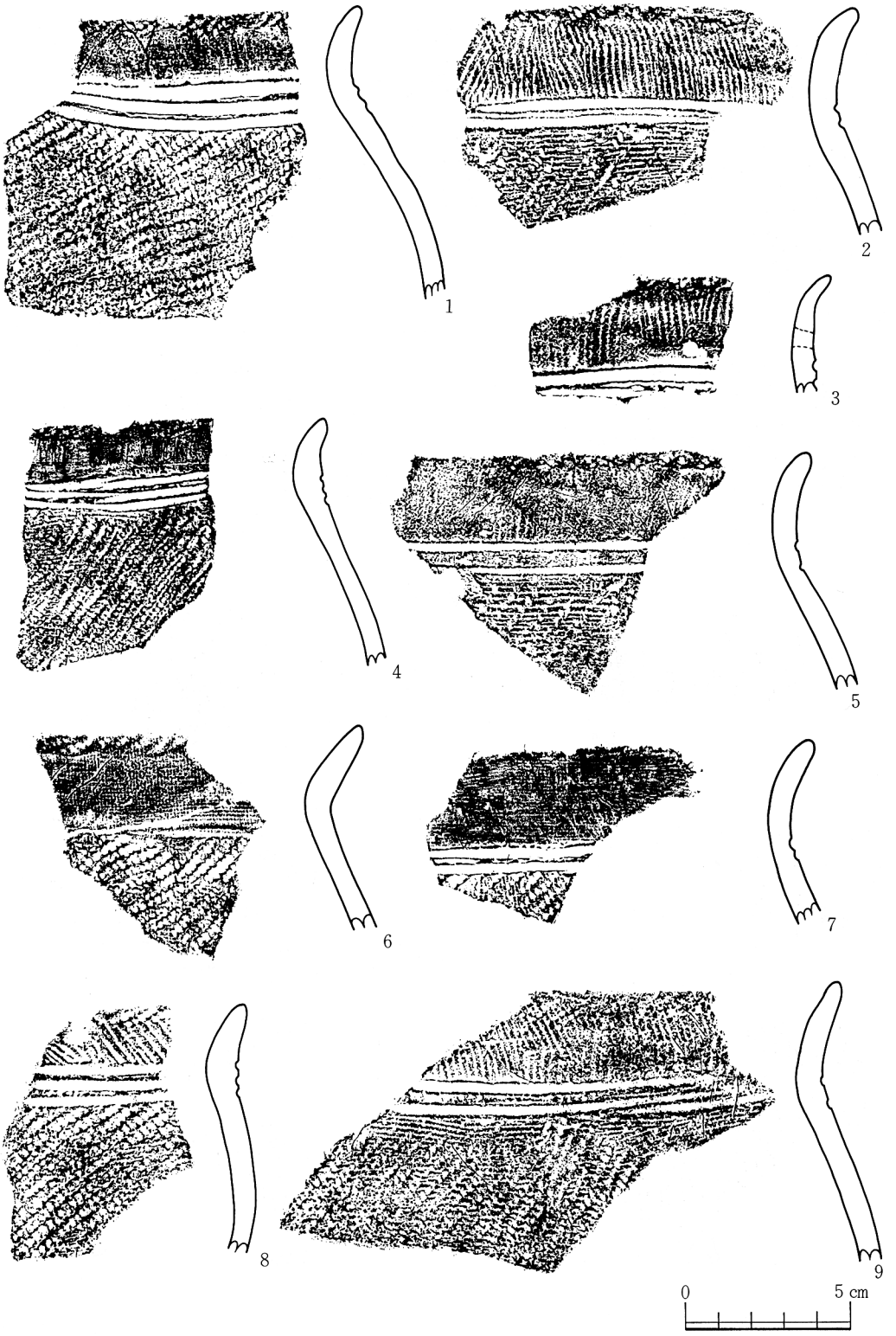
秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
1984（昭和59年）
若美町教育委員会　『横長根Ａ遺跡』　1984（昭和59年）
須藤　隆　「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』　第１巻　考古学篇　1984（昭和59年）
青森県教育委員会・垂柳遺跡発掘調査会　『垂柳遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第88集
1985（昭和60年）
秋田市教育委員会　『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
1986（昭和61年）



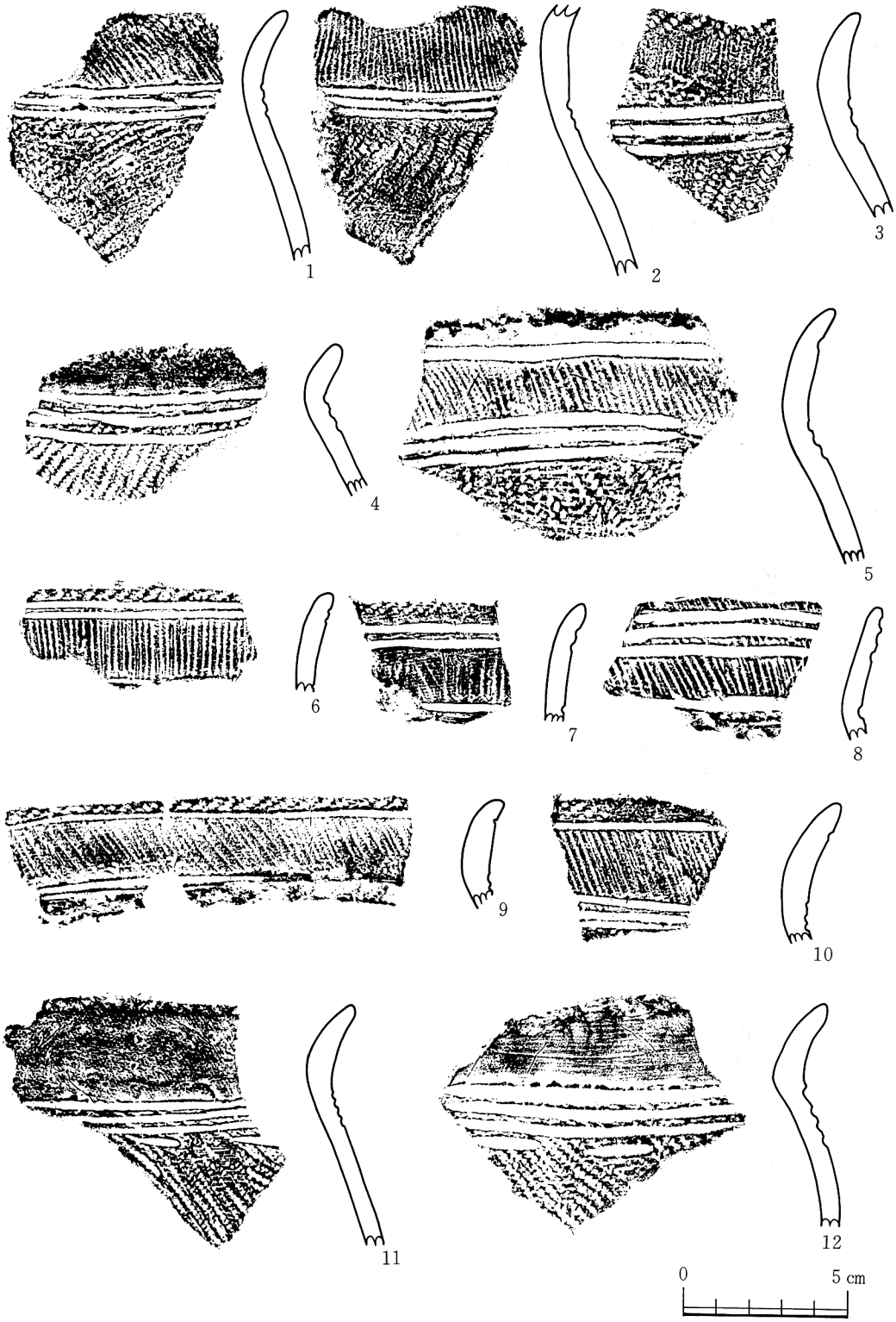
第３図　土　　器　　Ｉａ類



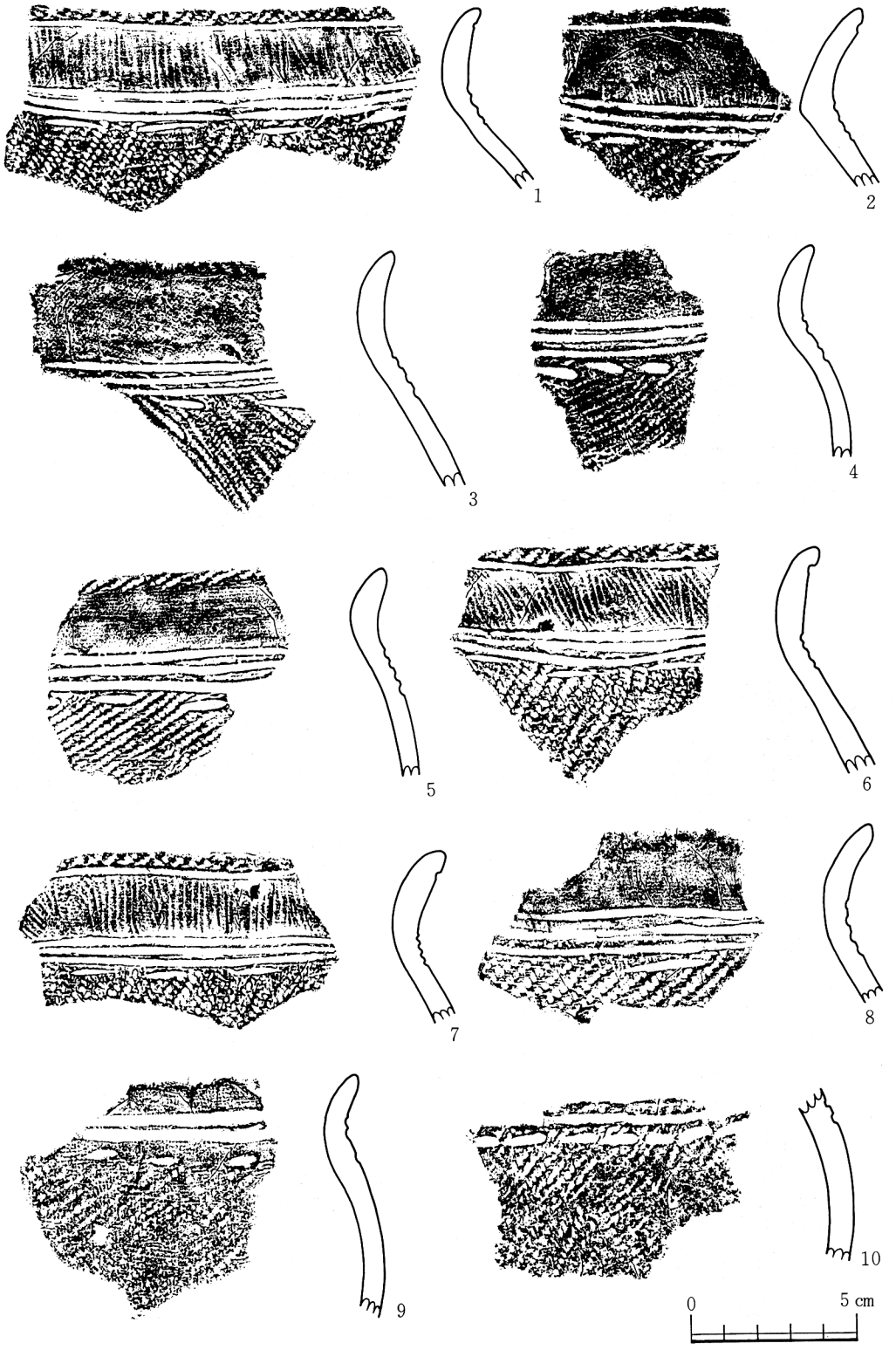
第4図　土　　器　　Ⅰa類



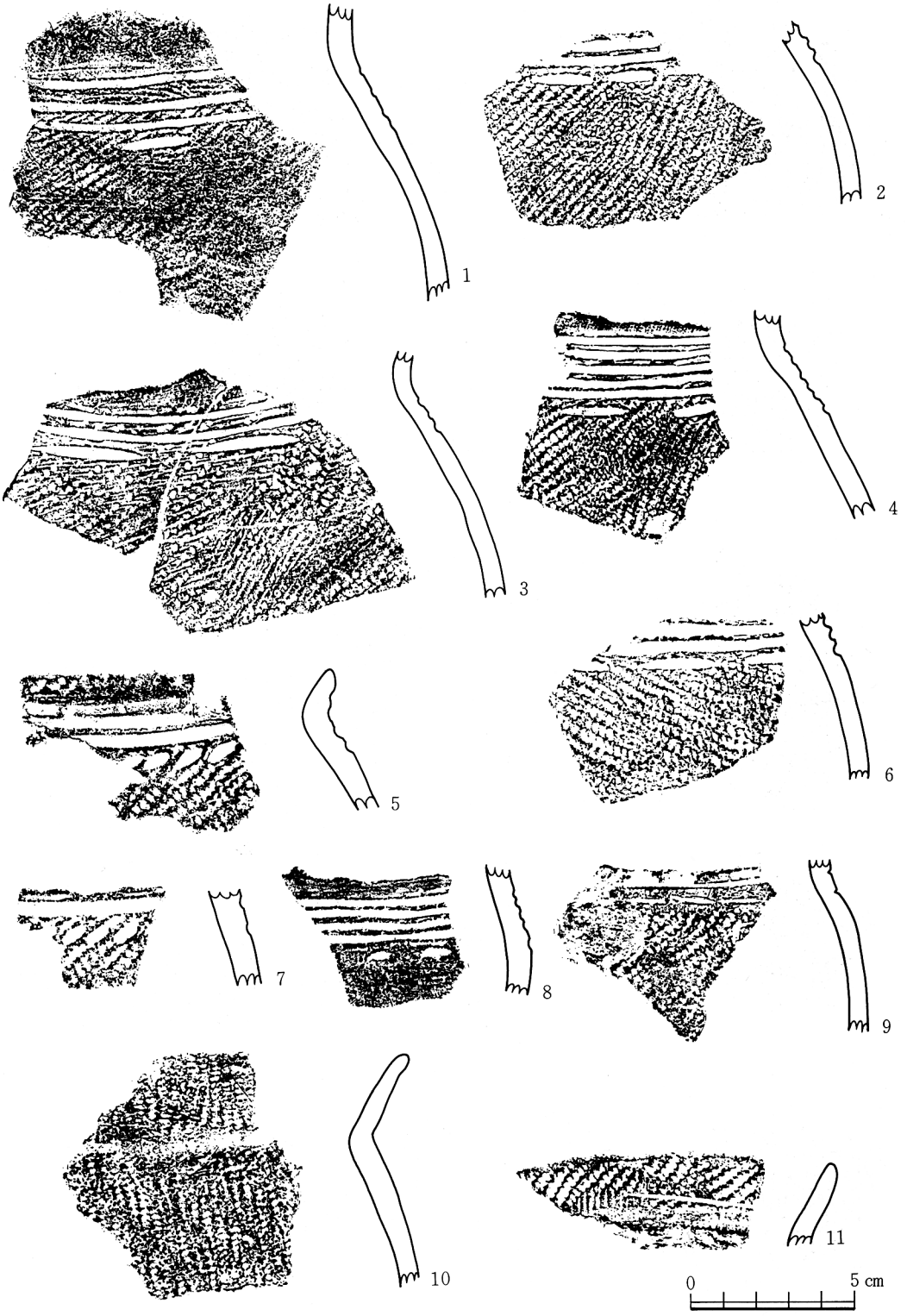
第５図　土　　器　　Ｉａ類



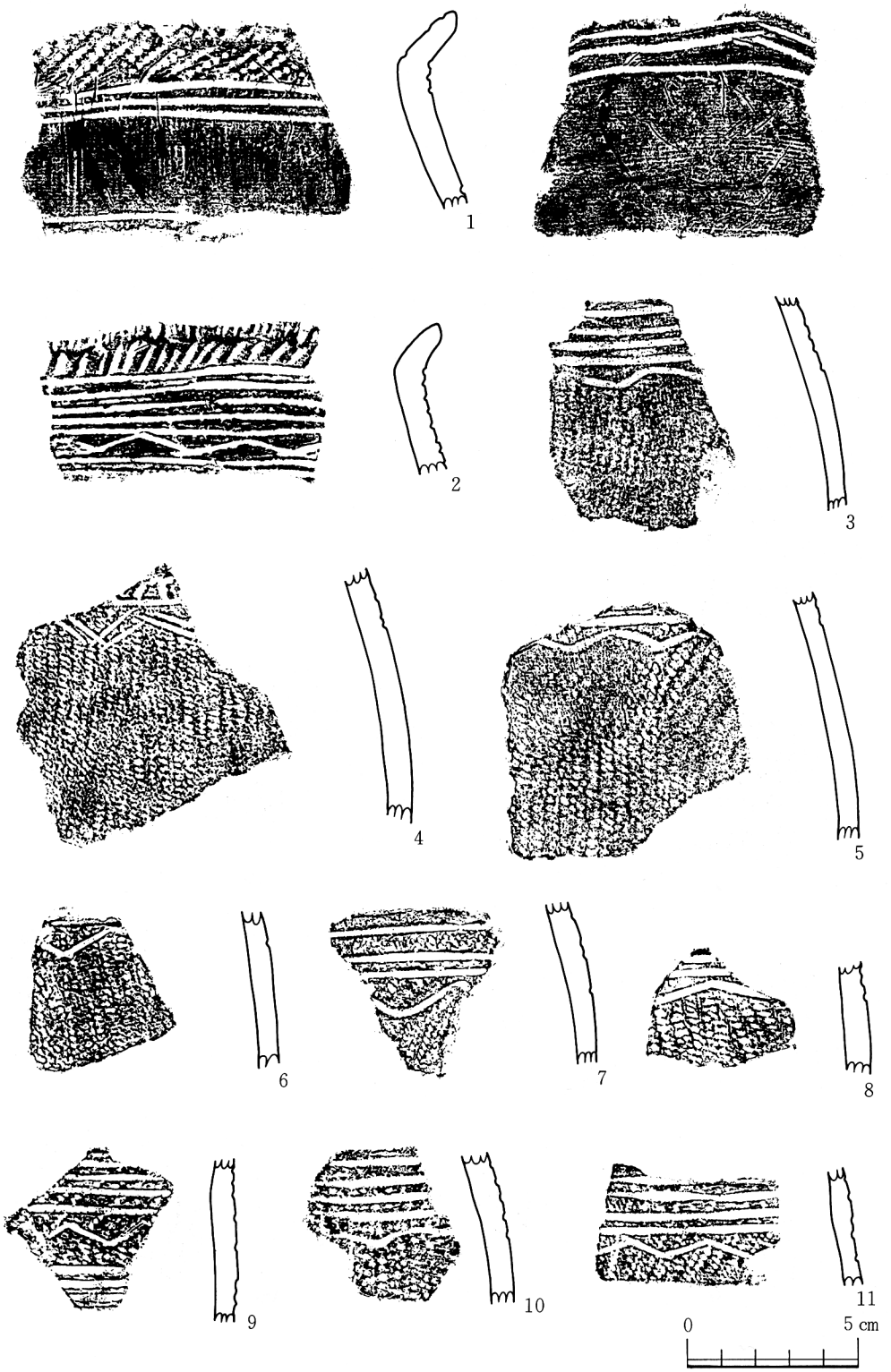
第6図　土　　器　　Ⅰa類



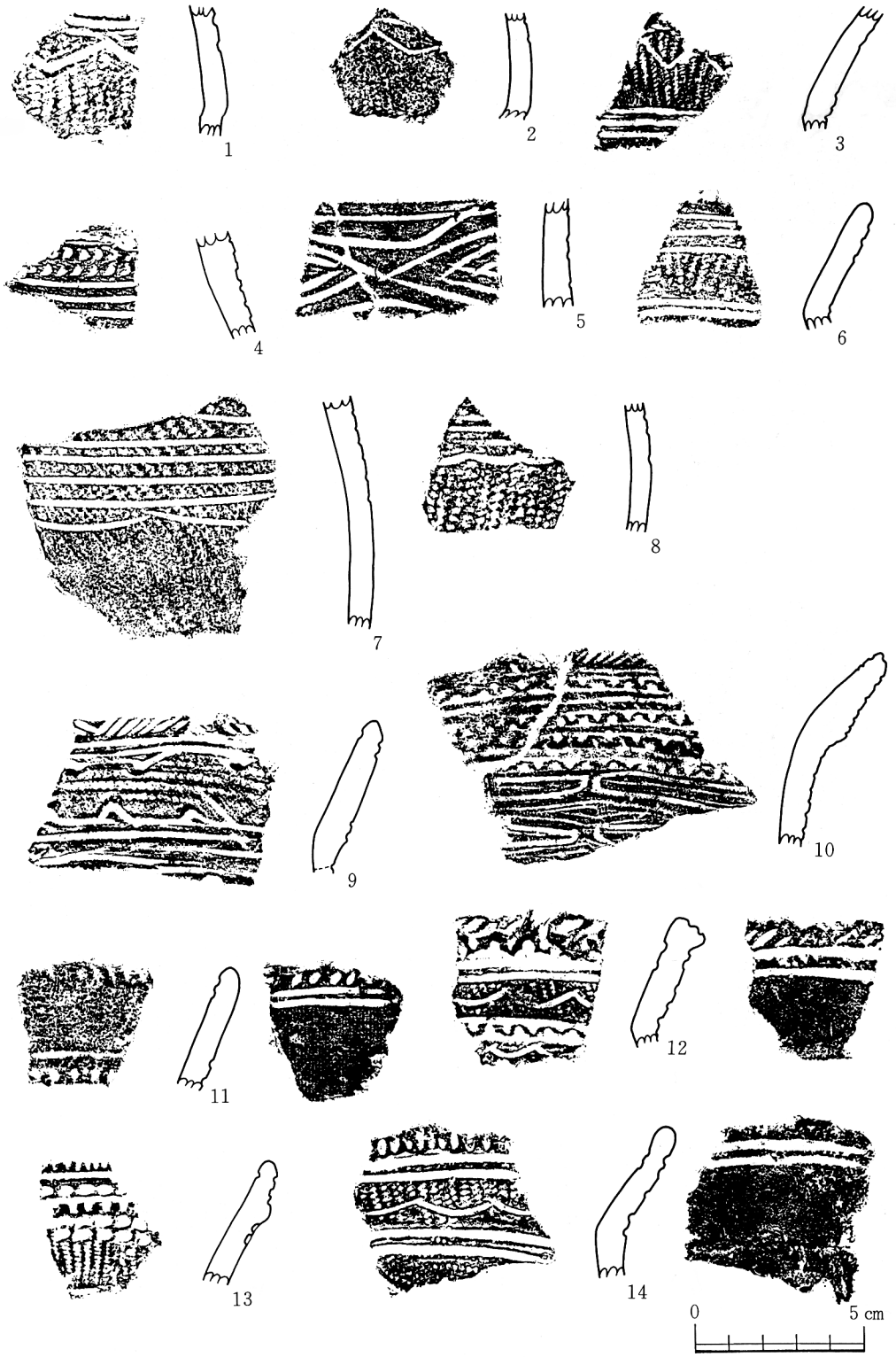
第７図　土　　器　　Ｉａ類



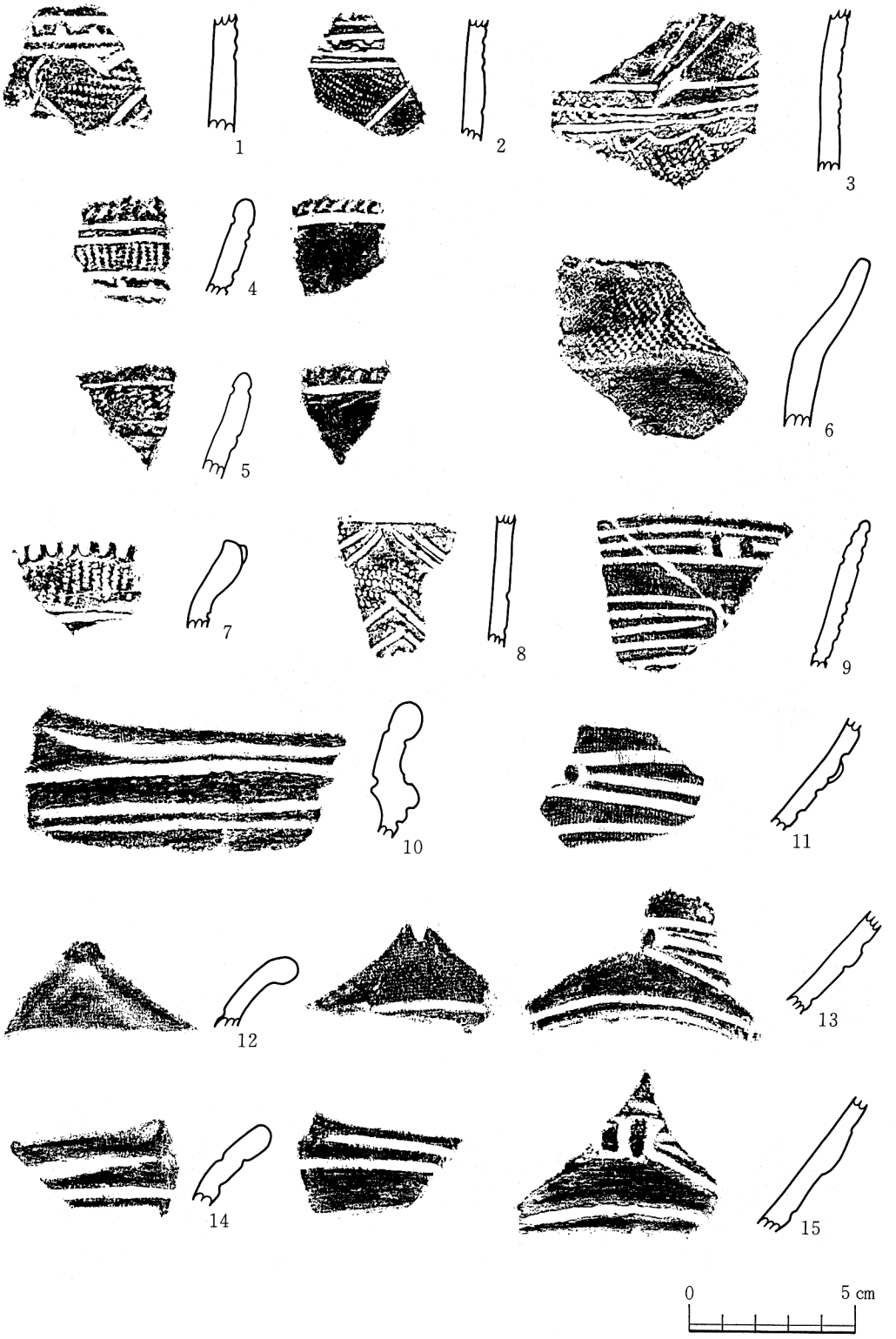
第8図　土　　器　　1～9, Ⅰa類　10･11, Ⅰb類



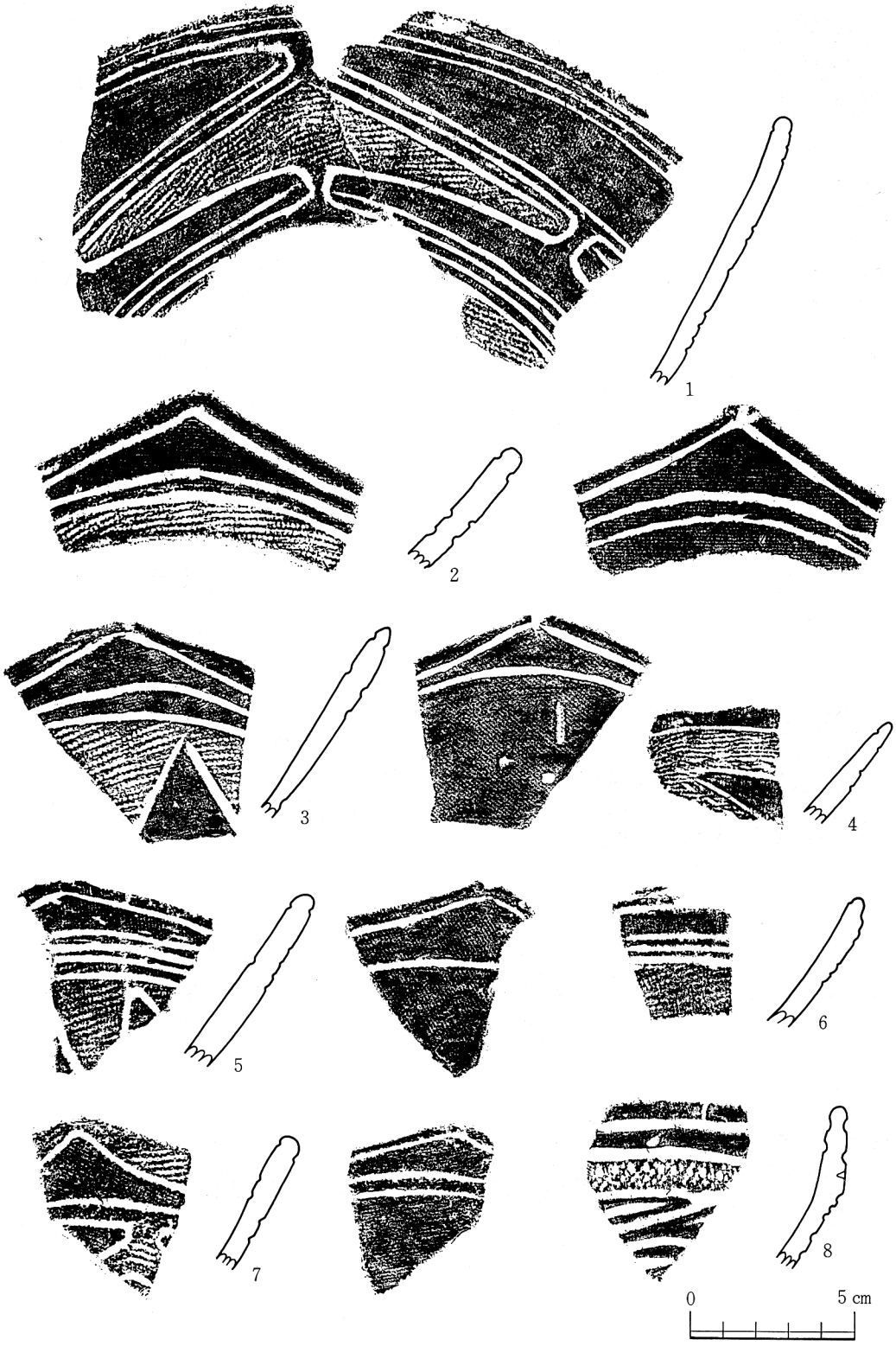
第９図　土　　器　　Ｉｃ類



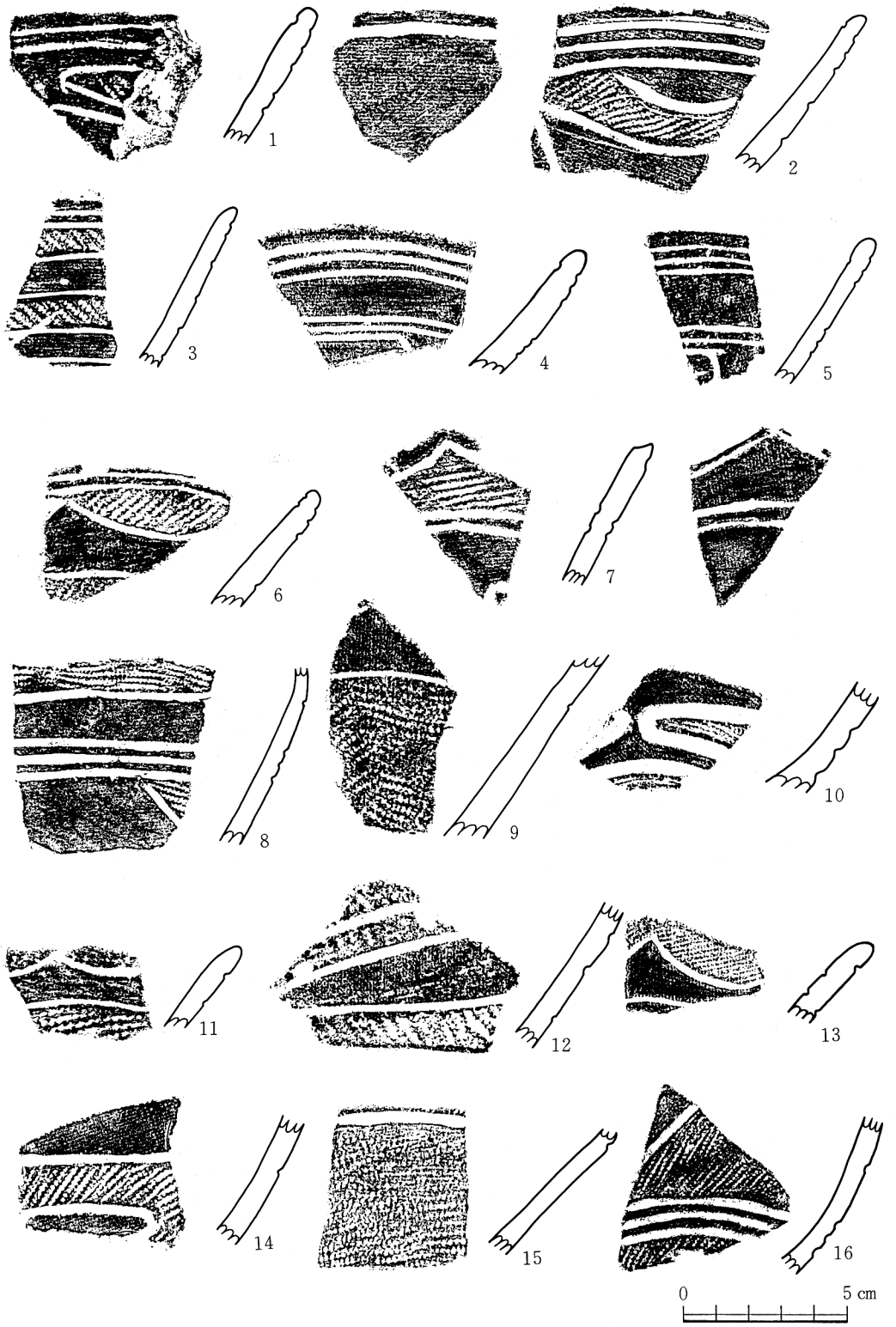
第10図　土　　器　　1～8, Ｉc類　9～14, Ｉd類



第11図　土　　器　　1～8, Ⅰd類　9～15, Ⅱa類

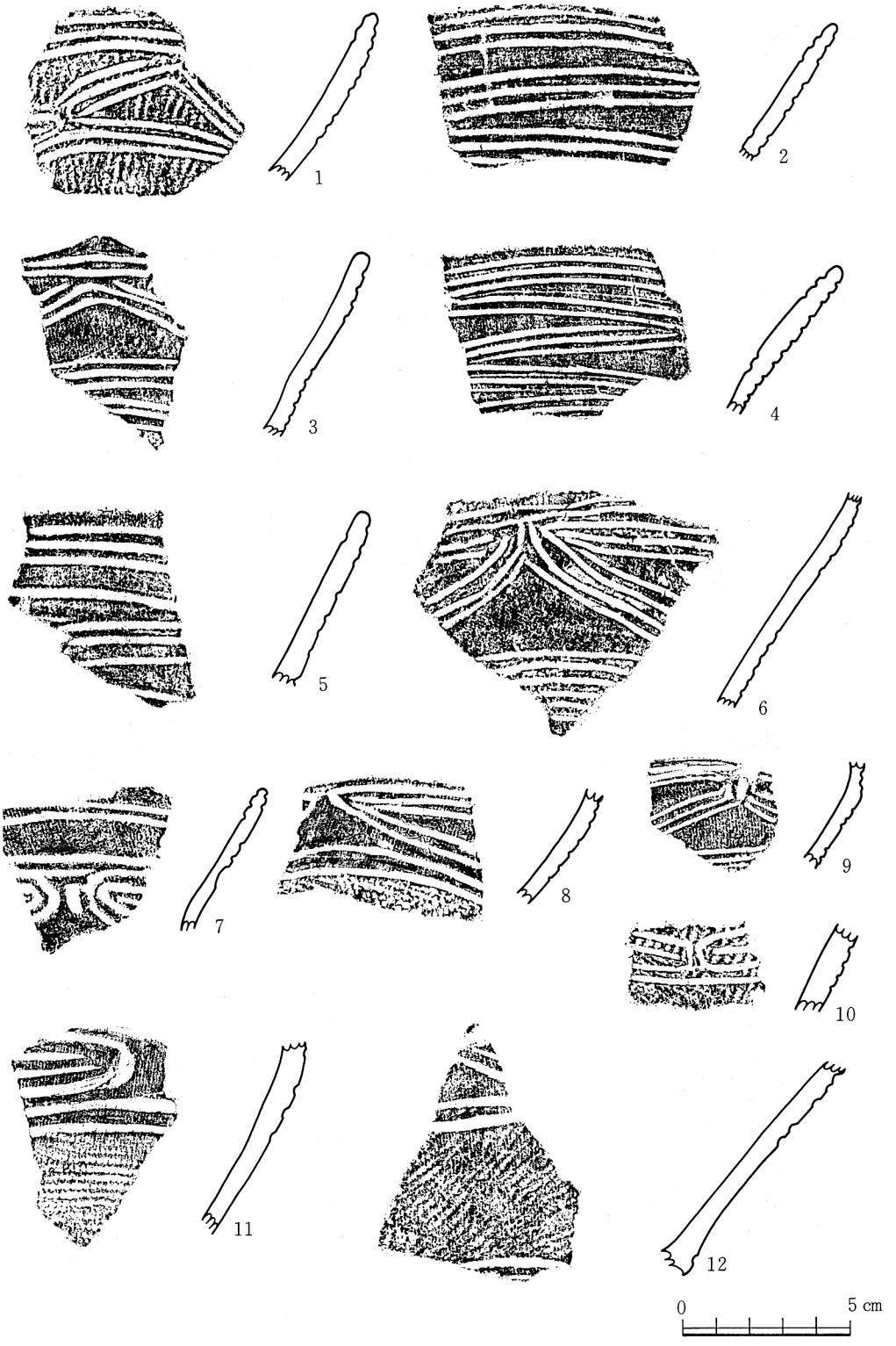


第12図　土　　器　　II b 類

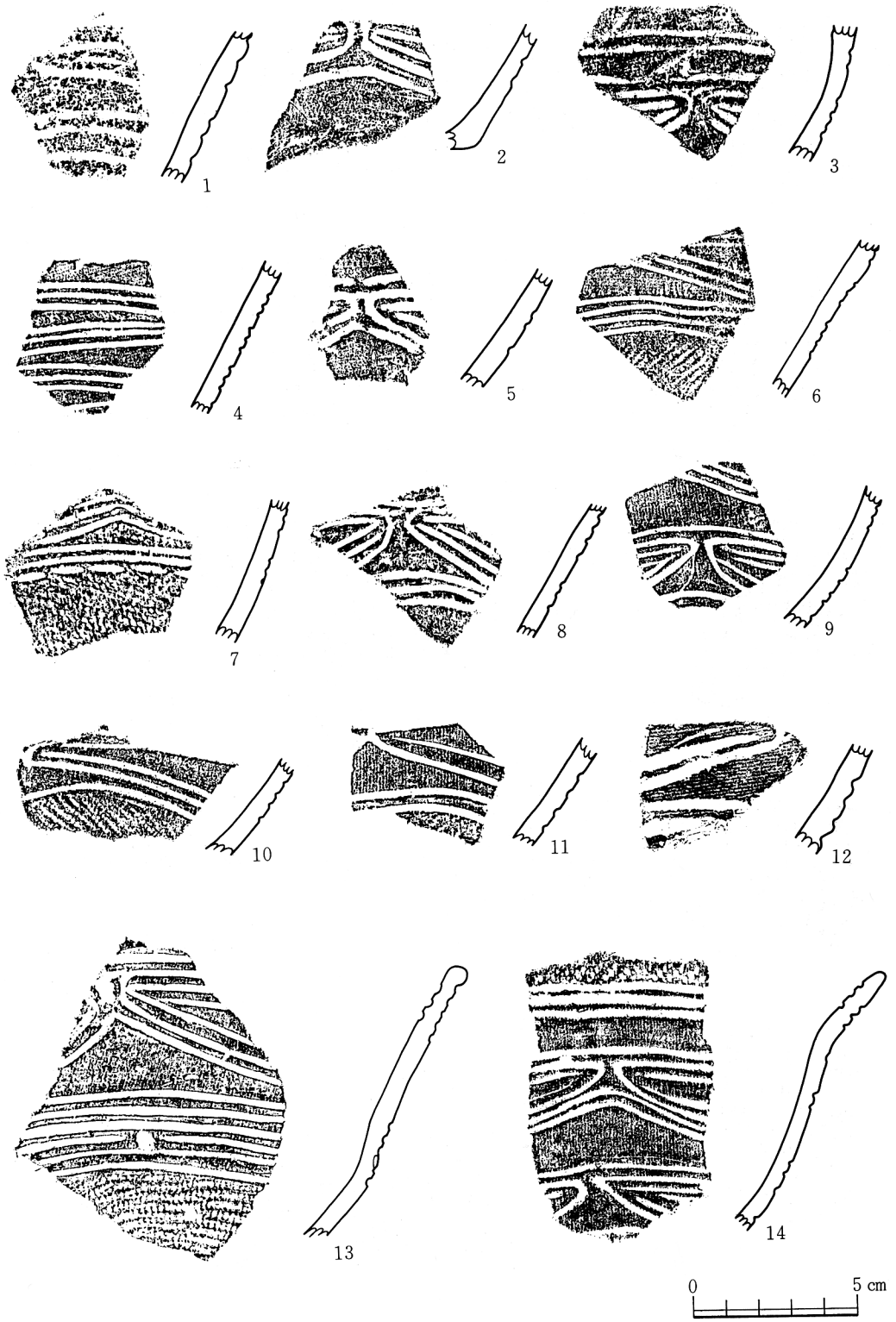


第13図　土　　器　　IIｂ類

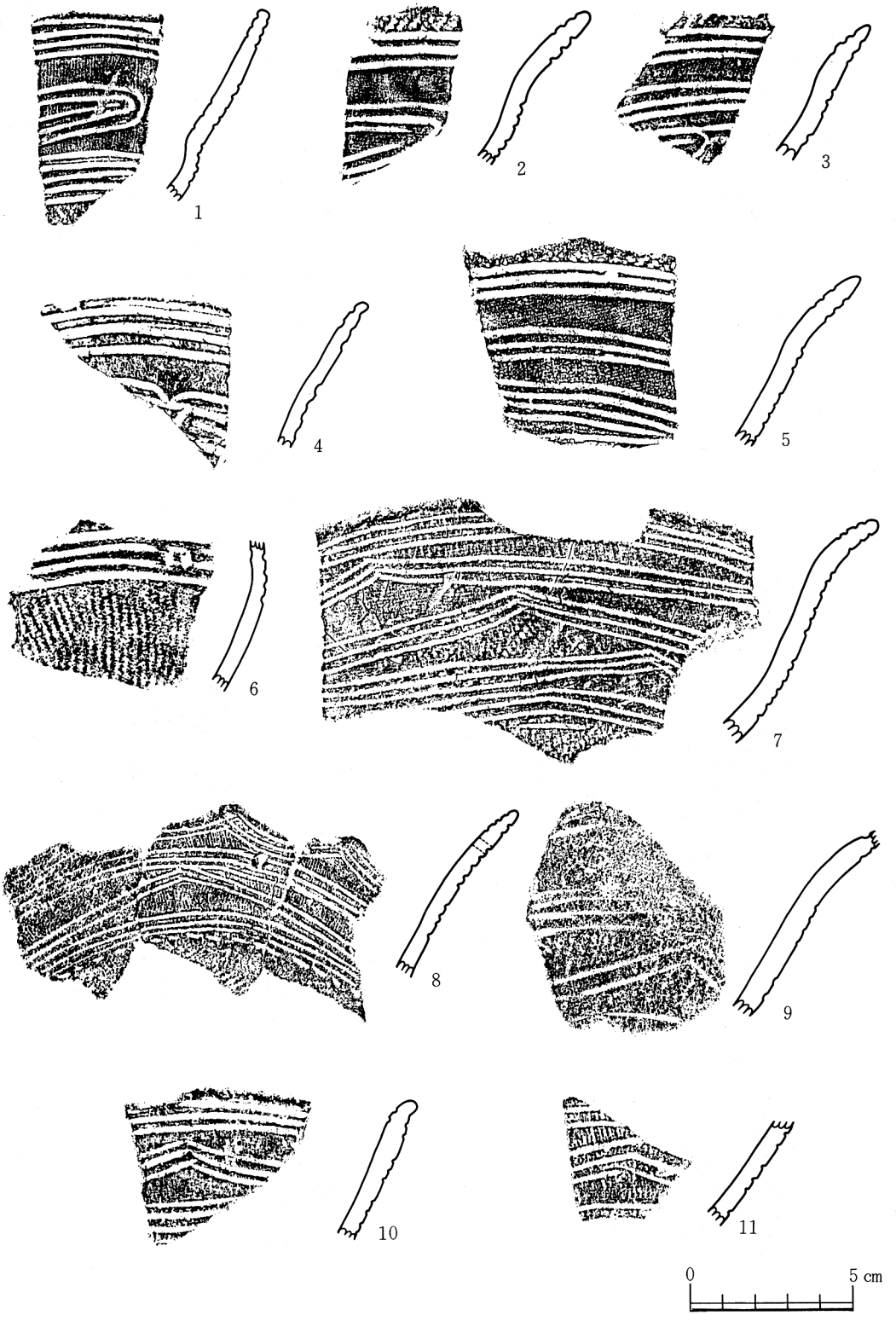
第14図　土　　器　　1～4, IIb類　5～14, IIc類



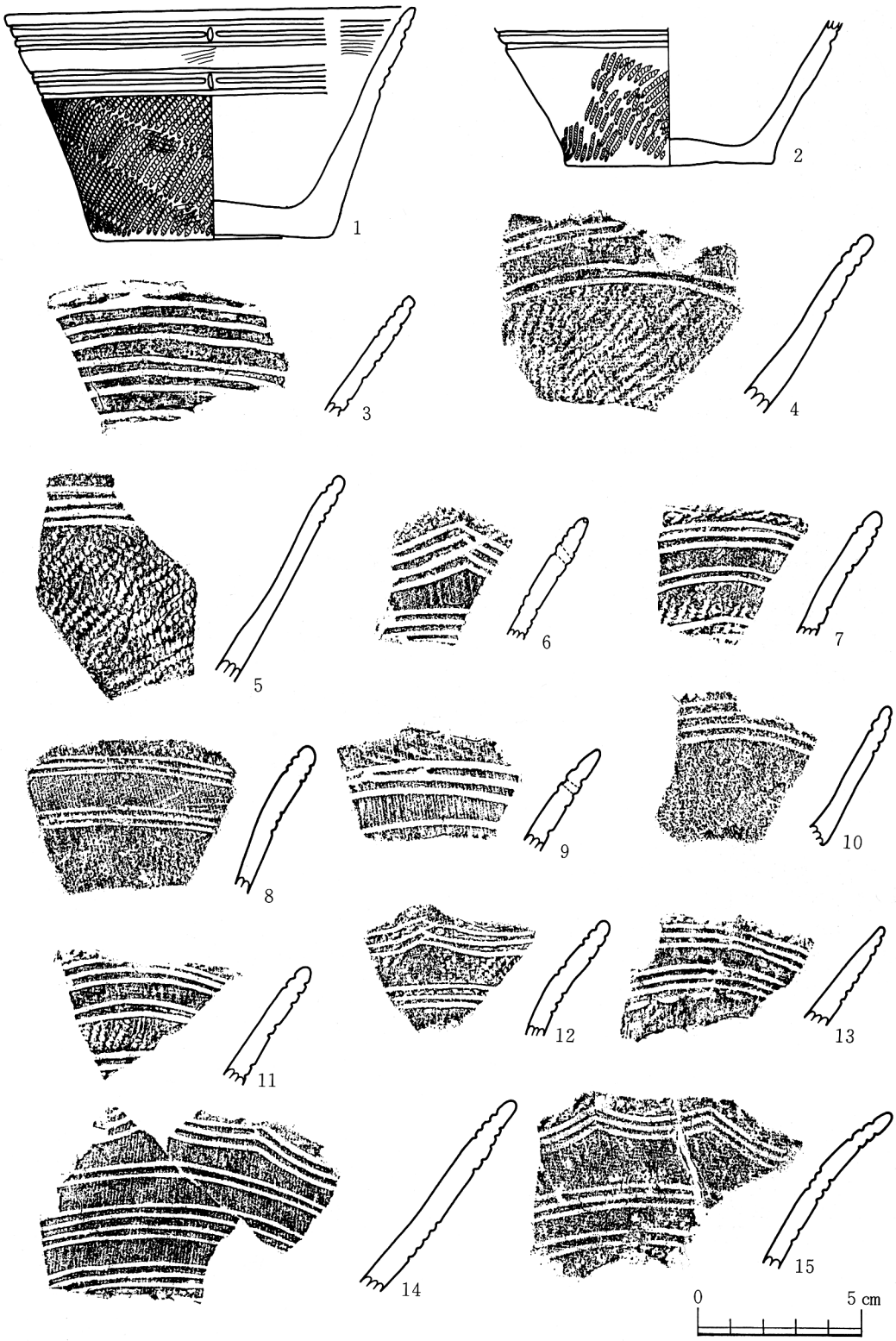
第15図　土　　器　　IIc類



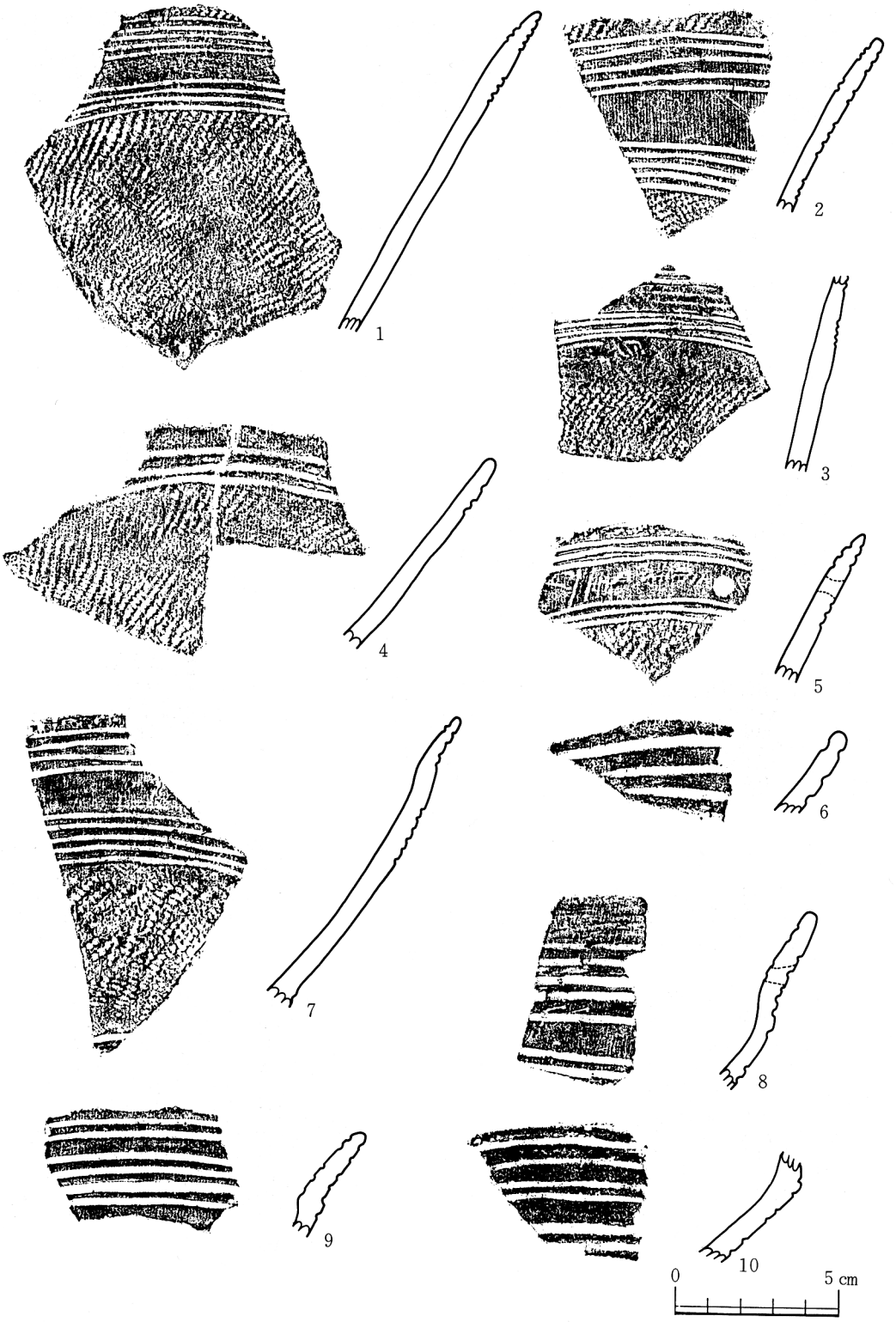
第16図　土　　器　　1～12, II c類　13･14, II d類



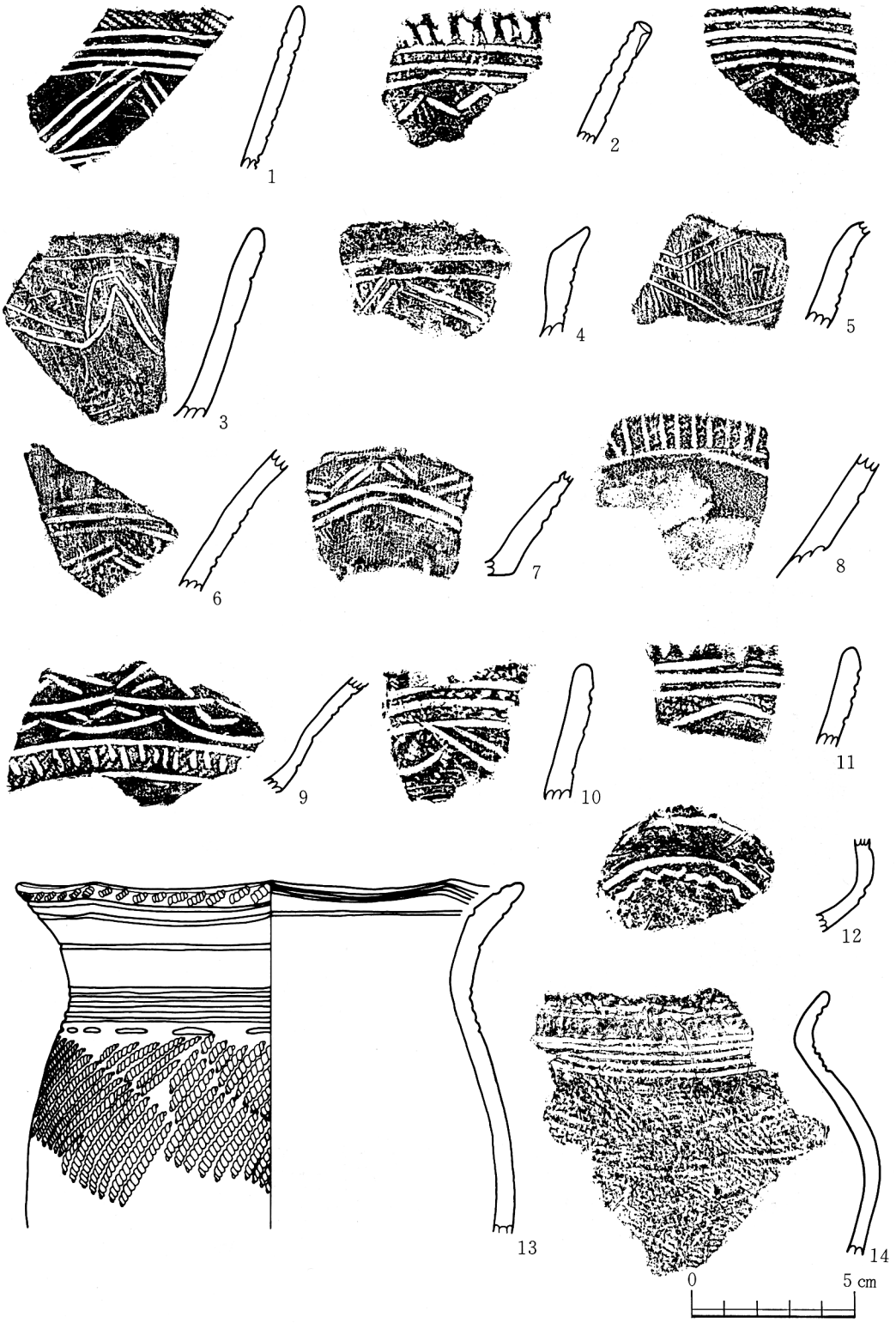
第17図　土　　器　　1～6, II d類　7～11, II e類



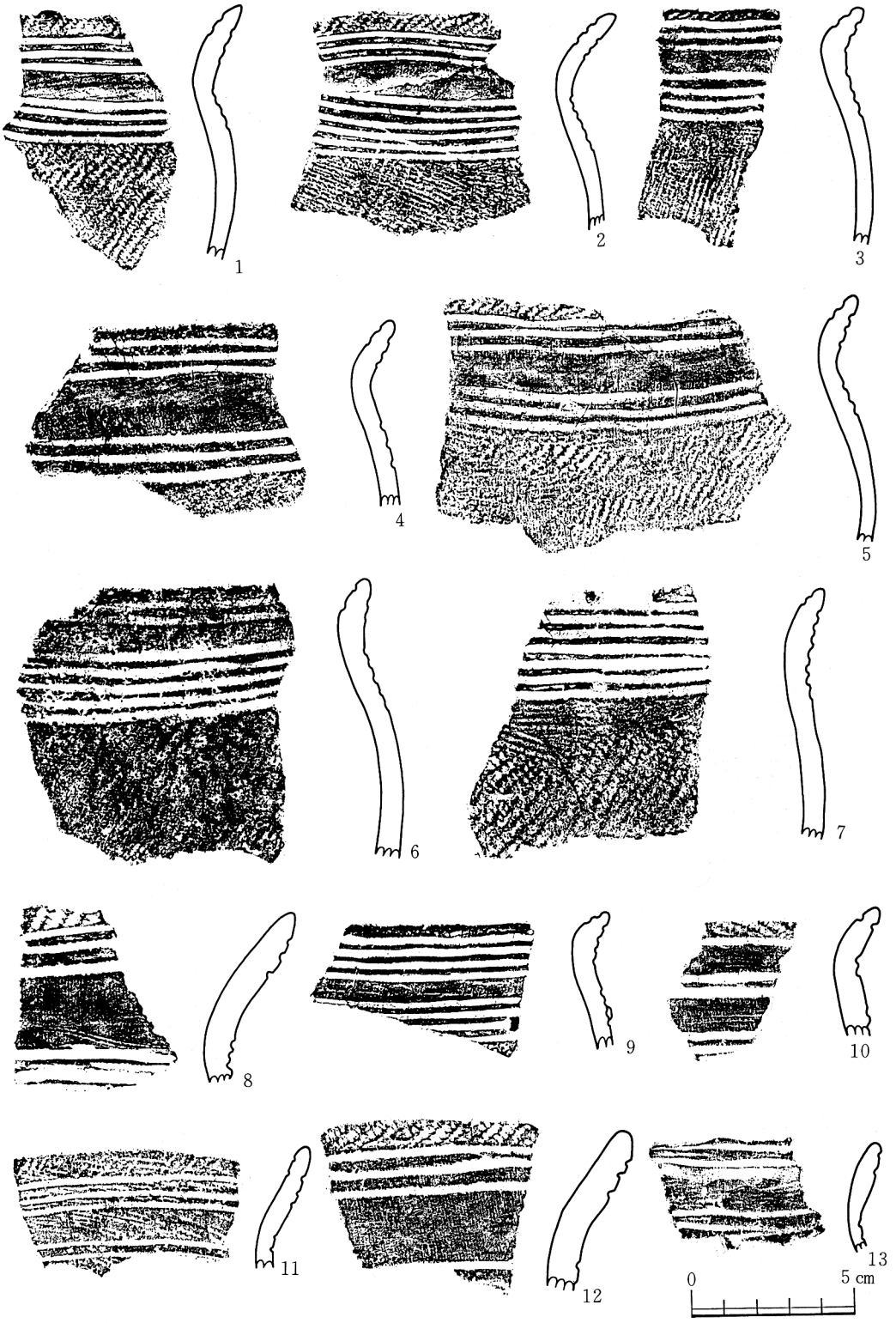
第18図　土　　器　　II f 類



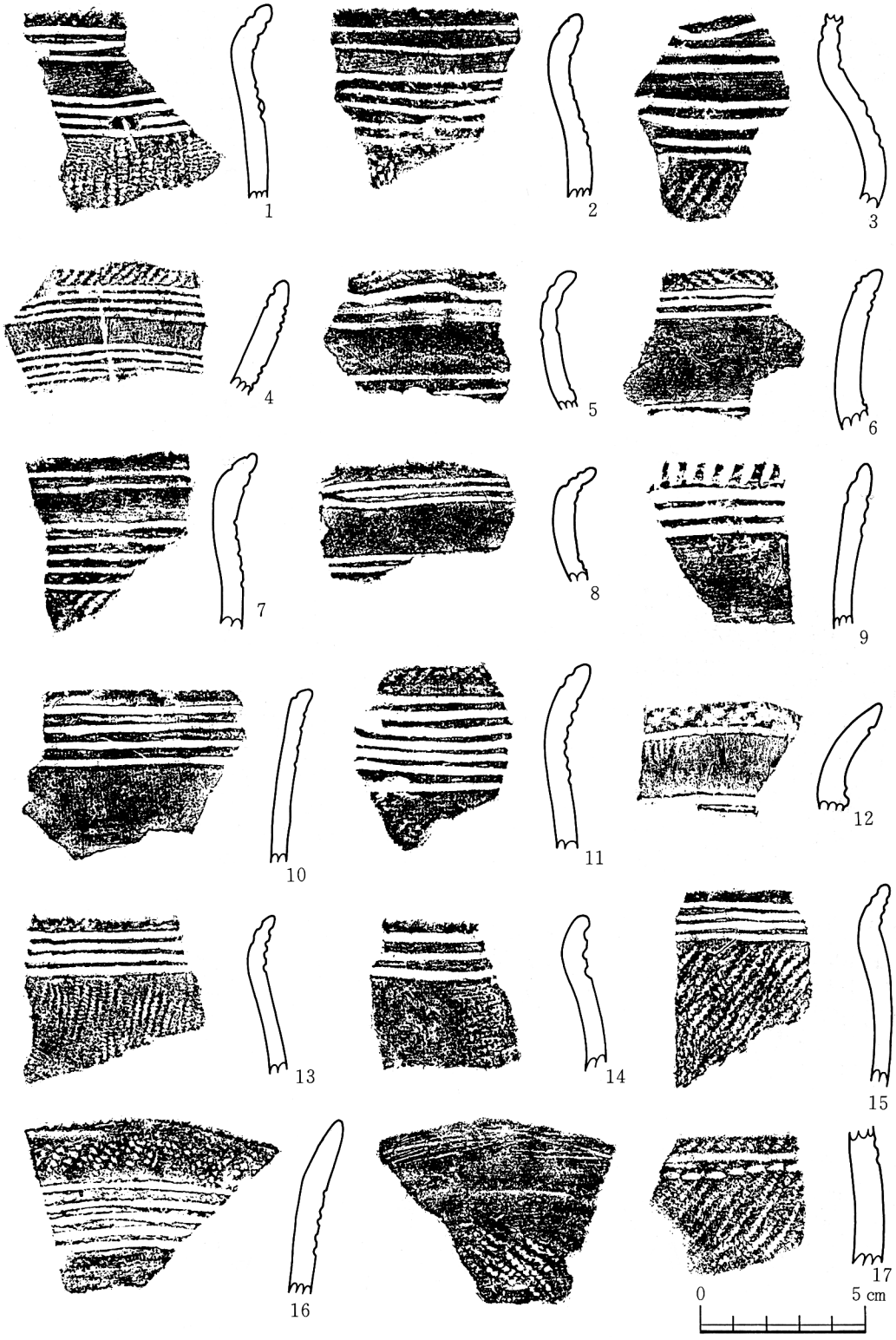
第19図　土　　器　　1～6, II f類　7～10, II g類



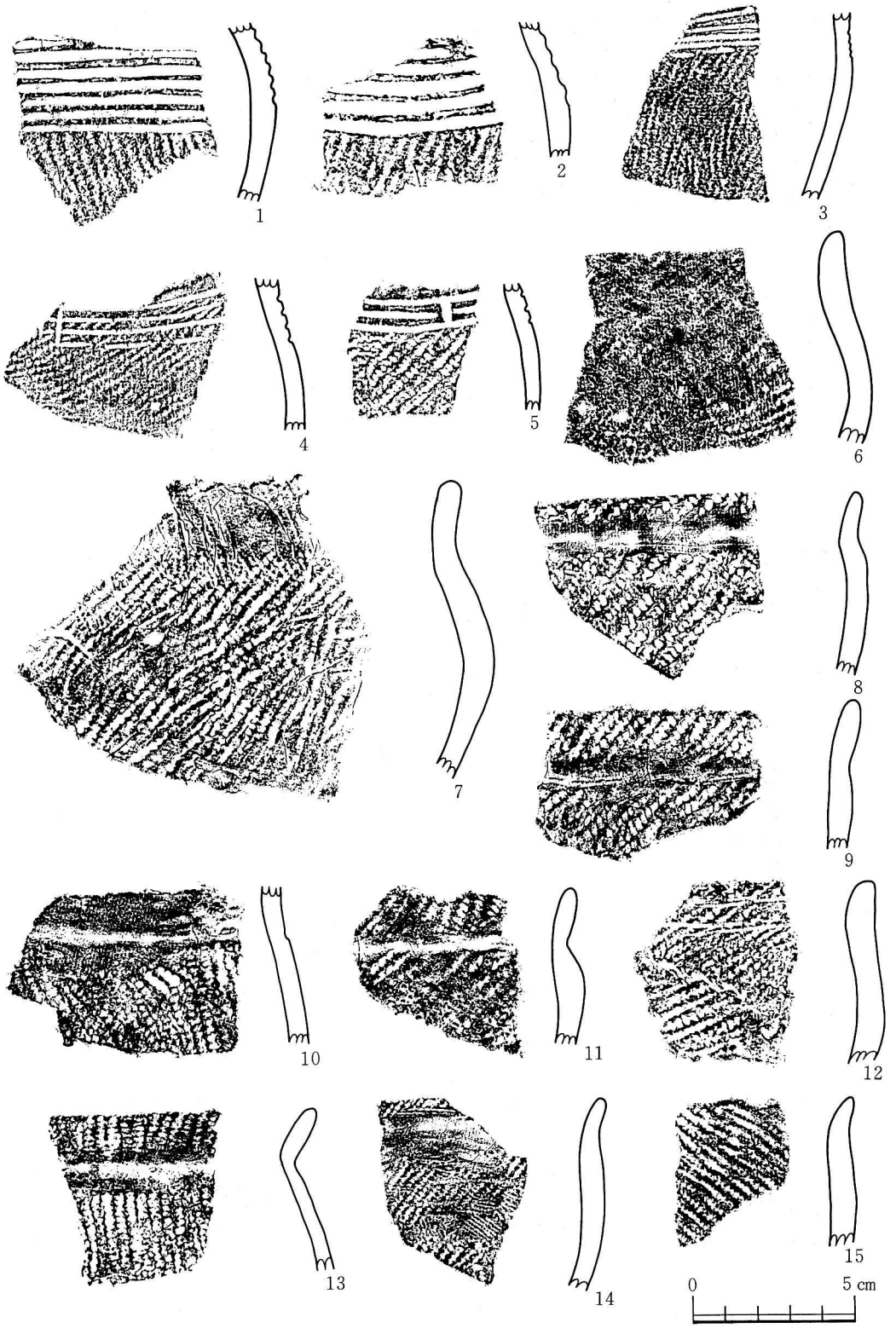
第20図　土　　器　　1～12, II h類　13・14, II i類



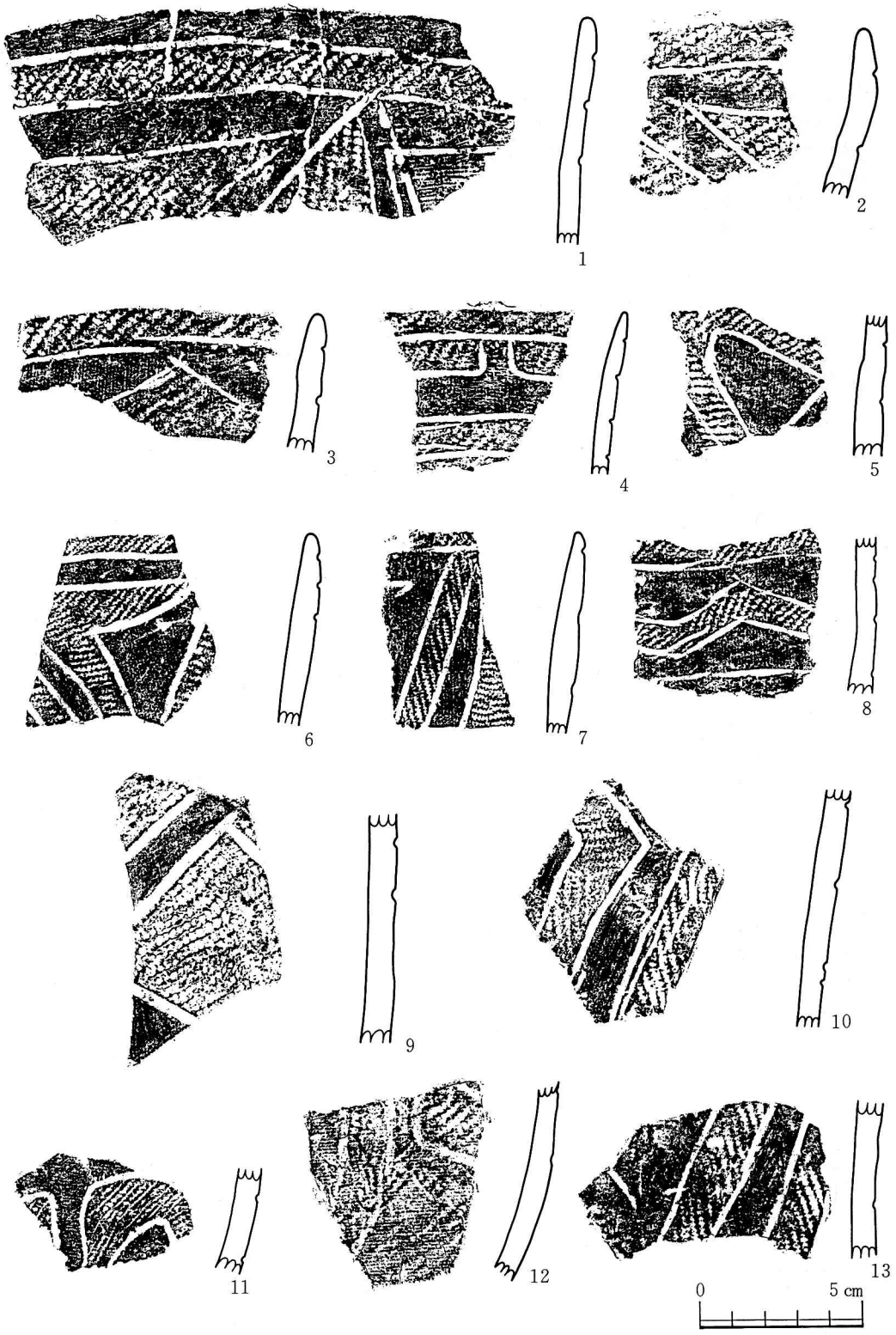
第21図　土　　器　　II i 類



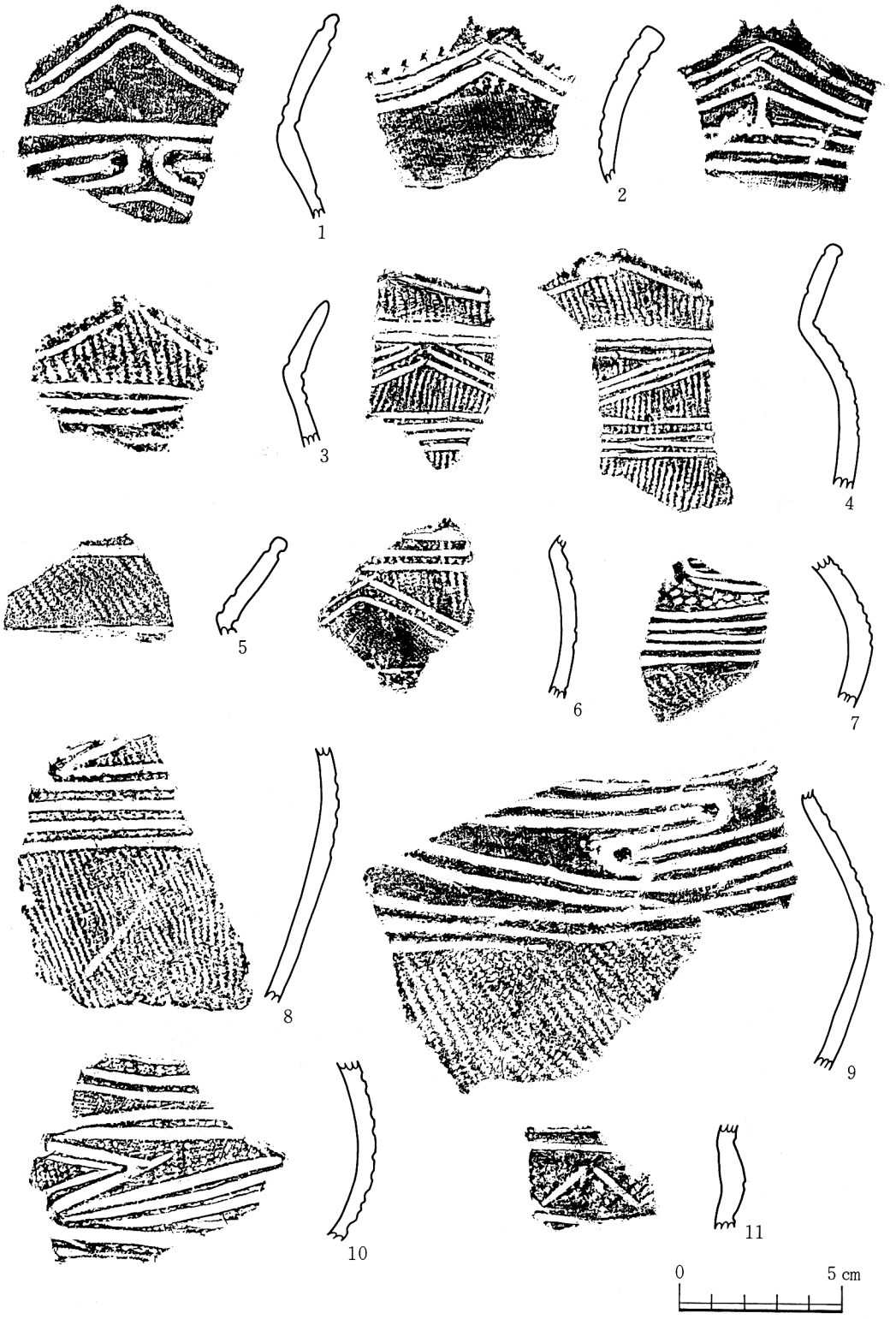
第22図　土　器　　II i 類



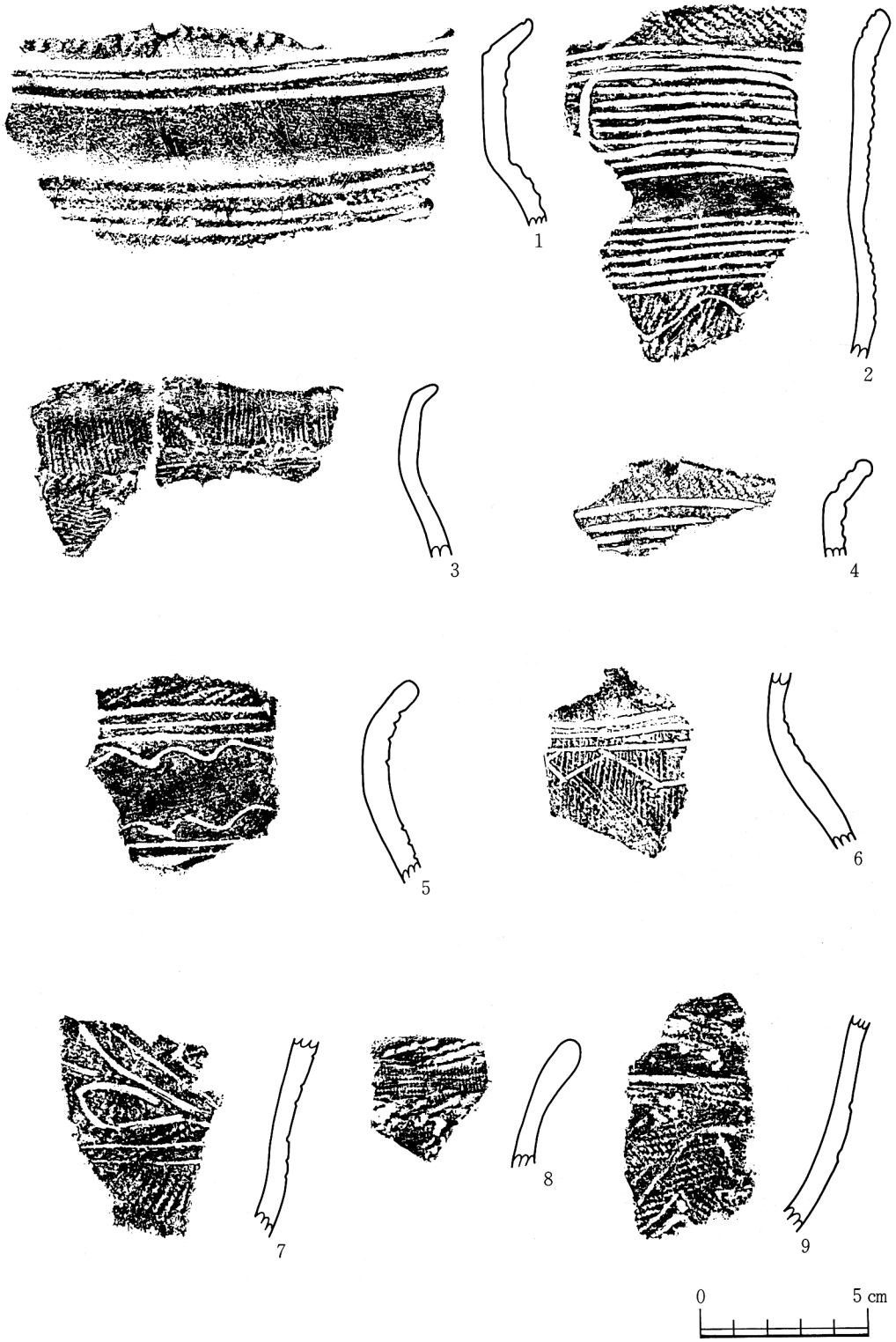
第23図　土　　器　　1～5, II i類　6～15, II j類



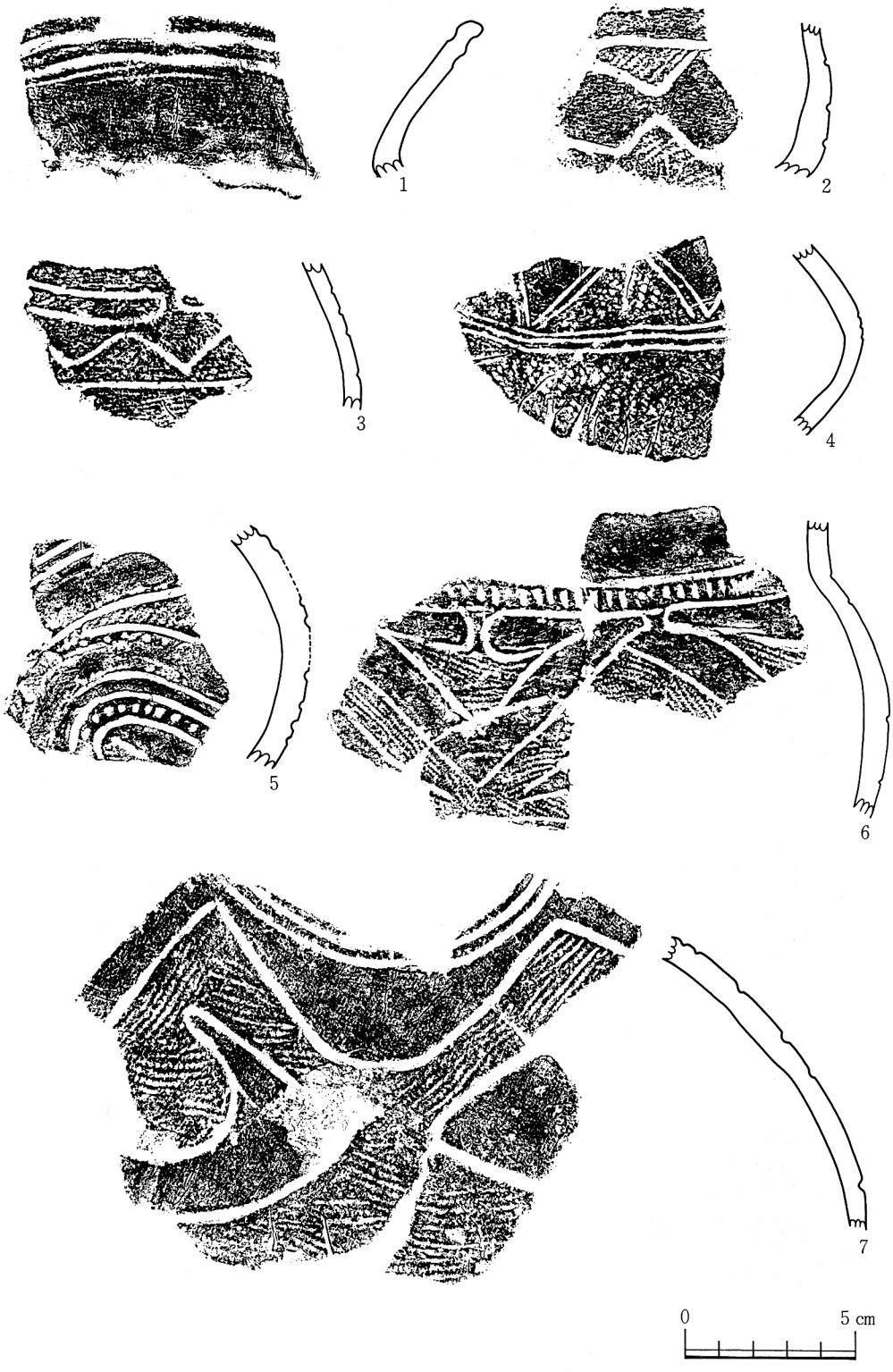
第24図　土　　器　　IIk類



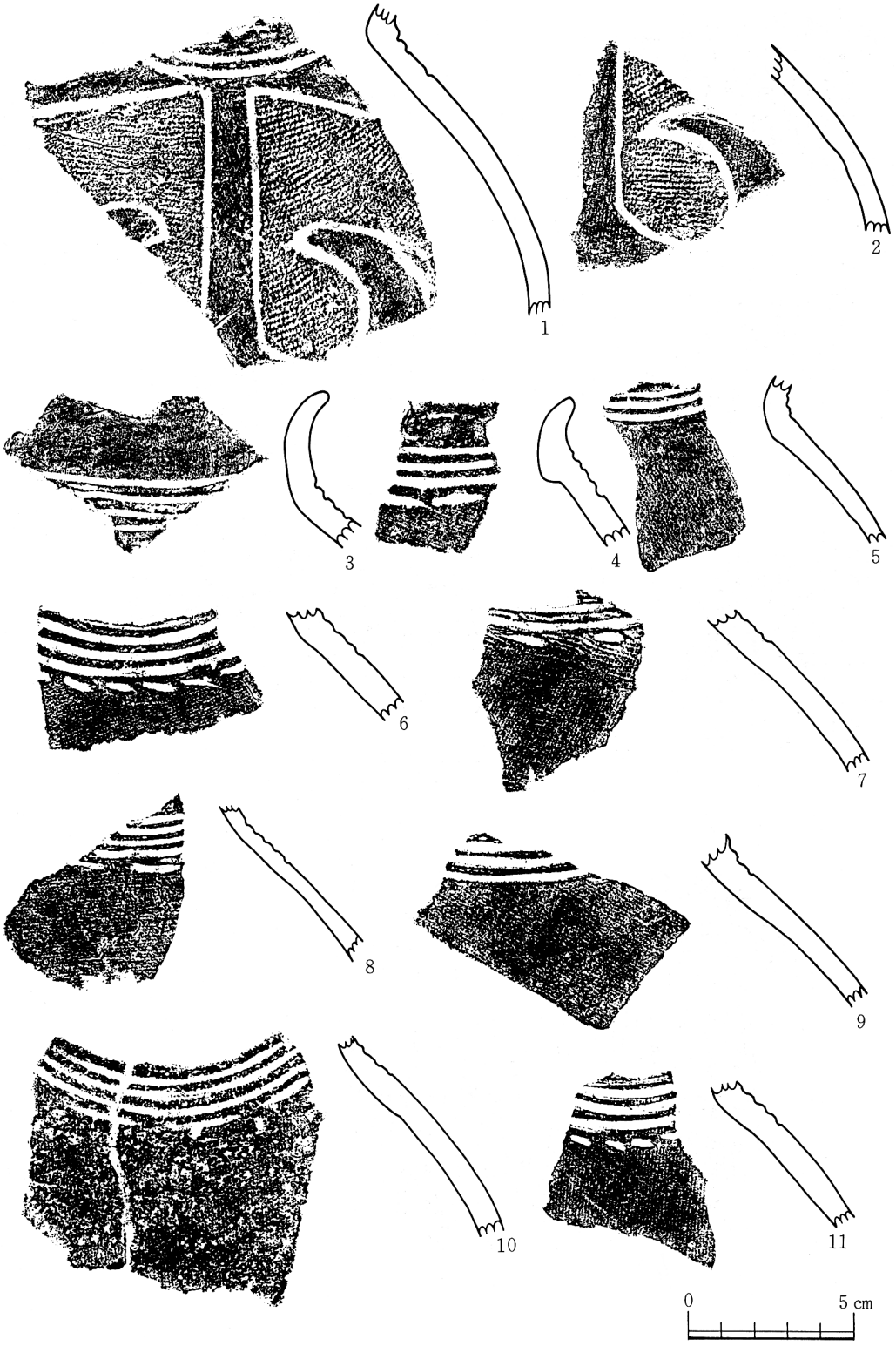
第25図　土　　器　　1～10, II ℓ類　11, II m類



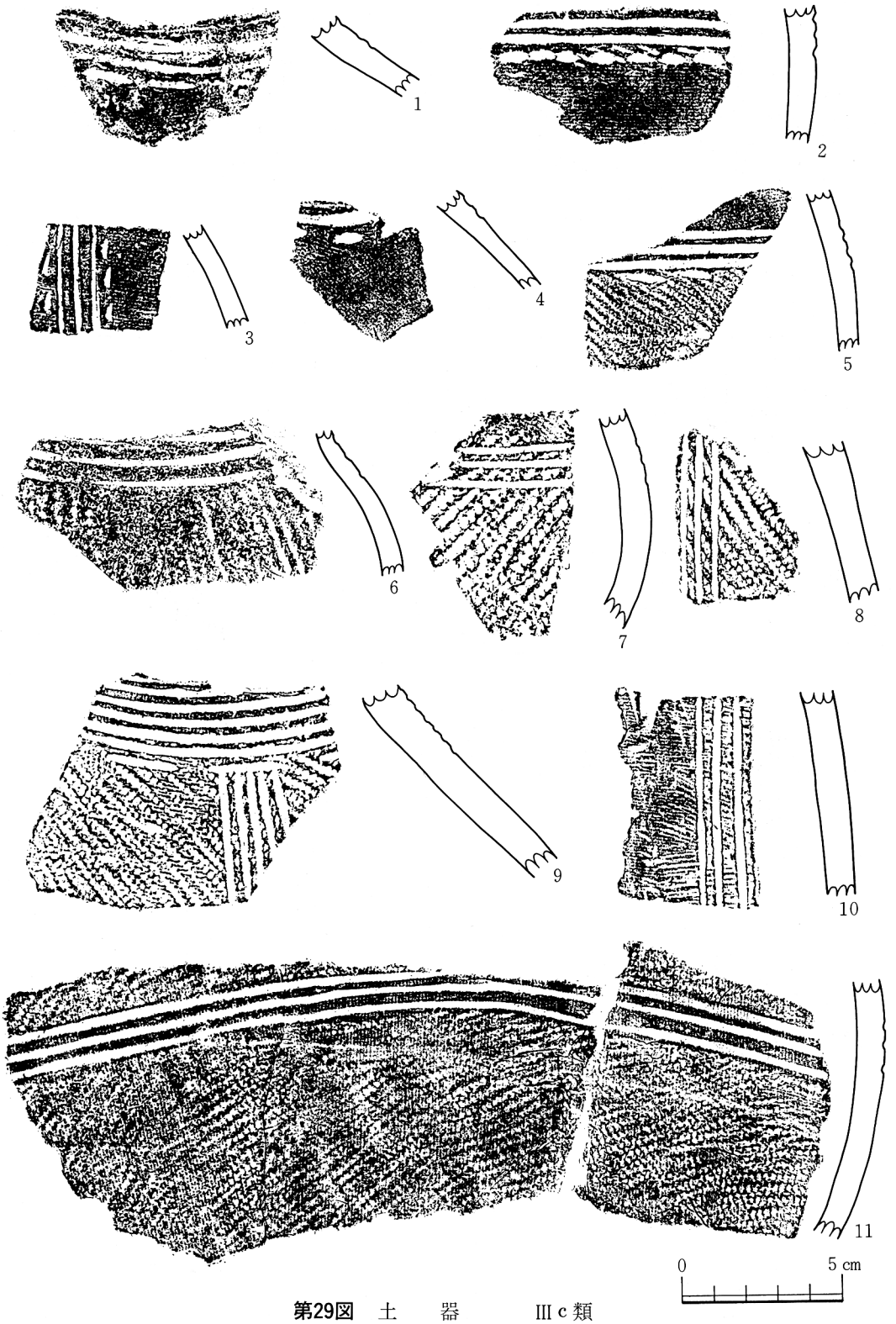
第26図　土　　器　　1～4, II n類　5 ・6 , II o類　7～9, II p類



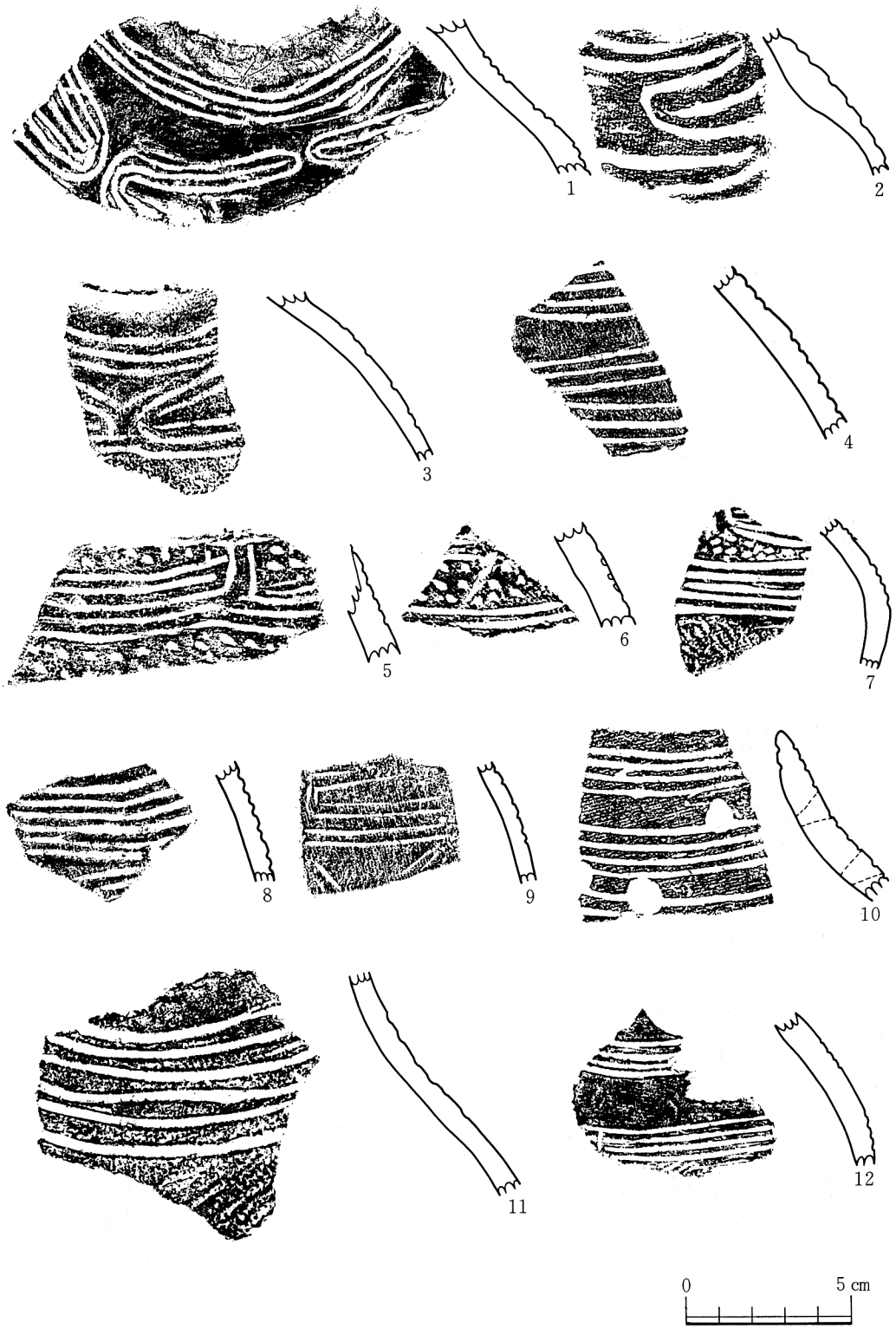
第27図　土　　器　　1, IIIa類　2～7, IIIb類



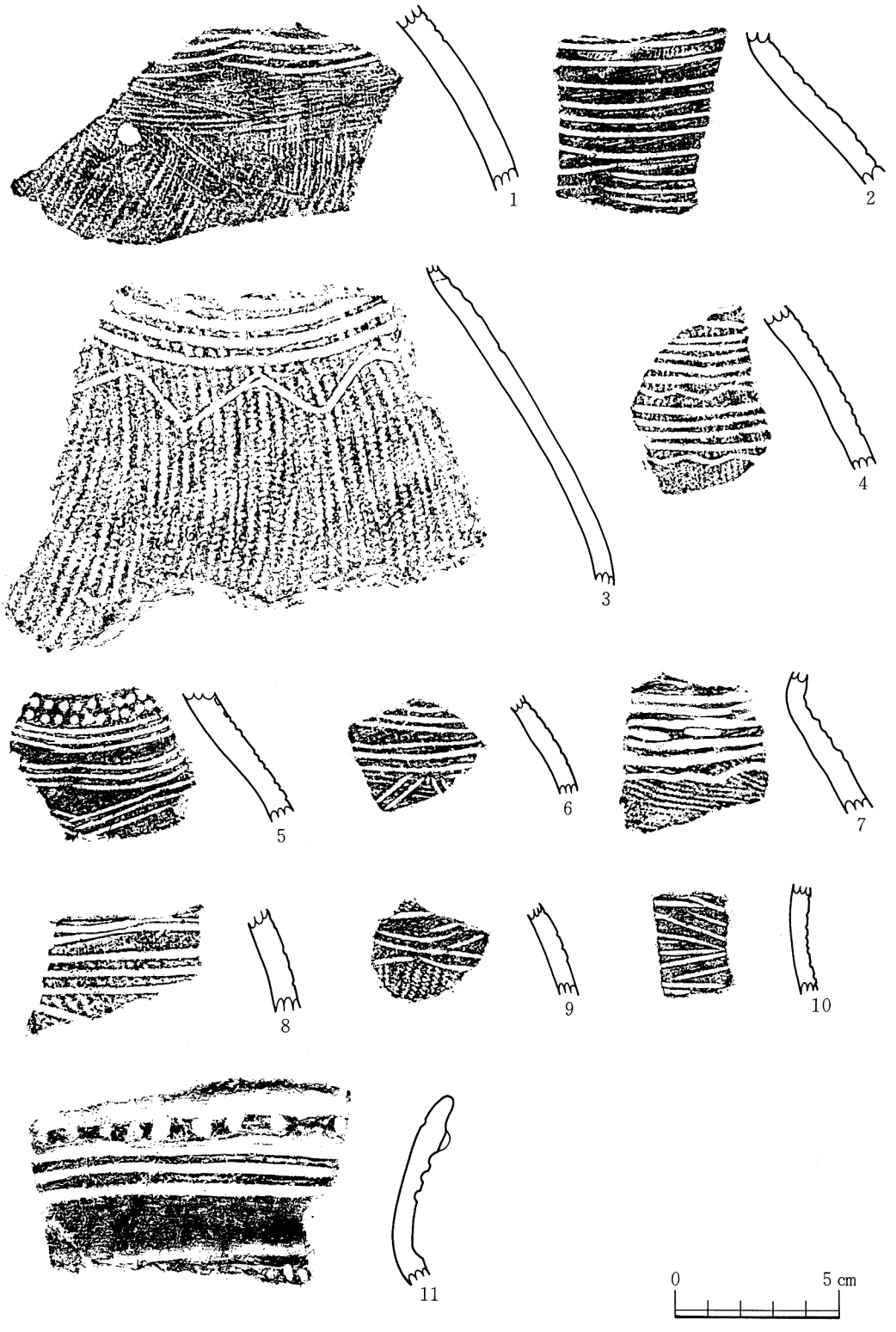
第28図　土　　器　　1・2, IIIb類　3～11, IIIc類



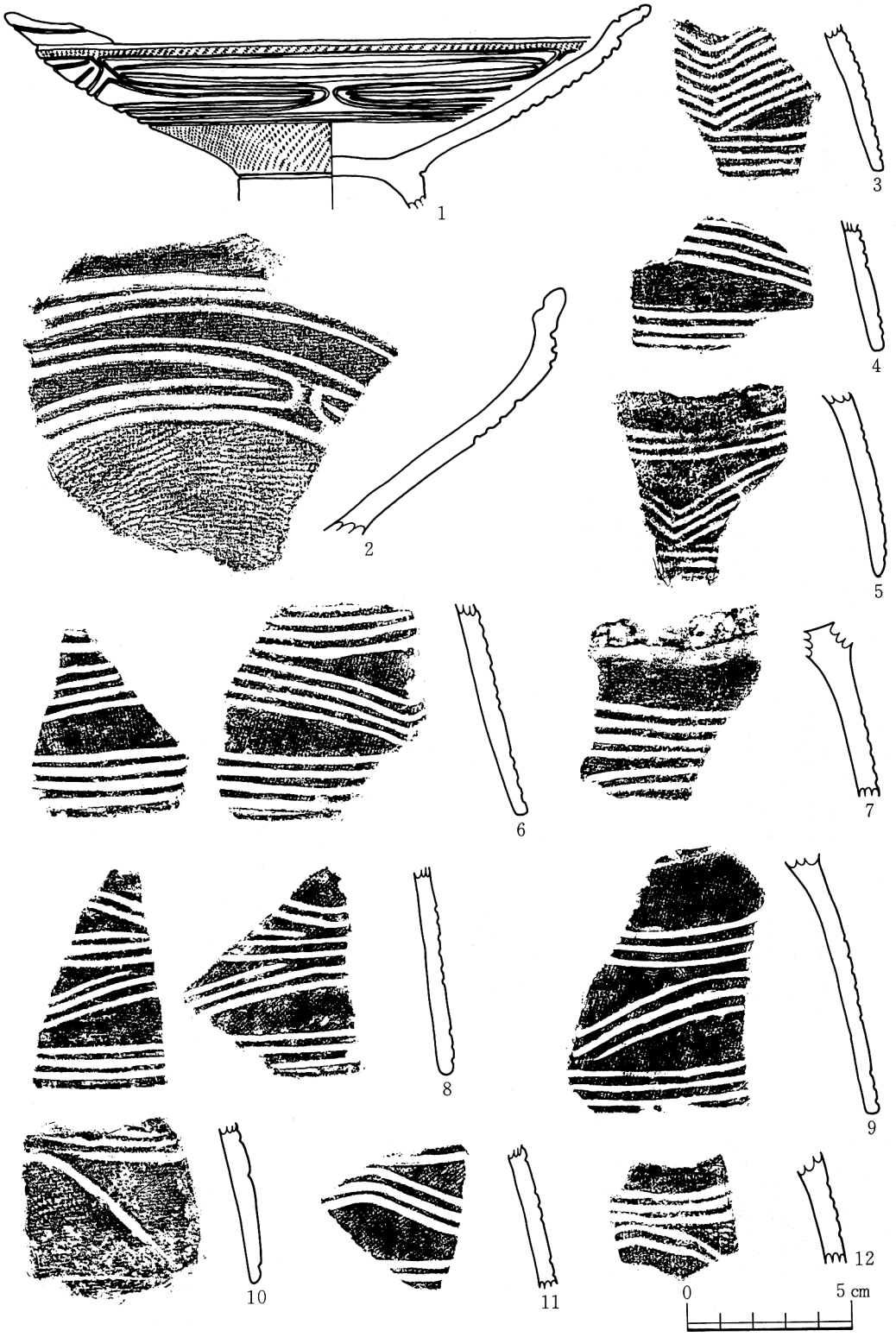
第29図　土　　器　　Ⅲｃ類



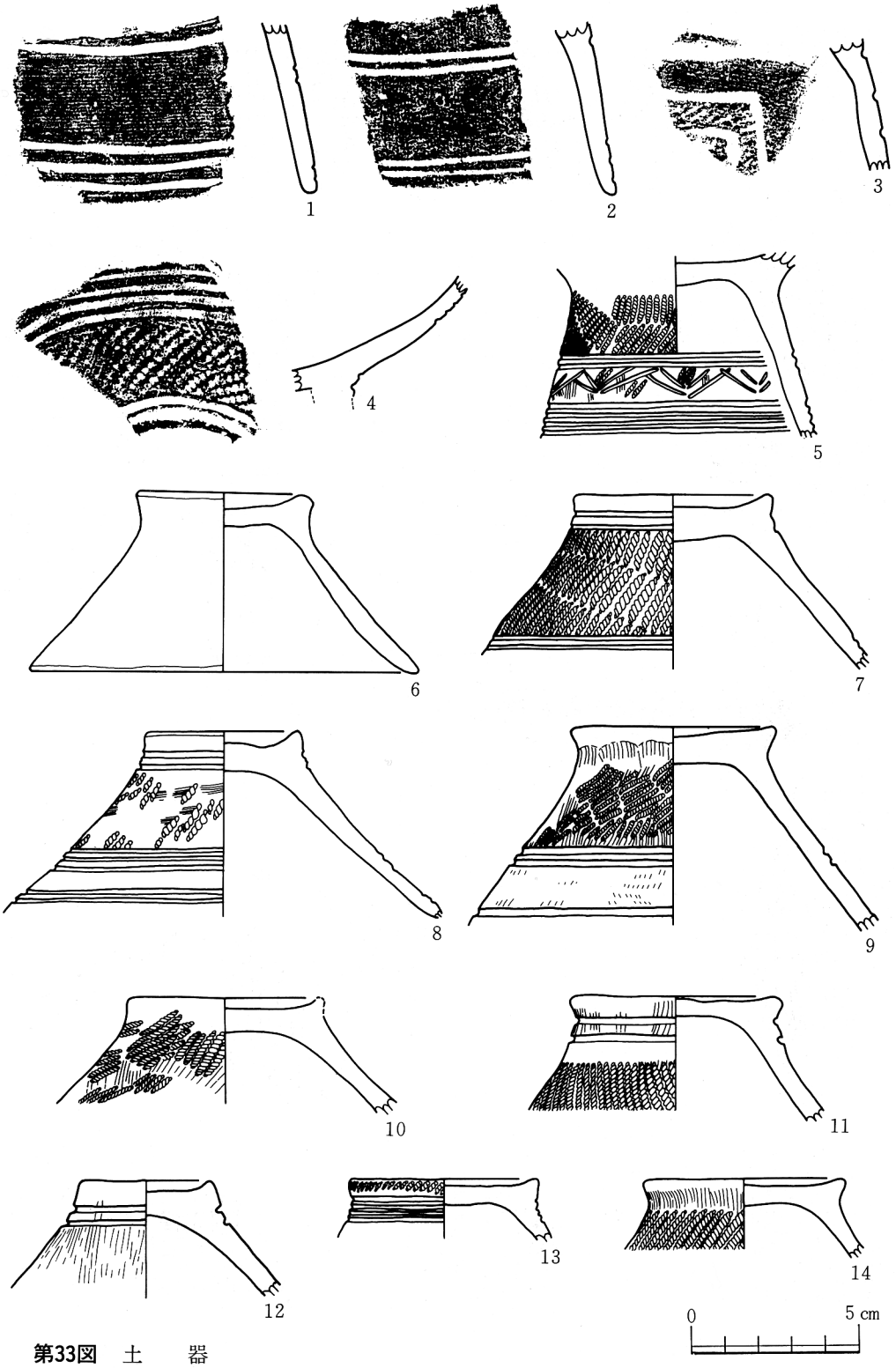
第30図　土　　器　　1～9, Ⅲd類　10, Ⅲe類　11・12, Ⅲf類



第31図　土　　器　　1・2, Ⅲf類　3～10, Ⅲg類　11, Ⅲh類

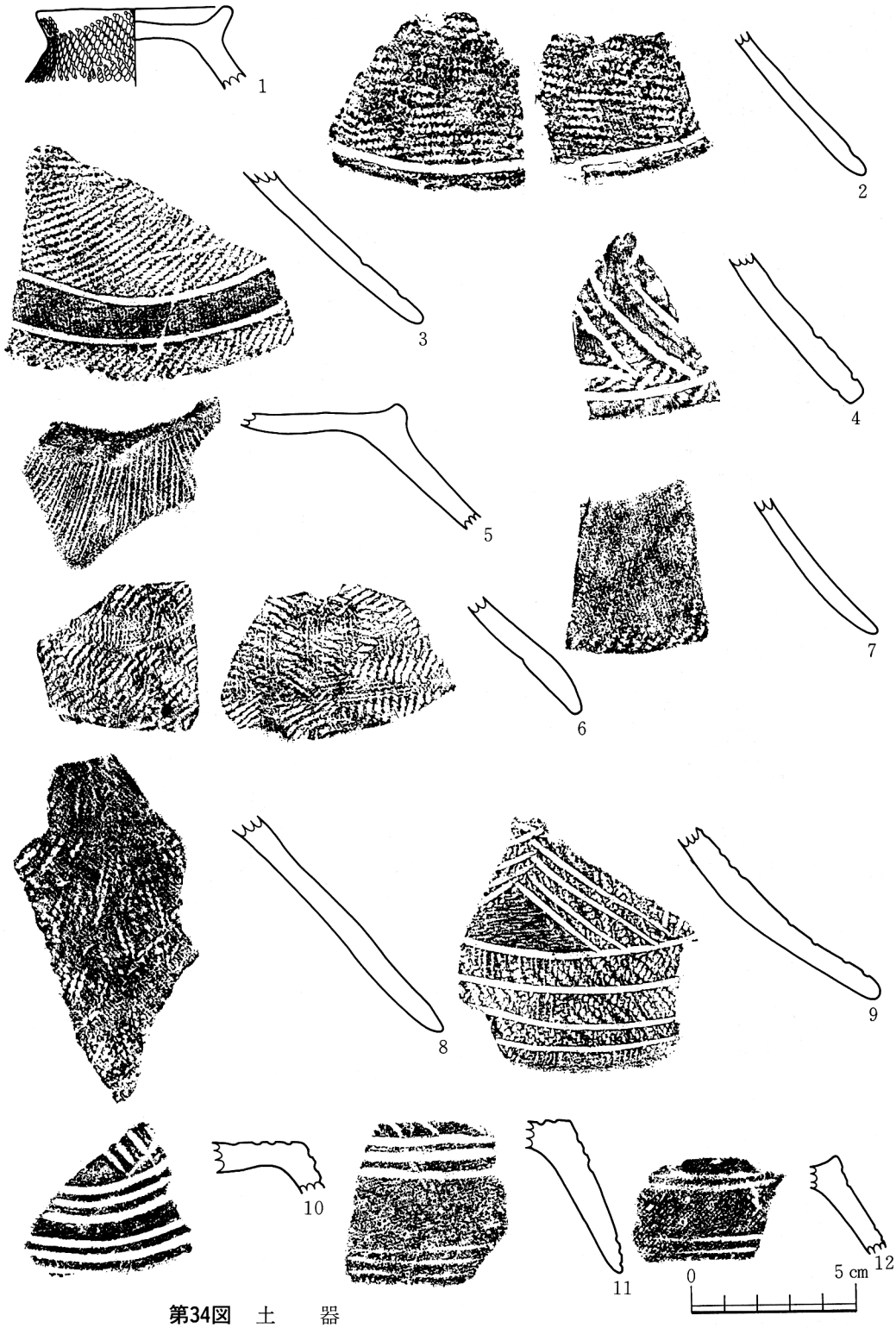


第32図　土　　器　　1・2, Ⅳa類　3～12, Ⅳc類



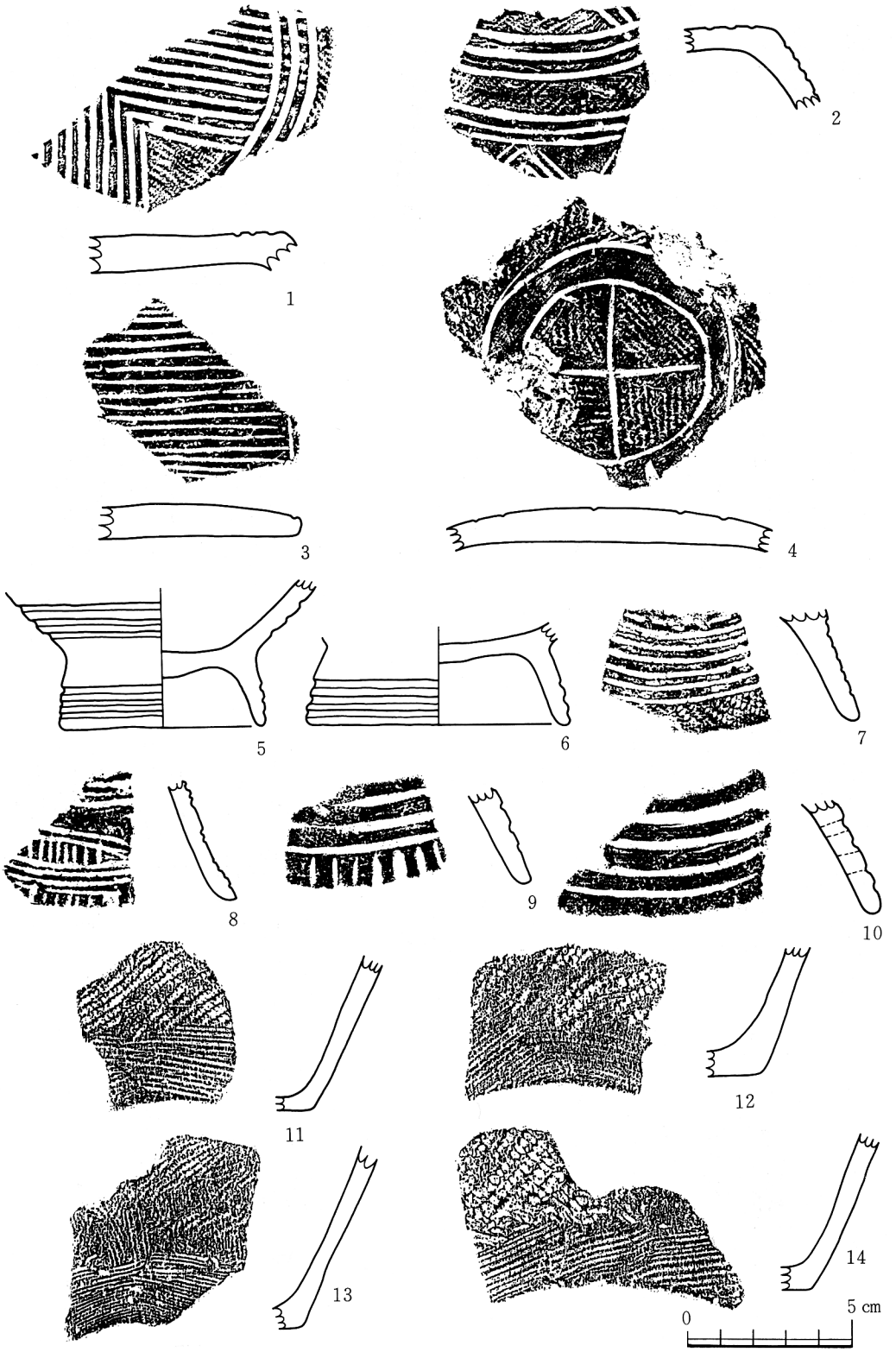
第33図　土　　器

1・2, Ⅳd類　3, Ⅳe類　4, Ⅳb類　5, Ⅳf類　6・10・14, Va_1類　7～9, 11～13, Va_2類

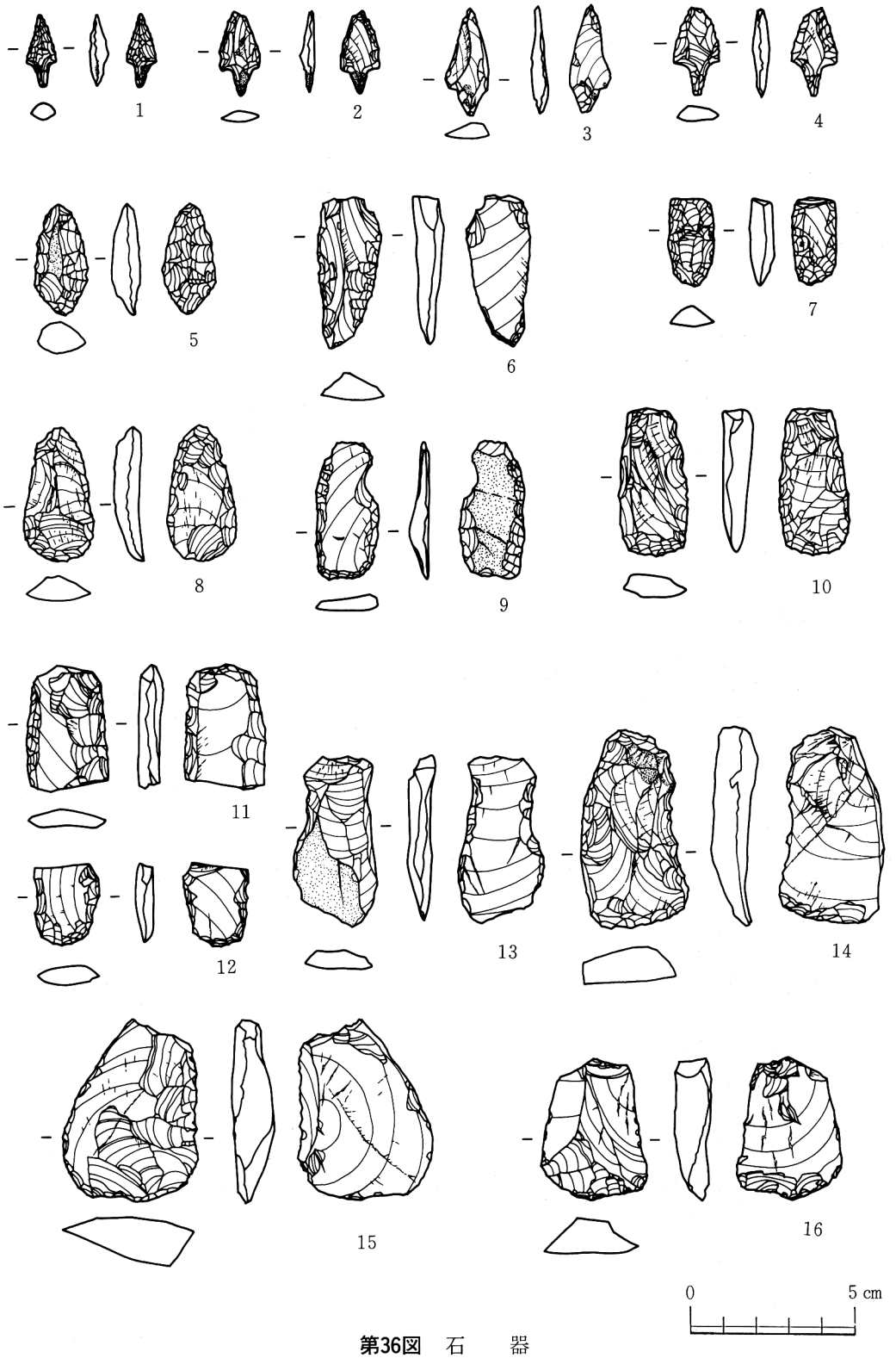


第34図　土　　器

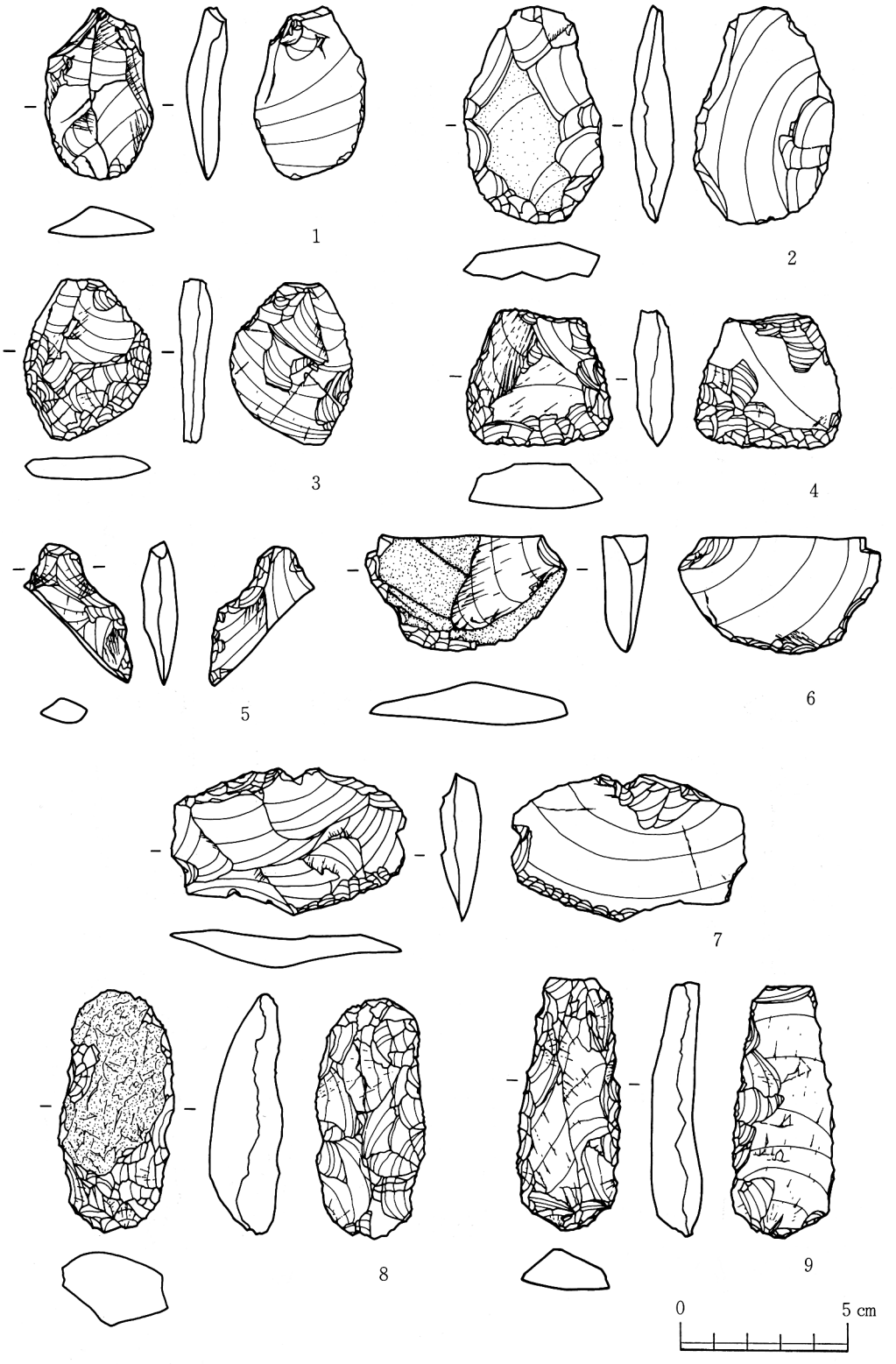
1・5～8, Va_1類　2・4, Va_3類　3・9, Va_4類　10～12, Vb類



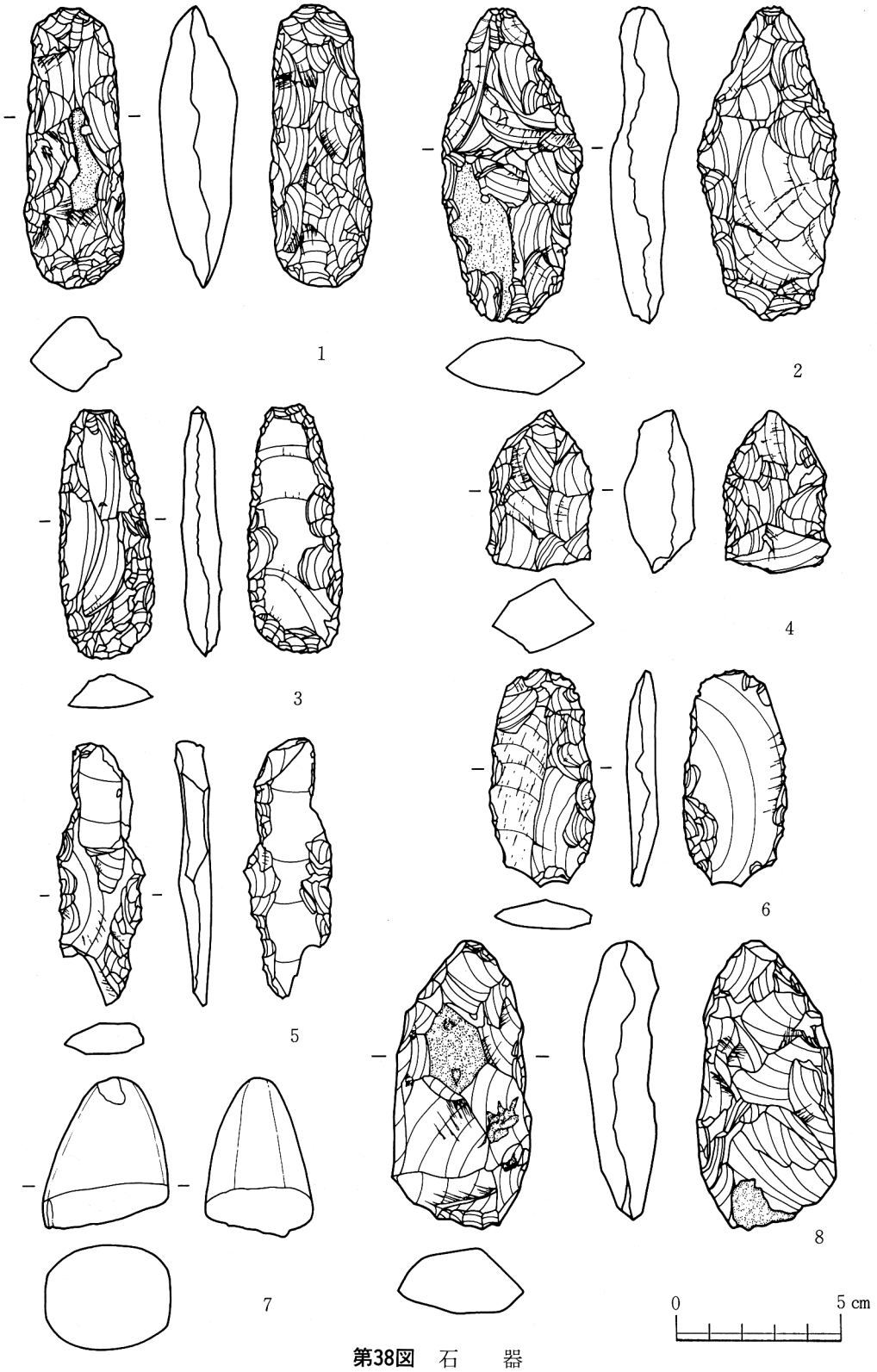
第35図　土　　器　　1・2, Vb類　3・4, Vc類



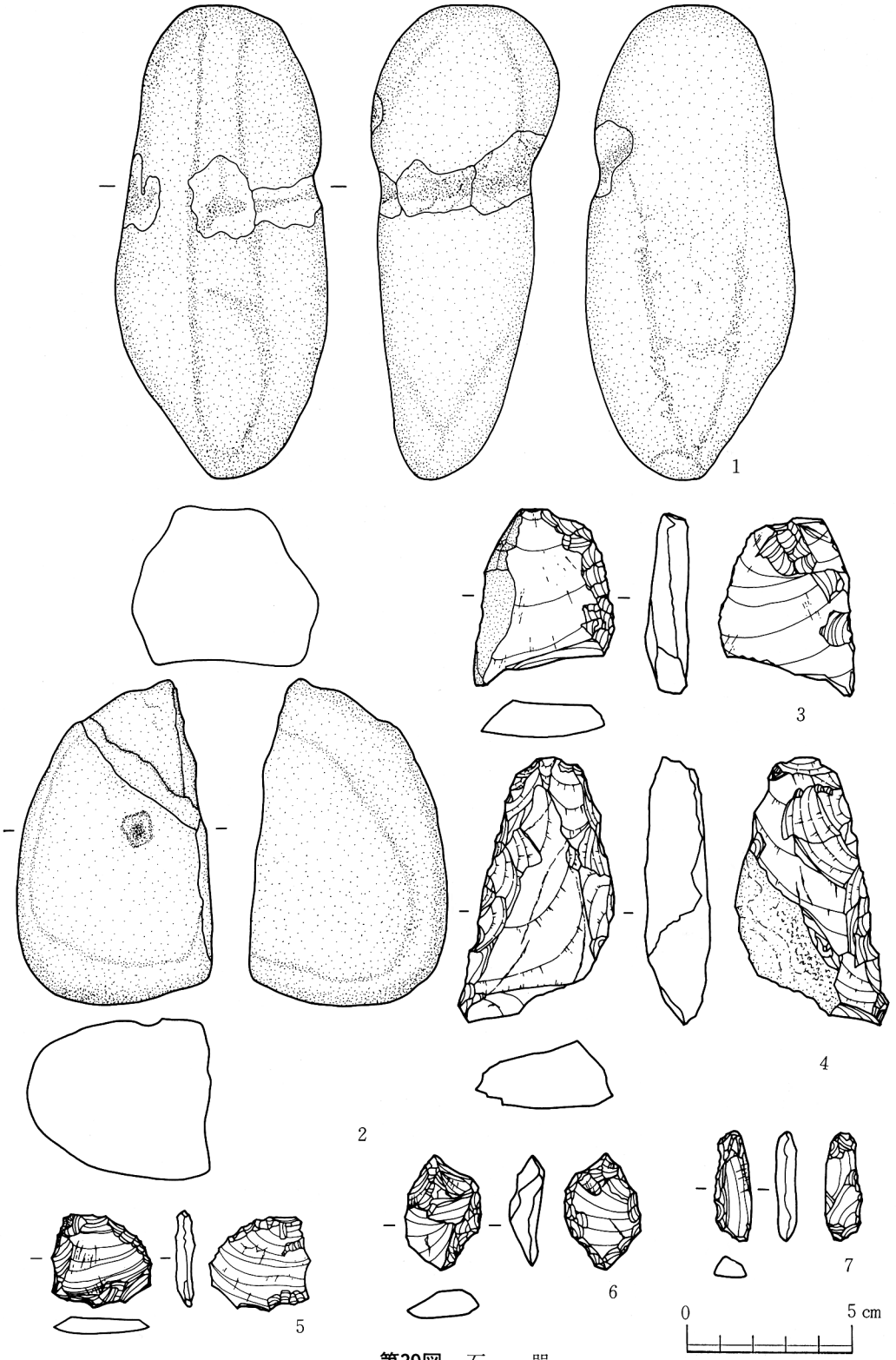
第36図　石　　器



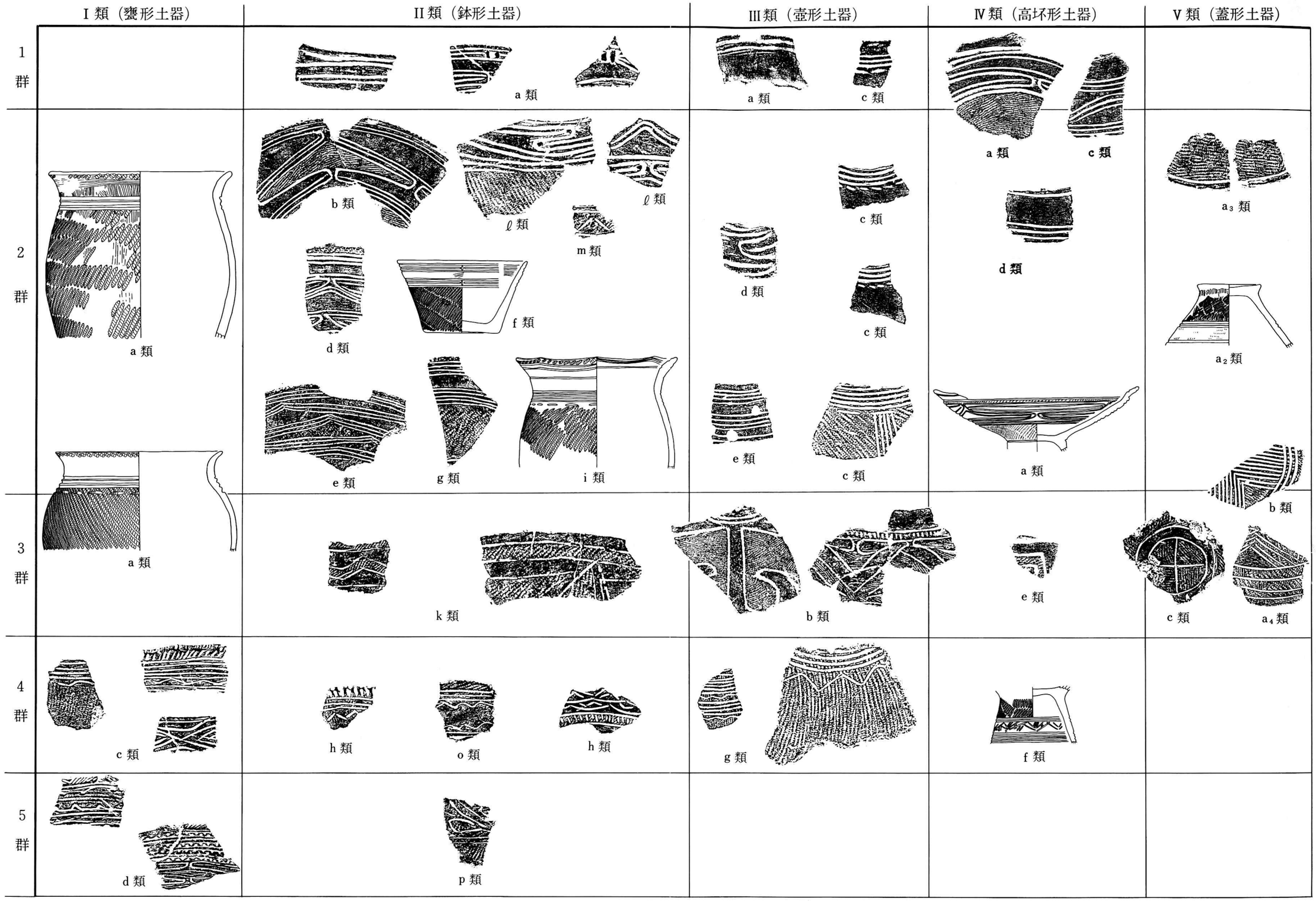
第37図　石　　器



第38図　石　　器

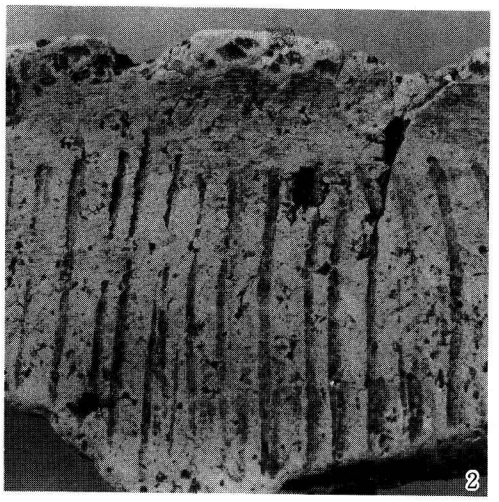


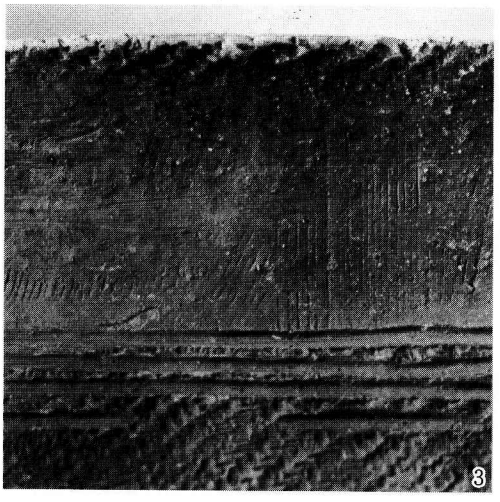
第39図　石　　器

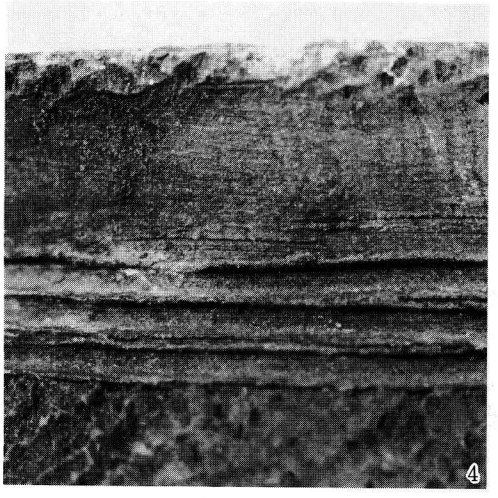


第40図　大倉遺跡における弥生土器の分類と編年

第一図版 弥生土器細部

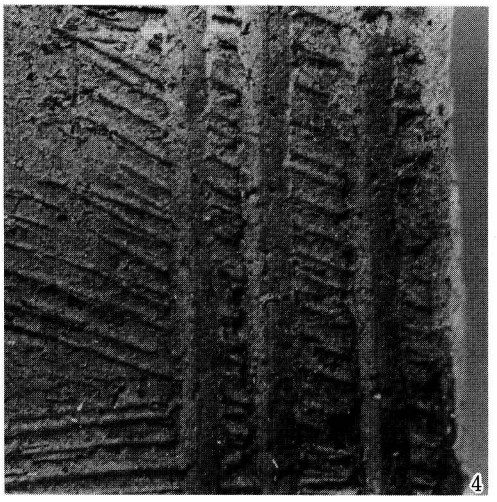


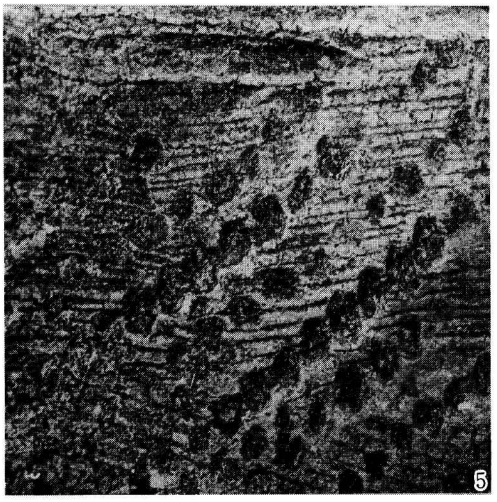




1・2 甕頸部の刷毛目　3・4 甕頸部の刷毛目→ヨコナデ
5・6 甕頸部の刷毛目→篦磨き

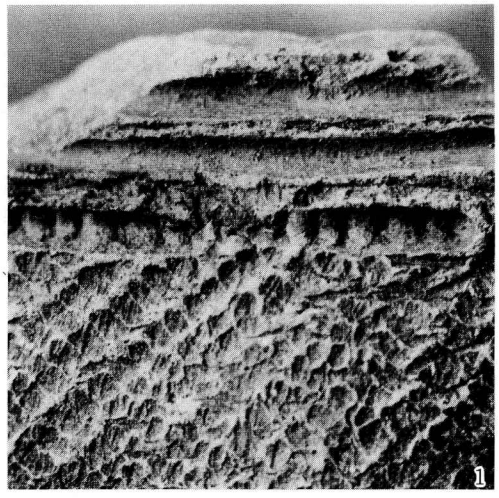
第二図版　弥生土器細部

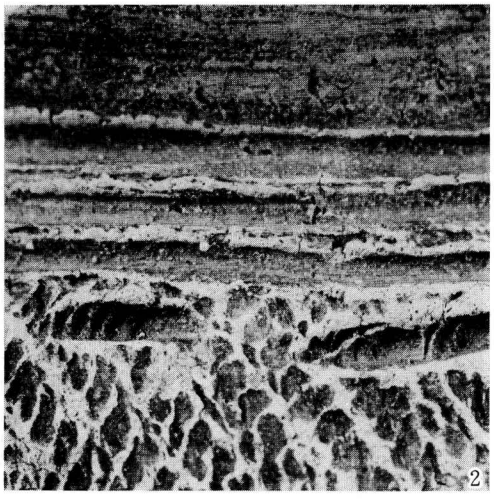


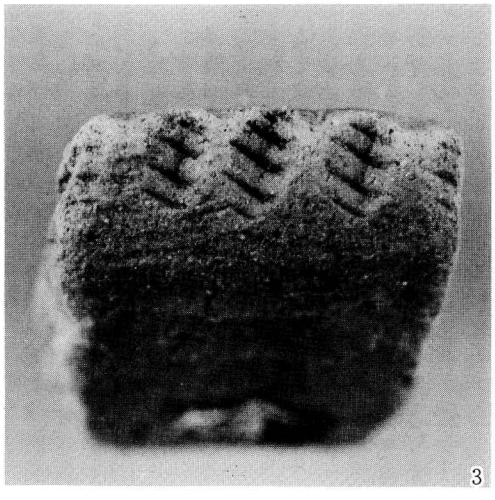


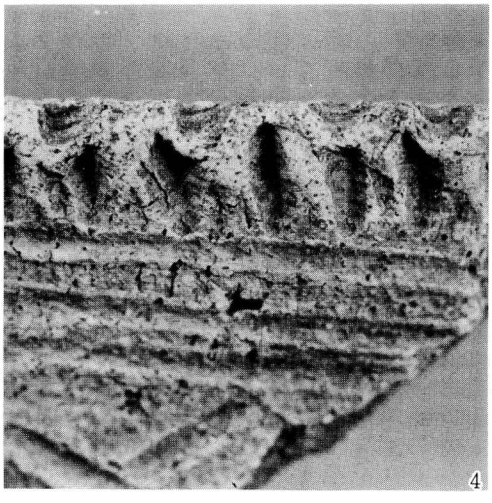
1・2　鉢の刷毛目→篦磨き　3 壺内面の刷毛目→篦磨き　4 壺外面の刷毛目→沈線
5 甕外面の刷毛目→縄文　6 甕内面の篦磨き

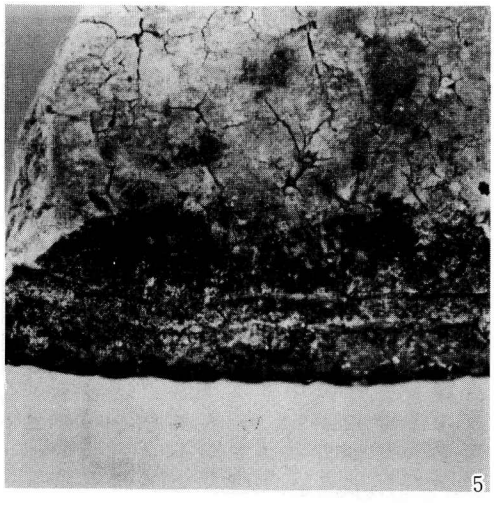
第三図版 弥生土器細部

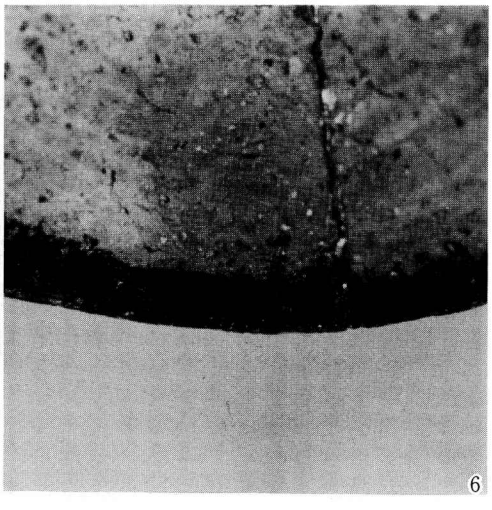






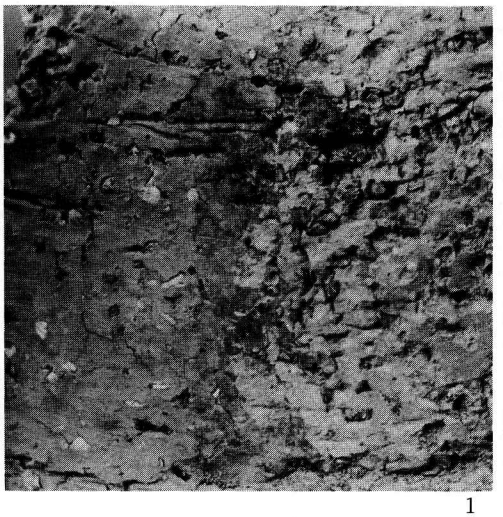






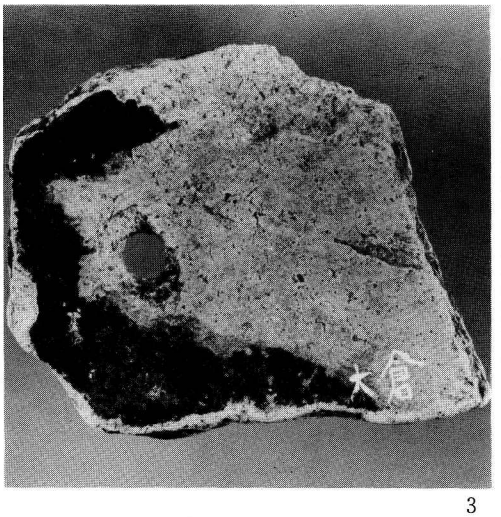
1・2 甕の木目列点文　3 鉢口縁部内面の木目刻み目文　4 鉢口縁部の木目刻み目文
5・6 蓋口縁部内面に付着した炭化物

第四図版　弥生土器細部

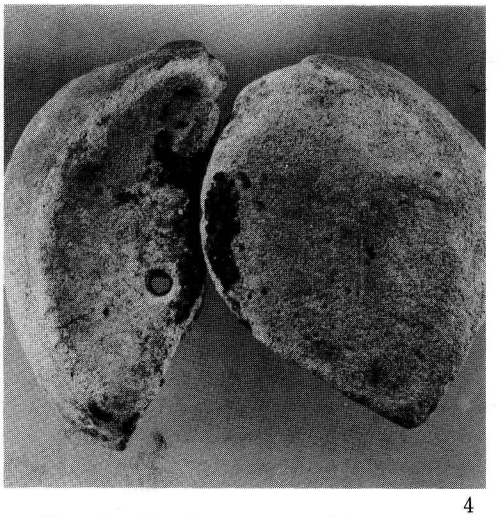


1

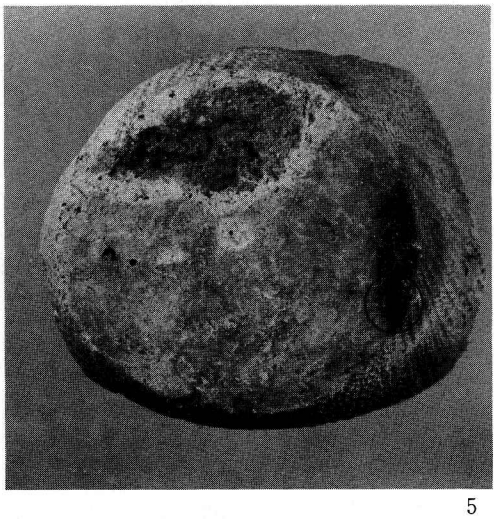
2



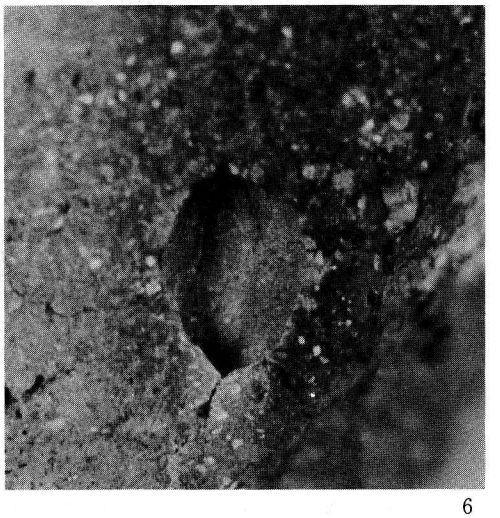
3



4



5



6

1 砂の混和　2～4 補修孔と天然アスファルト　5・6 底部の稲籾圧痕

発　行　昭和62年３月31日

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　第２号

発　行　　秋田県埋蔵文化財センター
〒014
秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話（0187）69―3331

印　刷　　秋田活版印刷株式会社
〒011
秋田市寺内字三千刈110番地
電話（0188）63―8484㈹